天上を目指す者

水平線

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天上を目指す者

【Ｎコード】
Ｎ６９４８Ｖ

【作者名】
水平線

【あらすじ】
吸血鬼であるアークノイルは戦いを求め天上の国に住まう最高神である女神ランカトゥーリスと戦うが、決着が着く前に別の事由により死んでしまう。
生まれ変わったのは数百年が過ぎた世界で、なんと人間だった。
前世の記憶を夢として見たアークノイルの生まれ変わりである人間アークは天上の国を目指すため、天上の国へと続く塔『バベル』の攻略に挑む。

※不快に感じる描写や言動がありますので（特に女性の方は）ご注意下さい。

プロローグ1

「神！　貴様の命運は尽きた！　この俺の万を超える軍勢が貴様の城の前に布陣している。逃げ場はない」

天上の国、神の住まう処『ヴァルハラ』
そこで最も高い場所に城が建っている。
金と純白が折り合い荘厳な雰囲気を醸し出すその城は天上の国を統べる神である最高神、女神ランカトゥーリスが住んでいた。
今、そこの城門の前には各々が武器や防具を纏った兵が並んでいた。
兵の中には人間をはじめとして獣の耳と尾を持つ獣人族や純白の翼を持つ聖天族、それぞれが特長的な角を持つ魔霊族など種族は多岐に渡るが、比率的に見ると若い女性が多いように思える。
だが、それらの軍勢の者達全てに共通してその瞳には覇気というものが見受けられない。

そんな中、ただ一人だけ意志の強い眼差しで神の城を見据える男がいる。
白銀の髪、質の良い黒い服と真紅のマントを羽織った見た目にして二十歳前後の男だ。

「貴様は絶対の神などと呼ばれていたが、それも今日までのこと。神などこの世に必要はない。これからは俺様が絶対の強者としてこの世の王となる！」

男は城の門の前で自信満々に堂々と宣言する。
誰も聞いてなくとも構わないといった調子だ。しかし、ここに住

まう神が話に聞く通りなら今の男の言葉も耳に届いていることだろう。

「既に貴様の配下もあらかた片付けた。抵抗せずにその身を差し出すのなら命まではとらないでやる。だが、俺は気まぐれだからな。早くしないと気が変わって抵抗せずとも殺してしまうかもしれんぞ」

男はそう言い放つとしばしの時を置くがその言葉に応える声が返ってくることはない。

「返答はなしか……ならば戦争だな」

男は喜悦の浮かんだ顔をしながら近くに控えていた女に自分の得物である槍を差し出させそれを手に持つ。

男は女神の返答を期待してはいなかった。いや、むしろ返答などして欲しくはなかった。

彼が求めるのは戦い。

それもただの戦いではなく自身の血が踊るような戦いだ。

きっと絶対の神と呼ばれる女神ならば自分の求めるような素晴らしい戦いを繰り広げることができるに違いない。

それだけのために彼は誰もが敬い、崇め奉るランカトゥーリスという女神にケンカを吹っかけたのだ。

天上の国へと進攻し、ランカトゥーリス以外で神と呼ばれる存在を殺し、または従えた。

そう、彼の軍勢の中には神と呼ばれる存在もいるのだ。

「さあ、出来るだけ俺を愉しませてくれ」

男はそう呟くと彼の軍へと固く閉ざされた門をこじ開けるよう指令を出そうとする。しかし、彼が指令を出す前にその門が開いてゆ

く。
そしてそこから二人の女性が出てきた。一人は腰ほどまである長い金色の髪のおっとりとした眼差しの聖天族の女性。白と蒼の入り混じった鎧に身を包み、その腰には一振りの剣が凪いでいる。
そしてもう一人は赤毛をポニーテールにした男に負けず劣らずの意志の強い眼差しの女性。
彼女は白を基調とした清楚なドレスを着て悠然と男へと向かって歩いていく。
その姿は人間となんら変わらない特長を持っていながら、男が今まで会った誰よりも威厳と優美さを兼ね備えていた。
あれと比べれば全ての生物など塵芥の存在に過ぎない。
そう感じさせるものがある。

―自分を除けば―

「よう、はじめまして。あんたがランカトゥーリスだな？」
「ええ」
男の問いに女神ランカトゥーリスは微笑みながら応えた。
「俺は……」
「アークノイル＝グランスハード。吸血鬼にして魔霊族の王ね」
男の言葉の先をランカトゥーリスは先んじて言ってしまう。
アークノイル＝グランスハード。天上の国の遥か下に存在する地上の国において誕生した吸血鬼。
その力は他の同族達と隔絶し、元来角の数で力の程が分かるとされる魔霊族において、生まれながらにして三本の角を持っていた異端児。

そんな出生もあってか将来を渇望されながらも自分の生きたいように生きて、遂にはあると知りながらも地上の国に住まう者では誰も辿り着くことの出来なかった天上の国へと辿り着き、あまつさえ最高神に現在進行形でケンカを売っている男。

「魔霊族の王というのは的確ではない。一部の者がそう呼ぶだけだからな。それに、そんな矮小なものに興味などないからな。俺は貴様を倒して全ての王になるのだからな！」

「随分な言い草ね」

アークノイルの言葉にランカトゥーリスはため息混じりに言葉を返す。

「それに一緒に連れてきたお友達も多いようだけど、全部貴方のシモベかしら？」

「当たり前だ」

吸血鬼であるアークノイルは基本的には他者から血を吸うが、自身の血を与えることでその者の心や行動を支配することができ、支配された者のことをシモベと呼ぶ。

しかし、それは自身より力の劣る者にのみ限り発揮する力であり、尚且つ支配することができる者の上限も吸血鬼としての力に比例している。

通常百体前後が吸血鬼として支配できるのが吸血鬼という種族の限界であるのだが、アークノイルのシモベは万を超え、中には神と呼ばれる存在もいることから彼がいかに規格外なのかが窺える。

「賛同を得たわけでもなく、自分のエゴで強制的に人を従えるのは感心しないわね」

「はんっ、弱い奴が悪い」

ランカトゥーリスの言葉をアークノイルは鼻で笑って返した。
アークノイルは何も無作為にシモベを増やしているわけではない。
自らや自身のシモベと戦い、負けた者をシモベとして手駒に加えるといった実にわかりやすい方法だ。
その中で女が多いのは基本的にシモベにするなら男よりも女という思考(嗜好)があることや男はある一定以上の力を持った奴じゃないと絶対にシモベにはしないと心に決めているからである。

「本来なら天上の国へ辿り着いた地上の国の者へは、天上の国への居住権と願い事をなんでも一つだけ叶えてあげるんだけど……いる？」

ランカトゥーリスの問いにアークノイルは首を横に振って応えた。

「でしょうね。貴方が望むのは戦い。しかもそれは私への願いではなく挑戦」
「挑戦？　冗談はよせ。その言葉は下の者が上の者へと挑む場合に使う言葉だ。俺はただイキがってる雌豚の鼻っ柱をへし折って調教しにきただけだ」
「調教？　私を？　そりゃまた傲慢ね」
「傲慢かどうかはすぐにわかる」

アークノイルは槍を持つ手を頭上高く挙げる。
これを振り下ろせば、忽ち万を超える軍勢がランカトゥーリスの城へと攻め込む。
本当ならばもっと多くの神や聖天族の兵が詰めていると思っていたアークノイルだが、出てきたのはランカトゥーリスと聖天族の女性の二人のみ。それ以外の者は姿が見えない。
まあ、他に誰がいようが瑣末な問題だ。なにせアークノイルの目

的たる者は目の前に居るのだから。
彼女が出てきた以上その他の雑魚に用などない。
ランカトゥーリスさえ倒せば自分こそが世界の頂点だ。

「奴を殺せ」

槍を持つ手を振り下ろす。
槍の切っ先はランカトゥーリスへと向けて掲げた。
途端、まるで鎖に繋がれた狂犬が解き放たれたかの如く、万を超える軍勢が一斉にランカトゥーリスへと向かって行く。
その瞳は何者も映すことはなく、ただただ主たるアークノイルの言葉に従うシモベの姿がそこにはあった。

正々堂々。
この場合はランカトゥーリスとアークノイルの一騎打ちになるのだろうか。
そんなことをする考えなどアークノイルには毛頭ない。
自身の勝ちを色濃くするためなら何でもする。ただ一匹の蟻を踏み潰すのでさえ巨象を用意し、自分はその姿を眺めるだけだ。
別にアークノイル自身の戦闘力が弱いからというわけではない。
巨象は自分が従えたものであるから蟻を殺したならそれは自分の手柄であるし、別に巨象が蟻を殺せず逆に殺されようとも自分は疲れきった蟻を殺せばいいだけだ。
アークノイルは自身の血が踊るような戦いを求めてはいるが、強い奴と心行くまで拳を交えたいわけではない。
要は愉しい戦いを欲しているのだ。
そして彼にとって世界をとるために絶対の神と呼ばれる天上の国に住む最高神との戦いはただそれだけで愉しい。
だが、負けるのは想像するだけでも不快になる。だから少しでも勝率を上げるに越したことはない。

「まったく……喧しいことこの上ないわね」

しかし、アークノイルの考えは甘かったと言わざるを得ない。
煩わしそうにランカトゥーリスが手を振った。ただそれだけで万はいた軍勢の半分以上が消し飛んだ。

「残念だけど塵をいくら集めて山を作ろうと元が塵なのだからこうやって手を振って大きな風を起こせばどっかに飛んでっちゃうのよ？」

そう言ってランカトゥーリスがもう一度手を振るとさっきと同じものを見ているかの様に人が消し飛ぶ。
残ったのは百にも満たないほどの軍とも呼ぶのもおこがましいほどの人数。

「あら、今ので終わったかと思ったけどまだ残ったのがいるのね？
……ああ、私と同じ神か」

確かに今残っているのは天上の国に入ってから捕らえた神と呼ばれる者達だ。
しかし、『違う』とアークノイルは思った。
確かに残ったこいつらも神ではあるが、ランカトゥーリスとは全く『違う』
神と同列に扱うのは間違っている。
それだけの力の差が神達とランカトゥーリスの間にはあった。
その証拠に神達のほとんどはランカトゥーリスの攻撃の前に足や腕などの体の一部を失ったりして戦闘不能状態に陥っているのだ。
残ったというのは生き残ったという意味で戦える者となると両手足の指で数え切れるほどしかいないだろう。

「……予想外だ」

アークノイルが呟く。
巨象が蟻を踏み潰すところを遠くから見る？
否、そもそもの例えが間違っていた。
ランカトゥーリスは蟻ではなく竜。
象など爪を振るうだけで容易く殺してみせるのだ。

「思ってた数倍愉しめそうじゃねえか」

予想外だったのは女神の強さもそうだが、何よりもこれから始まる—正確には既に始まっているのだが—戦いに対する期待値だ。
アークノイルの胸に渦巻く感情は驚愕よりも歓喜だった。

「おら、雑魚共。さっさと立ち上がって女神に殺られてこい」

傍に座り込む神の背中を蹴って、進軍を促す。
最早、生き残った者達がランカトゥーリスを殺せるなどとは思っていないが、手札を見せる役割と余力を削ぐ役割位はこなせるはずだとアークノイルは考えていた。

「……アディーナ、雑魚を片付けるのは貴女がやりなさい」
「了解しました」

ランカトゥーリスが傍に控えていたアディーナと呼んだ聖天族の女性にそう告げると、それにアディーナは恭しく応え、腰に凪いだ剣を鞘から抜く。
それを見てアークノイル自身の思惑が外れたことを直感的に感じた。

アディーナはどう見ても聖天族だ。聖天族は神に近しい存在であり、翼を持つことから天上の国への居住を許されたただ一つの種族である。
また、そのため神の住まう天上の国へと至るための重要な情報源である。そのため、アークノイルも少々強引に聖天族の情報を集めて捕らえもした。
ただ、神の成りそこないと揶揄される言葉も存在し、文字通り神には遠く及ばない。
目の前のアディーナも聖天族の中では優秀なのだろうがその例に漏れず神に及ぶほどの力は持っているようには見えない。
ただ一つその手に持つ剣を例外にしては――

「アーティファクトか」

それも公爵級だろうとアークノイルは予想する。
神々が齎した英知と言われるアーティファクトは上から順に皇帝・公爵・候爵・伯爵・子爵・男爵の六つの階級がある。神々が齎したと言われているがその証拠はなく、また今ある以上に生み出せないことから大変貴重な品で一番下の男爵級でさえ人間一人が一生暮らしていけるだけの金額で取引されることもあるほどだ。
そのような物の中でも公爵級とまで来ればその能力や破壊力などは想像するだけでも恐ろしい。

「さあ、起きなさい《ソウル・イーター》」

アディーナがアーティファクトを起動する。起動言語に反応し起動したアディーナのアーティファクトがその刀身を鉄色から漆黒に染め上げる。

「清浄なる者とか言われてる聖天族の女のアーティファクトが真っ

黒とか傑作だな」

きっと腹の中はどす黒いに違いないと想像してアークノイルは笑い転げそうになる自分を必死に堪えていた。

そして一人の聖天族の女性による神の蹂躙が始まった。

プロローグ2

アディーナと呼ばれた聖天族の女性は例えるならば暴風であった。
吹き荒れる嵐の如く手にした剣で神達を屠っていく。
アークノイルのシモベとして総てを支配されているが故に断末魔の悲鳴をあげることはない。
しかし、耳を澄ませばそれらが聞こえてきそうなほどに彼女の攻撃は容赦がなかった。
ある神は一刀のもとに首が飛び、またある神は頭から下半身まで縦一直線に裁断された。
その容赦のなさにアークノイルは感嘆すると共に期待を込めた瞳でその様子を見守る。
自分が支配下においているが故に神達の攻撃というものには知性というものが欠けており、素直な攻撃ばかりでありかわすのは容易い。しかし、その神の体を切り裂くのは並大抵の武器ではダメだ。それを可能にしているのは彼女の持つアーティファクトのお陰だろうが、公爵級のアーティファクトがただ敵を切り裂くためのものであるはずがない。
一体どんな能力を秘めているのか。
アークノイルの期待はただそこに込められている。

だがその期待虚しく神達との戦いで彼女の持つアーティファクトがその能力を発揮することはなかった。
アディーナはただ一つ、己の剣技のみで生き残っていた神達の全てを倒してみせた。

「なるほど。聖天族にしてはなかなかやるようだ」
「貴方に操られ、心を無くした者の刃など私には届きません」

アークノイルの賛辞に眉一つ動かさず、さも当然だというばかりにアディーナが応える。

「確かに。理性なき刃など獣のそれと同じだ。本来ならばもう少しどうにか出来たのだが、神という存在は少々厄介でな。多少強く支配した。まあ、所詮は使い捨ての駒にすぎんからどうとも思っていなかったのだが、流石にランカトゥーリスどころかお前ごときにも手傷の一つも付けられないとは考えていなかった。

所でついこの間まで味方であった者達をその手にかけた気分はどうだ？」

「どうとも思いません。ランカトゥーリス様に剣を向けた以上、例え神であっても敵ですから」

アディーナはそう断言する。

剣を向けた以上は敵。では、槍を向けた自分も敵か？　と会話の揚げ足をとって相手を皮肉ろうかと考えたアークノイルであったが寸前で言葉を留める。

目を向ければアディーナが強烈な殺気をアークノイルに叩き付けていたのだ。

皮肉るまでもなく彼女にとっては自分も敵なのだ。

「最早謝っても許しません。貴方にもここで死んでいただきます」

そうアークノイルに告げるとアディーナは一直線にアークノイルへと向かって駆けてくる。いや、駆けてなどいない。彼女は背に持つ翼を広げて低空飛行しながら迫ってきたのだ。

そうして近付いてきて振るわれた剣の一撃をアークノイルは槍で受け止める。

「予告なしとは品がないな、女」

「既に戦いは始まっています。開戦を告げたのは貴方でしょう？」

最もな話だ。

先にシモベを使って殴り掛かったのはアークノイルの方で彼に品がないと言う資格などない。

だが、アークノイルはそれを解った上で発言し、アディーナをおちょくっているに過ぎない。

「雑魚が更に雑魚っぽくなった輩を殺しただけで態度がでかいな。まあ、不意を打っての攻撃は実力が上の相手に対しては正しい選択だ。だが、それで仕留められなかったのは愚かだな」

「何を！」

剣線が一線、二線、三線と疾る。

だがそれをアークノイルは涼しい顔で受け止めていく。

「はぁはぁ……喰らいなさいっ！」

アディーナの渾身の一撃でさえも結果は同じだった。

「こんなものか……」

アークノイルの落胆したような声はアディーナの神経を逆なでするには十分だった。

「だったらこれはどうですっ！」

アークノイルの槍の間合いから一歩ほど離れた所へと立ったアディーナはそれまでとは違う構えをとる。

体を半身にし、剣の切っ先をアークノイルへと向けた姿勢。紛れ

もなく突きの構えだ。そしてアークノイルが訝しんだ隙を見逃さず一気に間合いの中へと踏み込んだ。
そこから繰り出されたのはやはり剣による突き、だがそれはただの突きではない。目にも止まらぬほどの高速の突きだ。それが同時に五つ。
＜三段突き＞という攻撃の技術。一般にはスキルと呼ばれるものをアディーナの日々の研鑽により更に昇華させた彼女自身の最高の業
＜五段突き＞
一度振るえば、例え万全の神であろうと射殺す必殺の一撃は、しかしアークノイルに届くことはなかった。

「いいね。三段突きまでは見たことがあったが、それは初見だ。だが、神には届くであろうその刃も俺には届かない」

アークノイルは目の前で不自然に止まった剣の先を見つめながら言う。
その刃はまるで不可視の壁に阻まれているかのようだ。

＜金剛壁＞

アークノイルの持つスキルの中でも最も防御力の高いもので、体の周りに不可視の壁を作るスキルだ。これはこと物理的攻撃には正に鉄壁の盾となる。

「くっ……」

アディーナが悔しそうに歯噛みしながらアークノイルとの距離を離れる。
遊ばれている。そう感じるしかないアークノイルの所業にますます悔しさが募る。

自身の最高の業を持ってアークノイルを刺し殺したとアディーナは思っていた。しかし、剣は壁に阻まれアークノイルに届かない。そしてそのことに驚愕する自分は隙の塊みたいなものだった。だが、自分には未だ傷一つない。アークノイルは自分に対してまだ一度たりとも攻撃してこないのだから当然だ。これを遊んでいると言わずして何なのか。

アディーナの心には悔しさとともに怒りが満ちていく。

「いい顔をしているな、女。俺はそういう強気な思いは大好きだ。そしてな……そういう思いを屈服させるのは大好物なんだ」

アークノイルがそう言った途端、彼が今まで押し殺していた殺気が解放される。

アディーナが放った殺気よりも数倍濃く、強烈な殺気。

それに触れた瞬間発狂してしまいそうな衝動がアディーナの体を駆け巡るが、アディーナは丹田に力を込めてその衝動を押さえ込んだ。

「まだだ。まだ、本気ではないだろう？　お前はまだアーティファクトの能力を解放していない。もう解ったはずだ。このままでは俺には勝てないと。ならお前にある選択肢は一つだ。わかるな？」

アークノイルの明らかな挑発。

彼は言っているのだ。

アーティファクトを使え。それで自分と戦えと。

確かにアークノイルと戦うためにはアディーナにはもうそれしか選択肢はない。だがしかし、戦士としての誇りが彼女のそんな思考を邪魔する。だけど最早そんなことにこだわっている余裕などアディーナには存在しなかった。

「……わかりました。戦士としてはこれを使わずに貴方を倒したかったのですが、貴方は強い。ランカトゥーリス様を守るため私は自ら律した禁を今こそ破りましょう……ソウル・イーターの力、味わいなさい」

瞬間、ソウル・イーターの刀身が暗い光を発し、輝きだす。また、その光は徐々にアディーナの体にも周り、彼女自身もまたソウル・イーターと同じ光を発した。

「行きます」

そう告げたアディーナの姿が掻き消える。そしてアークノイルが気付いた時には彼女の姿は自身の真後ろ、つまりは死角に存在していた。

「やあっ！」

気合い一線。アディーナがアークノイルの胴を薙ぐ。すんでの所でかわしたアークノイルだったが、彼お気に入りのマントは先程の攻撃によりその長さを半分以下にしてしまった。

「あーあ、高かったのに……」

とは言うが、別にマントは買ったわけではなくアークノイルを畏れたとある国の王が献上品として彼に贈った物で彼自身は一銭も払ってなどいない。ただ聞く限りはアーティファクトに勝るとも劣らない程の金額が注ぎ込まれた一品である。

「それにしてもはえーな」

「ソウル・イーターは斬った相手の力を取り込み、所有者へと上乗

せします。一種のドーピングでしょうか。これで勝とうとも自分の力とは関係ないため、今まで使用を禁じていました」

斬った相手の力を所有者へ上乗せする。アディーナの言葉が真実ならば厄介極まりない。なぜなら彼女がアークノイルの前で斬ってみせたのは神の名を持つ者達だ。

一人一人はアークノイルにとっては雑魚と呼べるものだが、それらが束ねられたならば笑ってられるようなものではなくなる。

アークノイルは手に持つ槍を構え、心を静めていく。その間、アディーナから目を離すことはない。

「さて、もう言ったが不意討ちは一度で決めなければ愚かだ。また、付け足すならば自身の戦いの術を他者に教えるのも愚か。俺様がお前のアーティファクトの能力を知った以上、先程のような好機はないと知れ」

「例え能力を知られようとも私の勝ちは揺るぎませんっ」

アディーナの言葉が言い終わらないうちにその姿が消える。またしても高速で移動したのだ。

しかし、今度はその姿ははっきりとアークノイルに捉えられていた。

視覚ではなく、感覚で――

「きゃっ！？」

何が起こったのかアディーナには解らなかった。気付けば自分は首をアークノイルに無造作に掴まれ、地面に叩き付けられていた。その衝撃は凄まじく、大きな岩を削って作ったかのように継ぎ目のない石の地面に自分を中心として大きな亀裂が走っている。

＜心眼＞

このスキルでアークノイルはアディーナの姿を捉えた。心の眼という文字の通り、自らの感知する間合いに入った獲物の姿を捉える業。幾千の戦いの経験の末に身につけたアークノイル自慢のスキルだ。

「馬鹿正直に人の背後をとるとは、驚くべき単純さだな。これでは気配を掴む必要はなかった」

「離しなさいっ！」

首を掴むアークノイルの腕を握りアディーナはもがくがその腕はアークノイルの華奢な見た目とは裏腹にガッシリとしていて外すことは叶わない。

そうこうしている内に首を掴んでいる手が徐々に締まっていくのを感じる。

「か、はっ……」

「くっくっく……いい表情じゃないか。屈服とはまた違うが苦悶に喘ぐ表情は酒の席ではいい肴なんだぜ？」

本来ならここらで解放して別の方法でいたぶるか、自分の血を流し込んでシモベにするアークノイルであったが、離れた所で見守るランカトゥーリスが動かない内に目の前の聖天族を片付けるべきだと考え、指先に力を込める。彼女はシモベにしたいと思えるほどの力を示したがあれは少しばかり時間がかかる。

「生まれ変わったらシモベにしてやる。今は永久（とわ）に眠れ」

アークノイルはアディーナの首にかかる指に力を込めた。

プロローグ3

止めを刺すために指先に力を込めたその時、アークノイルは自身の顔に凄まじいまでの衝撃を感じ、その後体が吹き飛ぶ感覚に襲われた。

数十メトルほど吹き飛ばされて止まった所で起き上がってみれば、先程まで自分がいた位置に足を振り上げているランカトゥーリスがいる。

そこでアークノイルは自分がランカトゥーリスによって蹴り飛ばされたことを理解した。

「いってえな……」

蹴られた顔を手で摩りながらアークノイルは立ち上がった。

「あら、首だけを飛ばしたつもりだったのだけど頑丈ね」

ランカトゥーリスは言葉とは裏腹に無表情でアークノイルを見つめている。

「なんだ？　従者が殺られそうで慌てて助けにでもきたのか？」

対してアークノイルはおどけた言葉とは裏腹に内心驚嘆していた。なぜならアークノイルはアディーナとの戦いにおいても常にランカトゥーリスへと気を回していたからだ。

いつ何時ランカトゥーリスが参戦しようとも対処できるように。

にも関わらず、気付けば顔を蹴られているという始末。アークノイルは二重の意味で面食らうといった状態だ。

「そうよ。この子は私のお気に入りなの。殺されちゃ敵わないわ」

そうしてランカトゥーリスは地面に倒れ、過呼吸になったかのように息を吸いつづけるアディーナを見る。

「も、申し訳、あり、ませんランカトゥーリス様……彼は私が……」

「もういいのよアディーナ。私は雑魚を片付けろと命じたけど、彼は雑魚ではないのよ。だから後は私に任せて休んでなさい」

そう言ってランカトゥーリスがアディーナの前に手を翳すと、事切れたかのようにアディーナがおとなしくなってしまう。

「死んだか？」

「眠らせただけよ」

アークノイルの軽口にランカトゥーリスは即答する。その言葉に怒りなどの感情の色はない。

「この子は才能はあるんだけど、実戦経験、特に格上に対してはほとんどなくてね。丁度いいと思って貴方と戦うのを見守ってたんだけど、予想より大分貴方は強かったわ」

「ふんっ、上等なアーティファクトを持とうと使いこなせていない奴相手なら雑魚と変わらん」

「気付いてたの？」

アークノイルの言葉にランカトゥーリスは少し驚きの色を浮かべる。

「当然だ。公爵級のアーティファクトの能力があんなちゃちい訳ないからな」

アーティファクトは本当に使いこなしていれば男爵級でさえ人が神の領域に足を踏み入れるほどの力を持つ。それが公爵級ともなれば簡単に神を凌駕するだろう。
それ故に公爵級となればアークノイルであっても無傷で済むはずはない。

「ふぅん……まあ、アディーナがソウル・イーターを使いこなせてないのは本当よ。とゆーか、こうして能力の一部でも解放したのは持たせた時以来だわ」
「本来の用途に使われない道具ほど憐れな物はない。だからこそ肝心な時に使い方がわからんのだ」
「言えてるわね。でも使うべき相手がいなかったってのも、一つの原因ではなくて？　それに物騒な物ほど使うべき時は来るべきではないわ」
「使わずに鞘にしまった剣は錆びた方がいいと？　それならそもそも持つべきではない。いや、元を正せば作るべきですらない」
「極論よ」
「議論しているつもりはない」

アークノイルはランカトゥーリスと語り合いながら徐々に間合いを詰める。無論、それはランカトゥーリスも気付いていることだろう。
だが、だからといってアークノイルが立ち止まる理由にはならない。
そうしてアークノイルは近付きながら小声で自身の持つ槍の起動言語を言う。アークノイルの持つ槍もまたアーティファクトなのだ。それは、アディーナの持つアーティファクトよりも劣る候爵級の物であるが、アークノイル自身はそれを十二分に使いこなしていると自負している。

アークノイルはランカトゥーリスを自身と同等以上だと認識した上でアディーナに講釈したように不意を討って一撃で決める腹積もりだった。
槍をただの武器として振るうだけならばあと数歩は近付く必要があるところまでアークノイルが辿り着く。しかし、アーティファクトとしての使用ならここまでで十分過ぎるほど近付いた。
アークノイルはランカトゥーリスを見つめたままニヤリと笑うと槍を大きく引き、次の瞬間突き出した。

「死ね」

虚空に突き出したただ一度の突き。
だが、アーティファクトとして起動した槍のそれはただの突きとは違う。
槍はアークノイルの体の中の魔力を媒介に風を生み、それが螺旋となってランカトゥーリスに襲い掛かる。
もちろんそれはただの風ではない。生み出した風は真空の刃を形成し、それが捌くことなど不可能な無限ともいえる数相手に襲い掛かる。
見えない刃をかわすなど到底出来はしない。尚且つ、ランカトゥーリスの傍には彼女自身の力で眠らせたアディーナがいる。
避けるならばそれはアディーナの死を意味するそれはアディーナの死に駆け付けたランカトゥーリスには出来るはずもない。

「……なるほどな」

アーティファクトによる攻撃が止んだ後にはゴッソリとえぐられた地面があった。
それだけならばまだいい。
しかし、削られた後には何の傷も負っていないランカトゥーリス

とアディーナの姿があった。

「一体どんな手品だ？」

アーティファクトで攻撃した時点で自分の勝ちを確信していたアークノイルではあったが、油断による隙など生じさせてはいない。

万が一、ランカトゥーリスが攻撃から逃れた場合に追撃をかける用意はしていた。

だが、無傷で同じ場所に立っているとは予想していなかった。

「やっぱりその槍はアーティファクトだったか」

軽いな調子で言うランカトゥーリスだが、その姿に隙はない。

「アーティファクトに対抗するにはアーティファクトしかない。貴様のアーティファクトで逃れたと見るべきか」

「ご明察。でもどんなアーティファクトかは教えないわよ。だって、自分の戦いの術を相手に教えるのは愚かなんでしょ？」

アディーナに言い放ったアークノイルの言をとってランカトゥーリスはおどけてみせる。

アークノイルもまた最初からランカトゥーリスのアーティファクトの能力を教えて貰おうなどとは思っておらず、返答に落胆することはない。

「聞きたいんだけど、私に勝てると思う？」

ランカトゥーリスが問い掛ける。

アークノイルによるアーティファクトの攻撃は通じず、また彼女の攻撃を気付かないうちに身に受けた。それでもなお自分に抗うの

か。ランカトゥーリスの問いは至極最もだ。
しかし、その問いに対するアークノイルの返答は言葉でなく態度で示された。
一瞬ともいえる速度でランカトゥーリスに近付くと槍を薙ぎ払う。狙いはランカトゥーリス自身ではなく、横たわるアディーナである。
「これが貴方の答え？　てゆーか獣でもあるまいし、言葉で答えなさいよ」
「＜蒼雷＞」
ランカトゥーリスへの返答はまたも行動によるもの。
＜蒼雷＞
魔導系スキルにより射出される。蒼き雷がランカトゥーリスに向かってほとばしる。
「む～だ」
しかし気付けばランカトゥーリスはアークノイルの背後に周り頭を掴んでいる。
それに構わずアークノイルは槍の持ち手を先端部にし、後ろにいるランカトゥーリスに向かって突く。自分の体を壁として死角となった槍の攻撃はすんでのところで体を捻ったランカトゥーリスにかわされはしたが、彼女が着ていたドレスを引き裂いた。
「危ない危ない」
かわされはしたが当たった。その事実にアークノイルは考える。
なぜなら当たる気配すらなかった攻撃が当たったのだからそこに

糸口が存在するに違いないからだ。
なぜ当たったか。
そう考えた時、今までと違うところを考えれば答えは二つ。相手が油断したのか、それとも攻撃の瞬間の動作が見えなかったからか。
前者に関しての可能性は薄いと言わざるを得ない。彼女は油断などはしていないという確信があるからだ。
ならば後者しかない。攻撃が寸前まで見えなかったからこそアークノイルの攻撃はランカトゥーリスのドレスを切り裂いたに違いない。
そう考えればランカトゥーリスに攻撃の動作を見せなければいい。と考えたアークノイルはランカトゥーリスから距離を離れる。
その行動は一見すれば体勢を立て直しているように思えるが、アークノイルにしてみれば相手を誘い込むための動作に過ぎない。
幸いにして種は蒔かれている。

「逃がさないわ」

誘いだとは考えずにランカトゥーリスはアークノイルの間合いに入ってきた。
しかし声がしたのは自身の背後。＜心眼＞のスキルで周りの注意を怠ることはなかったというのに声をかけられるまで気付かなかった。

「くっ」

ランカトゥーリスの攻撃はただの蹴り。だが、その破壊力はアークノイルが今まで相対してきた者達の攻撃を全て引っくるめても確実に一番強いものだった。
「その頑丈さは驚嘆に値するわね。最初に当てた攻撃と違って今度

は魔力を込めたのに」

ランカトゥーリスは内心本当に驚いていた。アークノイルに叩き込んだ攻撃は最初にアークノイルの軍勢を一瞬にして消し飛ばした攻撃に倍する力を込めていた。

自身の同族である神ですら戦闘不能に陥った攻撃にアークノイルは五体満足であり、最初に攻撃を当てた時よりも素早く立ち上がってみせた。

「ただの蹴りが効くかよ。つーかずっと言おうか悩んでたが、ポニーテールはハゲを進行するんだぞ？」

アークノイルは本当に攻撃が効いていないかのように振る舞っている。

そうした姿を見て、ランカトゥーリスは真面目にやらなきゃダメかも自分がやられてしまうかもと思った。

「地上の国に住む奴がどうなるか知らないけど少なくとも神は禿げないわ」

「いやいや、髪をむりくり引っ張って結ぶんだから頭皮にダメージが溜まっていくんだ。神だろうと変わらない。だってハゲた神もいただろ？　まあ、ぶっ殺したけどな」

軽口を叩き合いながら二人は牽制し合う。ランカトゥーリスはどんな攻撃をするべきか考え、アークノイルは蒔かれた種を発芽させる時を窺う。

先に動いたのはランカトゥーリスだった。いや、アークノイルにしてみればランカトゥーリスが動いたことすらわからなかったと言っていい。気付けばランカトゥーリスは自分の目の前で剣を真っ直

ぐに自分の心臓へ突き出していた状態だ。

「くそっ……」

急いで＜金剛壁＞を発動させるが、剣はするりと不可視の壁をすり抜けて心臓へと迫る。

＜金剛壁＞は物理的攻撃には鉄壁を誇る。それをすり抜けたとなればこの攻撃は物理的だけではなく魔導的要素も持っているということだ。

ランカトゥーリスの攻撃は止まることなくアークノイルの心臓を貫いた。

プロローグ4

「ふぅ、まさか時の涙だけでなく破砕の牙を使うことになるとはね……」

アークノイルを倒すことはもっと簡単に済むと思っていたランカトゥーリスだが、アークノイルの力は思っていた以上に強かった。それこそ自身の持つアーティファクトがなければ追い詰められていたのは自分であっただろう。

ランカトゥーリスがアークノイルを殺せたのは紛れもなくアーティファクトのおかげだった。

「時の涙に破砕の牙、それがお前のアーティファクトの名前か？」

しかし、殺したはずの男の声が聞こえ、ランカトゥーリスは身を硬くする。

見ればアークノイルは何でもないような顔で立ち上がっているではないか。

「嘘……」

そんなはずはないとランカトゥーリスは心の中で呟く。確かに自分はアークノイルの心臓を貫いたはずだ。感触も確かに手に残っているのだから間違いない。

「うん？　なぜ、俺が生きているのか気になるか？　どうせ、もう使えん手だから教えてやる。これだ」

そう言ってアークノイルは懐から何かを取り出す。

それは大人の男の手の平より少し大きいくらいの黒い人形だ。顔も何もない人型の人形。それを見ただけでランカトゥーリスはなぜアークノイルが死んでいないのか理解できた。

「リバースドールね」

「ああ」

《リバースドール》

子爵級のアーティファクトにして、一回限りの使い捨て。

対象者が死に陥った場合、身代わりとして代わりに死を迎える。使用前なら白かった人形は死を迎えると黒色に変色してしまう。

「まさか使う時が来るとは思わなかった。だがおかげでいいことを聞いた。貴様は俺様を殺すために二つのアーティファクトを使用した。一つは俺の心臓を貫いた剣、こいつが破砕の牙だろう。そしてもう一つが時の涙とやら……貴様、そいつで時を操っていたな」

アークノイルがはっきりと断言する。

「ばれちゃった」

そして返すランカトゥーリスはあっさりとそれを認めた。

《時の涙》

ランカトゥーリスが持つ公爵級のアーティファクトにして時を操る能力を持つ。

それは対象者と対象者が指定したものの時間をそのままに時間の巻き戻しや早送り、一時停止等を行う。

そして時間の操作中は対象は現実による干渉がなされず、また干渉することも出来なくなる。

アークノイルへと近付くのは時間を止めて行った。故にアークノイルにしてみれば一瞬にして近付いたように見え、また感知することも出来なかった。
アークノイルの攻撃もまた時間を止めてかわした。ただ、最初のアーティファクトによる攻撃は自分とアディーナを対象にしてそれ以外の時間を早送りにすることでやり過ごした。時間操作中は現実に干渉されないことを利用した防御法だ。
だが、時間操作中は現実への干渉も出来ない。故に時間を止めたままアークノイルに攻撃することは出来ず、いちいち時間操作をやめて攻撃しなければならない。だから攻撃が当たる寸前に時間操作を解いて当ててきたのだが……

「確かに貴様は強い。だが、身体能力は俺より弱い」

ランカトゥーリスの身体能力は決して低くはなくむしろ高い。だが、アークノイルという存在はそんなランカトゥーリスの更に高みにいた。
総合的に見ればランカトゥーリスの方が同等かそれ以上の力を持つが、身体能力だけ見ればアークノイルの方が上だ。

「私が弱いのではなくて、貴方が強いのよ」
「む、当然だな」

ランカトゥーリスの言葉をそうだったとばかりにアークノイルが肯定する。

「それにカラクリが分かった以上、対処の使用もある。もう貴様には俺は殺せん」
「どうかしら？」

アークノイルの言葉にランカトゥーリスは微笑みを返す。ネタが割れようともランカトゥーリスのアーティファクトの前ではどうすることも出来はしない。ランカトゥーリスはそう考えていた。

「何をよそ見をしている」

不意にアークノイルが声をかけてきた。だが、ランカトゥーリスはアークノイルから目を逸らしたことなどない。

言葉による惑わしかとランカトゥーリスが思った瞬間、腹部に熱い感触を覚えた。

そこを見てみれば、自身の腹から赤い刃が生えているのが見えた。否、刃が生えるなど有り得ない。刺されたのだ。

だが、一体誰に？

普通に考えればアークノイルしか有り得ない。だが、アークノイルは目の前におり、愉しそうに笑っている。

そのアークノイルから目を離して刃の出元を見てみれば、それは地面から伸びていた。

その赤には見覚えがある。

「血」

刃は血液で出来たものだった。そしてその血液は死体となった神達のもの。

「その通り。聖天族の女がいい感じに神達を殺してくれたおかげで貴様を殺すには十分な量がここにある」

それこそが蒔かれた種だった。吸血鬼は自らの血液を媒介にして武器を作り出すことが出来る。そしてそれはシモベとなった者達の血液でも同じ。

例えシモベが死んでいようとも、その血液には自分の血液が混じっている。つまり血液を操作することなど容易いことだ。
最初にランカトゥーリスに消し飛ばされた者達は血液どころか肉片のひとつも残りはしなかった。だが、アディーナの剣によって斬り殺された神達は大量の血液を流出し、辺りにはアークノイルの扱うことが出来る血液で溢れかえっている。

「そら、ボケッとしてる暇があるのか？」

アークノイルが念じるだけで辺りの血は刃と化してランカトゥーリスに迫る。
ランカトゥーリスは時の涙で自分以外の時間を止めることでそれをかわそうとする。
アーティファクトの発動と同時に時間が停止し、ランカトゥーリスは現実の干渉を受けなくなる。だが、元から刺さっている血の刃はランカトゥーリスの一部として止まった時間の中にいるためランカトゥーリスが動くにはまずこの刃を抜かなければならない。

「くっ、う、あぁぁ」

刃を抜く時に激痛が走る。
ただの刃物を抜くだけではこうはならない。アークノイルがランカトゥーリスを貫いた刃に返しをつけていたのだ。
自分が刃を抜いた場合も考えて形成されたそれにランカトゥーリスは敬服した。
そして痛みを堪えながらもう一度アークノイルの心臓を貫いてやろうとアークノイルを見た時に、その異様な物が目に入った。
そこにあったのは繭。それも赤い繭だ。恐らく血液で作ったのであろうそれは人が十人は入れそうなほどに大きく、アークノイル一人が入るには大き過ぎた。

もちろんたかが血液で出来た壁など容易く壊せるが、それを行うにはまず時の涙を解除しなければならない。
吸血鬼にとって支配している血液は手足であり、目でもある。相手は自分が時の涙を解除した瞬間にまたも自分を刺し貫くに違いない。
全てが後手に回る状況を作り出された。それはアーティファクトの名前からどんな能力かをほぼ正確に推測されてしまったことを意味している。

「やばいな……本当に負けるかも」

ランカトゥーリスは自身の敗北を予感した。
だが、引くなんてことは考えられない。
生まれ落ちた時から他の神を圧倒する実力を備えていた彼女にとって自分を窮地に立たせる者の存在なんているはずがないと思っていた。
神はどうやって生まれるのか？
そんなことは神にもわからない。
ある日突然そこに現れるのだ。故に神は恋などしない。生殖行動など必要ないのだから当然であろう。
だがしかし、ランカトゥーリスの胸のうちには恋と似たような感情が芽生えつつあった。
自分を敬う存在はあれど、対等な存在などいない孤独な状況の中でアークノイルという男はランカトゥーリスを対等に見てくれている。
初めてのことにまず嬉しいという感情が芽生え、アークノイルの挑戦に応えたいと徐々に思い始めた。だからこそここで諦めてやるわけにはいかない。
ランカトゥーリスは時の涙を解除して次に破砕の牙で血の繭を破壊する。

《破砕の牙》
あらゆる物質の破壊を目的とした候爵級のアーティファクト。この刃の前に砕けぬ物は存在しない。

砕けた繭の先にあったのはまたも繭だった。
二重の壁。それを認識する前に血の刃がランカトゥーリスを襲う。半ばまで刃が体に侵入したところで時が停止する。
引かねば負けるが、引くわけにはいかない。そんな思いがランカトゥーリスを突き動かす。
時間を止めては刃を抜き、それを解除して繭を破壊して血の刃を体に受ける。それを繰り返しながらランカトゥーリスは進む。ランカトゥーリスが時間の停止するのを解除する時間は一秒にも満たないというのに、血の刃はランカトゥーリスの体を傷付けていく。
あと数回それを受ければ流石に最高神ランカトゥーリスといえども死んでしまうというところで砕いた繭の先にアークノイルの姿が見えた。

「ああ……やっと逢えた」

アークノイルにしてみれば数秒の時間ではあるが、ランカトゥーリスにしてみればつけられた傷の影響も相まって数時間ぶりの再開にも思えた。
今は時間を止めているため、アークノイルは喋ることも動くこともないが、その表情は自分の罠を乗り越えてきたランカトゥーリスを楽しげに見つめていた。

「なんかこう……あれね」

ランカトゥーリスはそのままアークノイルに近付き、アークノイ

ルの体を抱きしめる。何故かわからないがそうするべきだと心の何処が訴えていた。
そうしておきながら時の涙による時間の停止を解除する。

そして正常に戻った時間の流れでアークノイルは困惑していた。
気付けば戦っている相手に抱き着かれているのだ。こんなことは幾百、幾千の戦いの中でも初めての経験であった。
もしや自爆でもするのか？　とかつてそんなスキルを持った輩が存在したなどという酒場で聞いた噂話を思い出す。
このまま自爆される前にランカトゥーリスだけでも殺したいところではあるが、ランカトゥーリスの抱き着く力は力強く、ピッタリと寄り添っているので自分を避けて殺さなければならない。そのため、血の刃を操るために細かなコントロールが必要となり、多少攻撃するには時間がかかる。
ならば手に持つ槍で殺ればいいのだが、両脇に腕を回されているためにどうにも力が込めにくい。
結果、どうにも動けない状況に陥っていた。

「何のつもりだ？」
「……何となくよ」

ドスの効いた声でランカトゥーリスの行動の真意を問うアークノイルだったが、返ってきたのは曖昧なもの。
ますます困惑するアークノイルだったが、ふと忘れていたものの存在を思い出す。

「＜炎帝＞」

魔導系スキルである＜炎帝＞は自分の体から炎を吹き出し、近くにいる敵に熱によるダメージを負わせていくものであるが、密着状

態ならば吹き出した炎によるダメージが期待できる。

「熱っ」

目論み通りのダメージを与えることは叶わなかったが、ランカトゥーリスを離すことは出来た。

つまり、またも何重もの血液による繭を作り出してランカトゥーリスをいたぶる攻撃の始まりだ。

「うっ……」

そうして、血液による繭を形成しようとしたその時、再び胸に衝撃が走った。

現れたのは見覚えのある黒い刀身。そして……

「ランカトゥーリス様は私が守ります」

金色の髪を持つ聖天族の女性の声。

「くそが！」

明確な死の気配。それを感じとりながらアークノイルは自身に宿った炎の勢いを強める。

そして後ろ手に自分を貫いた刃を握る者の腕を捕まえて笑う。

「俺はお前には負けてねぇ」

襲撃者に向けてアークノイルは言う。

「そして貴様にもだ」

今度はランカトゥーリスに向けて言った。
女神とは決着がつかないまま戦いは終わり、今自分を刺した聖天族の女は道連れにしていく。つまりは引き分け。誰にも負けていない。アークノイルはそう主張したかった。
そしてそれを最期にアークノイルは絶命した。だが、彼が興した炎が消えることはない。既にアディーナに燃え移り、発火をやめたアークノイル自身の身をも焼いていた。
一瞬で起こった出来事に茫然としていたランカトゥーリスが炎を消した時にはアディーナもまた死んでいた。

「なんてこと……」

神たるランカトゥーリスの目には死した二人の魂魄が体から離れていくのが見える。
死者への介入は神と言えど難しい。ましてや彼女の一存でどうにかなど出来ない。
神は天上の国へ辿り着いた地上の国の者の願いを叶えることができる。でも、それは強い願いという力で自分の力を増幅してこそできる御業だ。
ランカトゥーリスがいくら強力な神であろうとも願いの力無しには死者への介入は出来ない。
しかし、ランカトゥーリスはそれを承知で二人の死者へと介入する。本来なら他者から貰うべき願いの力をも自分で生み出すことで――
だが、自分自身の願いの力で増幅される力など大したものではない。
ランカトゥーリスは二人を生き返らせることは出来なかった。だから生まれ変わった時のために自分のことを覚えていてとありったけの力を込めて願った。

きちんと力が行使されたのかはわからないが、不思議と願いは叶ったかのようにランカトゥーリスは思った。
ただ、何年後に二人が生まれ変わるのかはわからない。また、今ある天上の国へと至る方法だけでは二人が自分に会いに来れるのかわからない。
だったら……

「こちらに来る方法増やすしかないよね」

天上の国へと至る方法は二つ。
一つは天への階段と呼ばれる見えない階段。霊峰ルシウムの頂から十年の毎に十日間だけ現れるこの階段はタイミングを見計らったかのように現れたアークノイルが進んできた道でもある。
多くのシモベを連れてきたアークノイルはまず、シモベを先導させることで階段の有無を確認しながら登ってきた。途中で落下したシモベの数はアークノイルが連れて辿り着いたシモベの倍はいた。
そしてもう一つの方法が地上の国に存在する竜の爪痕と呼ばれる全長約五十キロメトル、深さ約千キロメトルほどもある大地の亀裂のうち、東の端から十三キロメトルと四十三メトル、深さ七百キロメトル地点にある横穴の中にある天上門と呼ばれる門をくぐること。
聖天族は基本的に地上の国へと行く際にこの門を使うのだが、帰る際に見つけることがほとんど出来ないため、そのまま移住してしまう者が後を絶たない。
一つ目の方法は十年の間に十日間しか階段が現れないし、二つ目は場所を見つけることが困難だ。
だったらわかりやすく、天上の国へと至る道を創ってやればいい。
ただ、誰でも来れるような物は意味がない。
二人ならば大丈夫で有象無象が辿り着けないような物を考えた時にランカトゥーリスはすぐにあるものが浮かび、すぐさま細かいことを創り上げた。

翌日、地上の国のとある場所に唐突に巨大な塔が建っていた。
塔というよりは見た目はただの円柱でしかないそれは円周百キロメトルを越え、高さは雲よりも高かった。
一体これは何なのか。地上の国の人々は考えたが、塔の中の最初の部屋には石碑が立っており、こんなことが書かれていた。

――この塔は天上の国ヴァルハラへと続いている
この塔を登らんと欲すれば数々の困難が待ち受ける
だが、困難を乗り越えれば汝らに恵みが齎される
困難を総て乗り越え、天上の国へと至るならば汝の願いを叶えよう
さあ、人々よ
天上の国へ駆け上がれ！！

そうして現れた塔に多くの人々が挑む。
ある者は願いを叶えるため。
また、ある者は恵みを得るために。

多くの者が挑みながらも誰一人天上の国へと至ることがないまま数百年の時が流れる。
そしてとある田舎の村に住む人間の夫婦の間に男女の双子が産まれた。
一人は白銀の髪を持つ男児で、もう一人は金色の髪を持つ女児であり、男児は英雄として語り継がれる男の名前から一部をとってアークと、女児は月に照らされて金色に輝くと言われる花の名前からとってアディエルと名付けられた。
そして時は更に流れ、双子が誕生してから十五年の月日が経った。

プロローグ４（後書き）

多少強引過ぎかと思いつつ、プロローグ終了です。

エリス村

クロック地方エリス村。
人口百人ほどのなんの変哲もない農村であり、人々は主に米や野菜等を作っている。ちなみに今最も力を入れている作物はトマト。真紅の太陽と名付けたそれがブランド化して高く売れないかなとかのんきなことを村の首脳陣達は考えていた。
そんな村には百キロメトルも離れた村にまで評判が及ぶほどの見目麗しい双子の兄妹がいた。
兄の方は白銀の髪と全身からやる気のないオーラが漂う少年であり、妹の方は金色の髪といかにも優しいですと言わんばかりの雰囲気を纏う少女だった。
兄妹は今、両親と共に畑仕事の真っ最中だ。

「兄さん、雑草はちゃんと根っこから抜いてください」
「へーへー」
「ああもうっ、めんどくさがって鎌で適当に切るのはダメですってば！」

横でけたたましく自分の行いにケチをつける妹を無視しながらアークは鎌を振る。
文字通り振っているだけなので、作業状況が進むことはない。
自分は農作業に来たのではなく、妹を困らせに来たのだ。
妹のアディエルは身内びいきなしに美少女だ。だからこそ若い女の少ない村では嫁として狙っている男達が山ほどいる。
もちろんいつかアディエルもその中の誰かと恋をして嫁いでいくのだろうが、それまでは自分が妹の心を独占する。
そのためになるだけ困らせてやろうという若干歪んだ愛情をアークは持っていた。

「兄さんってば、聞いてください」

このまま無視し続ければ泣くんじゃないかと思うようなアディエルの声音にアークは自分の背筋がゾクゾクするのを感じる。

それは表情として顔に表れ、アークの顔はいつものダルそうな物ではなく、いやらしいニヤケ顔になっていた。

「……うちの息子は相変わらずだなぁ」

「ある意味妹思いよね」

そんな息子の心理などお見通しとばかりに父であるガルダ＝ドラードと母ディーネ＝ドラードは揃ってため息を吐く。

どちらも村の出身ではなく、外からの移住者であり、二人がディーネのお腹の中に宿っている時にエリス村へとやってきた。

村人はよそ者である自分達を歓迎してくれ、慣れない農作業も親身になって教授してくれた。

そんな村が二人は好きであり、そこで子供を産めたことに誇りを持っていた。

生まれた子供達は自分達とは似つかないほどに綺麗な顔立ちをしていて本当に自分達の子かと首を傾げたくなったが、妹であるアディエルは父親譲りの金色の髪と母親譲りの優しさを持っていた。

息子の方はというと母親譲りの白銀の髪ではあるが、性格は両親のどちらとも似ておらず、妹を困らせること以外はやる気がない偏った男として成長している。

だがしかし、両親が子供達に対して厳しくとやかく言うことはない。確かに悪いことをしたなら烈火の如く怒るだろうが、ドラード家の教育方針は基本的に放任主義だ。

息子が妹に対して歪んだ愛情を注いでようと構わないし、妹もまた兄の世話を焼くのが楽しいみたいなので兄妹仲がいいから大丈夫

だと思っている。
ただ、若干兄の行き着く先が心配ではあるが……

「鎌はこう使うんです」
「なるほど、勉強になった」
「なんで空を見上げながら言うんですかっ！」

まあ、なるようにしかならないだろう。
エリス村は平和だった。

村の中をアークは歩いていた。
散歩だと言って歩き回っているが、正確に言うとただうろついているだけ。
なんの目的もたないその行動をアークは日課としていた。

「おや、アーク。散歩かい？　うちで採れた野菜持ってきな」
「アーク。親父に今度一緒に酒を飲もうとわしが言ってたって伝えてくれ」
「アーク君、今日のアディエルちゃんの下着は何色なのかなぁ？」

最後のは別として、ただ歩いているだけで会う村人全てがアークに声をかけてくる。
人口が百人ほどしかいないのだから、村人は全員顔見知りであり、家族も同然だった。
誰かにめでたいことが起これば村で宴を催して祝い、誰かに凶事が起これば村人全てが悲しんだ。
やる気というオーラのないアークに対してもそれは同じで、彼がどんな人間であろうとも生まれた時からアークを知っている者達からすれば息子や孫、兄弟のようなものだ。

例え……

「俺、人参嫌いなんだよね」

「めんどいからパス」

「死ね」

とアークの反応が辛辣であろうとも村人にとっては最早慣れた反応であり、可愛いものだった。

また、そのアークの反応に内心悦びを感じている者もいたりいなかったりする。

「アーク！」

そんなアークにまた一人声をかけてくる村人の青年がいる。

アークよりも五つ年上で、十五という年齢のわりに長身のアークよりも頭ひとつ高い身長。茶色い髪にどことなく愛嬌のある目を持った男だ。着ている服はまさしく村人という感じがする。

「女性の胸に関して語り合おうぜ」

こんなことを恥ずかしげもなく往来で堂々と言う男の名前はレオナルド＝ウッドスフィア。

家族を除けばアークが村で最も親しい人物だ。

アークがなぜレオナルドと親しいのか。それは何もレオナルドと話が合うからというわけではない。別にアークは往来で女性の胸に関して語り合うような趣味はないのだから。

「別にどうでもいい」

「そんなこと言わずに聞いてくれ。オレはな、トップとアンダーの差が二十センチメトルはないと胸ではないと常々言ってきた。だが

な、最近思ったんだ。十八センチメトルあれば許容できるんじゃないかと！　なぜオレがそう考えたのかと言うと……」

アークにしてみれば正直聞く必要を感じないようなことを延々と語るレオナルド。

だがそれを上の空でありながらも親友のよしみでアークが遮ることはない。

レオナルドの話をまとめると要はトップとアンダーの差が二十センチメトルとなると中々出会えないから基準を二センチメトル下げたとのことだ。

「ところで、アディちゃんのお胸の成長はどうなんだ？」

「前聞かれた時と変わってない」

アディとはアディエルの愛称であり、彼女と親しくしている者だけがそう呼べる。

とは言っても村の中のほとんどの者がアディエルを愛称で呼んでいる。ただ、若い男や絶賛嫁募集中なおっさんはアークが呼ぶことを許していない。

レオナルドはアークの親友であるためアディエルを愛称で呼べる許可を得ていた。

ちなみにレオナルドが前にアークにアディエルの胸の成長の程を聞いたのは十日前である。

「くっそー。顔は極上なのにアディちゃんは女ではないってのが惜しいな。あと四センチメトルなのに……」

アークがレオナルドと仲が良いのはここにある。

レオナルドは胸が自分の基準値に満たない者は女として見ていない。そしてアディエルは年相応の胸の大きさをしており、レオナル

ドの目測ではトップとアンダーの差は十四センチメトルらしい。
レオナルドが家で世界中の女の胸、特にアディエルの胸が大きくなるように祈祷を捧げることを日課にしていようが、今現在において恋愛の対象として見ていないのだから心を許せるのは変わらない。
妹への愛情は対人関係にも影響していた。
ただ、レオナルドが基準値を下げたことが気になるところではあるが、レオナルドは過去に二度ほど基準値を下げたことがあり、その度に基準ギリギリの女を引っ掛けては「やっぱ無理」と基準値を元に戻しているので心配はしていない。

「それよりもアーク、準備が出来た」

アークの肩を組んで近付いたレオナルドはこれまでと打って変わって小声で話し掛ける。

「やはり本気なのか？」
「おうとも、オレの願いはこんなとこで祈ってても叶わないってわかったからな」

二人が語るのはレオナルドの出奔の計画だ。
レオナルドは自身の願いのために村を出る決意をしていた。
向かう先はバベル。
辿り着けば願いが叶う天上の国ヴァルハラへと通じる道。

「くだらない願いのために命を懸ける必要なんかないだろ？」
「いやいや、世界中の女の胸のサイズアップは崇高な願いだ。オレはなんとしてもこいつを叶えるんだ。それが世のため人のためオレのため」

バベルは現れてから数百年、誰も踏破したことのないものだ。内

部は迷路のように道が入り組んでおり、狂気に満ちた魔獣が放たれている。
塔の探索中に死ぬ者は後を絶たないそんな場所だ。
そんな話を耳にしてアークは親友の身が心配だった。
叶えたい願いがアークにとって微妙なのもまたレオナルドを止めたい理由の一つだ。

「考えてもみろ。女を見れば美女だろうがガキだろうが老婆だろうが皆巨乳なんだぞ？　楽園と言われるヴァルハラなんか目じゃないほどの桃源郷がそこにあるじゃないか！」

自身の願いが叶った後の世の中のことを話す時のレオナルドは輝いている。
そしてそれを見つめるアークは眩しさに目が眩む……というわけもなく、気持ち悪いものを見るようにヒいている。
親友でなければ毒づいて一生無視するところだ。

「お前はそれでいいのか？　家族も親友も捨てて見知らぬ土地に行くなんて……」
「アーク。オレは願いを叶えたらちゃんと村に帰ってくる。親父もお袋も百まで生きるだろうから今生の別れじゃない」

レオナルドはウッドスフィア家の一人息子だ。いずれは畑を継いで嫁をとり、子を育ててその子に畑を継がせる。
そう誰もが思っている。
だが、レオナルドはそれを捨てて黙って村を出ようとしている。
計画を知るのはアークただ一人だ。
レオナルドは今生の別れではないと言うが、アークはレオナルドが村を出た瞬間こそが高確率で今生の別れになってしまうと考えていた。

「んな顔すんなよ。オレと離れたくないってのはわかるが、だからこそ何回も誘ってるだろ？　一緒に行くかって」

レオナルドもまた知らない土地に一人で行くのは不安だった。だからこそ親友であるアークに声をかけた。

しかしそれは素気なく断られた。

理由はわかっている。

アークにとっては親友である自分よりも妹のアディエルが大事なのだ。

それは少しばかり寂しいとは思うが、家族が大事だと言うのは人として尊ぶべきことだ。そして素直にそうとは言わず、のらりくらりとかわしていく親友の姿がレオナルドは好きだった。

「あー……いや、遠くまで行くのはめんどいし」

「そうか」

「……いつ行くんだ？」

「今日の夜に行く。村外れにある森に馬車を隠してるんだ。お前に声をかけたのはそれを伝えようと思ってよ」

胸の話を先にしたのは、そうすることで「またか……」と村人達に思わせ、遠ざけるためだ。女達はヒいて近寄ってこないし、男達もまたとばっちりで女達にヒかれないようにと近寄ってこない。

レオナルドはこの日のためにずっと前から準備を始めていた。コツコツ金を貯め、地図を買ってバベルまでの道のりを何度もシュミレーションした。ようやく目標の金額が貯まって本日の夜にかねてからの計画を実行することにしたのだ。

本来なら馬を一頭用意するだけで十分なのだが、馬車を用意したのはアークの心変わりをどこかでまだ期待しているからだろう。

そう考えると、巨乳巨乳言って気持ち悪がられている自分に平気

で接してくれるアークに大分依存してるのかもなと年下の少年に対する自分の感情に苦笑いを浮かべる。

「まあ、いなくなった後のフォローは任せろ。適当に誤魔化してやる。あとはそうだな……セクハラ発言には気をつけろ。世の中いい奴ばかりじゃないから些細な言動が問題になることもある」

「ああ。気をつけるよ。帰ってきたらヴァルハラがどんなところだったか事細かに話してやる。女神ランカトゥーリスの胸の大きさの具合とかな」

「ランカトゥーリス……くっ！」

その名前を聞いた時、アークの頭に鋭い痛みが走る。

「おいっ！　大丈夫かアーク？」

「大、丈夫……だ」

倒れそうになった体を支えながらレオナルドが心配する。それにアークは大丈夫だと答えたが明らかに大丈夫ではない。

アークがランカトゥーリスの名前を聞いたのはこれが初めてではない。ヴァルハラに住むという神々の中でも最も偉い女神ランカトゥーリスの名は聞く機会など無数にある。

バベルを創ったのも彼女であれば、願いを叶えてくれるのも彼女だ。

だが、その名を聞く度にアークの頭は酷く痛み、不思議な夢を見る。

それは自身が槍を手に持ち戦う姿。

そしてその夢は毎回最後に赤毛のポニーテールの女性と戦うところで途切れる。

「本当に大丈夫だ……心配しなくていい」

「あ、ああ……でも家まで送ってやるよ。それくらいならいいだろ？」

レオナルドに連れられアークは家路へと戻った。
家に戻ったアークは疲れたから夕飯はいらないと部屋に篭り、日が沈む前に眠りについた。

明くる朝、兄を起こそうと部屋に入ったアディエルが見たものはもぬけの殻の部屋だった。
自分の部屋と違い、必要な物以外を置いていない簡素な兄の部屋。しかし部屋には兄の姿も兄が必要としていた物もなかった。

この日、エリス村から二人の若者が姿を消した。
一人は巨乳好きの変態として名高い男。
そしてもう一人はアディエルの兄だった。

エリス村（後書き）

胸のサイズについてトップとアンダーの差がどうたらこうたら言っている件について
トップとアンダーの差が二十センチ＝Eカップ
十八センチ＝Dカップ
十四センチ＝BとCの中間辺りらしいです

出立

夢を見ていた。
自分の身体は強靭であり、手に持つ槍を自在に振るう夢。
そして夢の中の自分は絶対無敵であり、誰も太刀打ちできない。
それは紛れもなく幻想という名の夢での出来事。
夢とは己が創り出した空間であり、その中は自分にとってとても都合のよいことしか起こらない。
その中で敵のいない自分の姿は当たり前だ。
しかし、そんな夢の中でただ一人自分と対等に戦うことのできた者がいた。
赤毛のポニーテールで白いドレスを身に纏う美しい女性。
そんな女性に対して夢の中の自分は見惚れるどころかはいつくばらせて自分の靴を舐めさせる想像をしてワクワクしている。
最初は劣勢だった戦いも今では自分が優勢に進めている。このままいけばこの女性に勝てる。

いつもはここで夢が終わってしまう。
夢というものは良いところで醒めるものだ。

だが、今回はそこで目が覚めることはなかった。
夢の続きを見ることが出来る。
それはこの夢を見るようになってからずっと願い続けたこと。
さて、この夢は一体どんな結末を迎えるのだろうか。

そう思った瞬間、胸から刃が生えてくる。
自分の血に濡れる漆黒の刃。
……ああ、これでは死んでしまう。

まだこの女性との決着がついていないというのに……

「くそが！」

夢の中の自分が言う。

本当にくそだ。目の前の相手に夢中になりすぎた。

自分と初めて対等に戦うことが出来た存在。

いくら愉しく戦っているからといって油断した自分を殴りたくなるし、こんな無粋な横槍をした輩も殴ってやりたい。

だが、四肢から力が抜けていくのを感じ、全力で殴ろうとも大したダメージにはならないかもしれない。

ならば、と乱入者の腕を掴む。

このまま自分だけが死ねばそれは自身の負けを意味する。

どうせ負けるならば自分よりも強い奴でなければならない。

だったら乱入者ごときに負けてなどやらない。

道連れにこいつも殺す。

そうすれば、自分はこいつには負けたことにならない。

「俺はお前には負けてねぇ」

襲撃者に向けてアークノイルは言う。

そして――

「そして貴様にもだ」

赤毛の女性に対して宣言する。

ここで自分は死ぬのだから、対外的に見ればこいつの不戦勝だ。

だが、そんなことにはさせない。

いつか必ず決着をつけるために自分はやってくる。

だからそれまで待っていろ。

――ランカトゥーリス

◇◇◇

目を覚ますと辺りは暗くなっていた。
どれくらい自分は眠っていたのだろうかとアークは考える。
目を閉じた時とは違い天井の木目模様を認識することができない。
そこから今が夜中という時間になっているとアークの思考は帰結した。

「今のは……」

そこで思考は先程まで見ていた夢のことに及ぶ。
いつになく夢の中のことが現実であるかのように感じられた。
妙に生々しく胸に刺さった剣の感触に無意識にアークの手は自分の胸元に触れていた。まるで剣が刺さってないか確かめるように。
自分に剣を突き刺した無粋者の顔は思い出せないが、それ以外、例えば赤毛のポニーテールの女性や戦っていた時の思考や感情などは鮮明に思い出すことが出来る。
そして自分が戦っていた赤毛の女性はランカトゥーリスという女神だった。

「壮大な夢だったな……夢？」

自分で言った言葉になぜか疑問が浮かぶ。
果たして今のを夢として扱っていいのだろうか。
そんなことを考えている自分がいる。

「感覚的には夢というより昔起こった出来事の記憶を見てるような……」

自分で言っておいて何を言ってるんだと突っ込みたくなる。
自分はただの人間であり、戦いどころか殴り合いの喧嘩一つしたことはない。もちろん殺されたことなんてありはしない。だって自分は今ここで生きている。
だが、そう思いつつもパズルのピースがはまるかのように記憶という言葉はしっくりとくるものがある。
そして、そう思った瞬間にアークの胸の内にある感情が沸き上がる。

――女神と戦いたい

ただただアークはそう思った。
そしてそんな感情がアークの心の中を占めていく。
夢の中では決着がつかなかった。ならば自分自身で決着をつけよう。
女神と戦うにはどうすればいいのか。
それにはまず、女神の住む天上の国ヴァルハラへと行かねばならない。
ヴァルハラへと辿り着く方法は三つあると言われている。
一つ目は天上の国へと続く天への階段。そして二つ目が竜の爪痕の何処かにあるという天上門。この二つは見つけること自体が難しい。物語にあるアークの名前の素となった英雄は天への階段を昇ったと言われているが、情報を集めて天への階段を探すというのはな

んともめんどくさい。
何より今は天への階段を探さずとも天上の国へと至る道はわかりやすく存在するのだ。
それこそが三つ目の方法であるバベル。進むには困難とやらが待ち受けているようだが、それすらも望むところだ。

アークは周りにある必要な物達を集めて荷造りをする。
親友であるレオナルドもまた天上の国を目指しバベルに挑もうとしている。出発は夜と言っていたが、動き出すのは村中が寝静まった頃だろう。だったらまだ間に合うかもしれない。また、親友の出発に間に合わずとも一人でバベルへと向かう腹積もりだ。

荷造りを終えたアークは家族に気取らないように静かに家から出る。
そしてレオナルドが馬車を隠したという森へと向かおうとした時

「こんな時間にお出かけかい？」

声をかけられた。
声の主はアークの後方、出てきたばかりの家の方からだ。
振り返ったアークが見たのは無表情で自分を見つめる父ガルダ＝ドラードの姿だった。

「そんなに荷物を抱えてるってことは散歩ではないね？」
「ああ」
「家出かな？」
「似たようなもんだ」
「どうゆうこと？」
「俺はバベルに行く」

ガルダの言葉にアークは弁明や言い訳もしない。事実だけを言う。
「バベル……アークは叶えたい願いって奴があるのかい？」
「親だろうと知る権利はない」
だが願いの話になってアークはガルダの問いをはぐらかして答える。
女神と戦うために、なんて言うのは多くの人にとってはレオナルドの全女性の胸のサイズアップという願いよりも馬鹿げたものだ。
「そうか……少し待ってなさい」
そう言ってガルダは家の中へと入っていく。眠っている家族を起こして緊急家族会議でも開くのだろうかとアークは心配になる。
両親にどう説得されようと意見を曲げるようなアークではないが妹に泣いて縋られたら自分でもどう反応するのかわからない。
若干妹が泣くのは楽しみだったりするが、その顔見たさに出発を見送りかねない。
アークがそう思考しているとガルダが戻ってくる。その後ろにはディーネの姿もあった。
「アーク、これを」
そう言ってガルダがアークへ小さな袋を手渡す。開いて中を見てみると金貨が詰まっていた。
「路銀とグロリアに着いてからの生活費の足しにしなさい」
グロリアとはバベルの入口を中心として出来た都市である。その経済力は首都を含めた主要都市五つを合わせたものと等しい。

「こんな大金をどこで……」

金貨一枚で人間一人が半年は暮らせる。それが数十枚。とても田舎の農村に住む人間が稼げるような額ではない。

「母さん達も昔、バベルの攻略を目指していたのよ」

「そう、そこで出逢ってアーク達を授かった。それでそのまま静かな暮らしを求めてこの村にきたんだよ」

両親の告白にアークは驚いた。

今までただ人の良いだけの両親にそんな過去があったとは気づかなかった。

「父さん達はどっちも願いを叶えるまでは帰らないと言って故郷を離れたから新天地に来たわけだけど、アークは黙って出ていくんだからいつでも帰ってきていいんだからね」

「ま、帰ってきたらアディに怒られるでしょうけどね。なんで黙って出ていったんですかーっ！　って。あらやだ、明日の噴火は母さん達が宥めなきゃいけないのね」

「と、まあアディのフォローは父さん達に任せて行きなさい。あと月一回は手紙を出すように」

「お酒と女には気をつけなさい。あと、経験者としてのアドバイス。死にそうになったらとにかく逃げるのよ。逆転の手なんか考える前に逃げなさい」

両親は微笑みながら自分を送り出そうとしてくれている。自分達も過去バベルに挑戦していたことや、アークがいなくなっても農作業にあまり滞りがないことが笑って送り出せる理由だ。

それこそ自分達もバベルに挑む間に何度も死ぬ思いをした。だけ

どバベルに挑んだからこそ自分達は出逢い、子を授かったのだと思えば良い思い出でもある。

「手紙はめんどいから気が向いたら出してやる。あと、金以外になんか良いもんを餞別にくれたりしないのか？」

「……」

「……さっさと行きなさい」

「金だけか。冷たい親だ」

そう言ってアークは家に背を向けて歩いていく。その背中を見つめながら両親はどうしてこんな風に育ったんだろと自らの教育を若干後悔していた。

そして精々誇張してアディエルに話してやるから盛大に怒られやがれと心の内で願った。

アークは受け取った金貨入りの小袋を左手で弄びながら、空を見上げた。

雲一つない夜空には星が輝き、アークの出立を祝福しているようだった。

そこそこ歩いたところで振り返る。自宅の前にはすでに両親の姿はない。どうやらもう中に入ってしまったようだ。

「ありがとな」

そんな二人へと向かって礼を言う。本当は面と向かって言いたかったが、素直に言ったら負けのような気がした。何に対して負けなのかは自分にもわからない。

「すまん」

そして今度は眠っているであろう妹に対して謝罪した。

◇◇◇

レオナルドは馬車の用意をしていた時に不意に誰かの気配を感じて振り返る。
村人に感づかれたかと思ったが、気配の主が親友であることに気付き胸を撫で下ろす。

「アークかよ……見送りか？」

そう言ったところでアークが見送りにしては恰好がおかしいことに気づく。
いや、恰好自体はいつものヨレヨレの服だ。なにもおかしいことはない。おかしいのは背負っている荷物だ。自分への餞別としては大きすぎる。

「それは？」

指を差して聞いてみる。

「俺もバベルに行く」

返ってきた解答は予想しつつも有り得ないと思っていたもの。

「バベルに行くって……アディちゃんはどうすんだ？」

故に一番気になることを聞いてみる。

「アディもガキじゃないんだから兄離れするべきだ」

どちらかというとアークが妹離れするべきだろと言おうとしたレオナルドだったが、あれ？　これって妹離れするってことか。と思い、言葉を飲み込む。

「オレは有り難いが、本当についてくるんだな？」

最終の意志確認のためにレオナルドはアークに問いかける。

「レオ、俺はお前についていくんじゃない。お前と共に行くんだ」

「あ、ああ。んじゃ、一緒に行くか」

アークの荷物を馬車に積み込み御者台に座ったレオナルドはアークが乗り込んだことを確認すると馬を走らせる。

「んじゃあとよろしく」

「っていきなり寝よーとすんなっ。せめて話し相手になれよ」

「いや、眠いし」

「嘘だね。その寝癖頭を見ればお前が今まで寝てたことなんかまるわかりだね」

「二度寝って知ってるか？　あれは一度目より気持ちいいんだ」

「ふざけんなボケ」

夜半の移動としては少々やかましく馬車は走っていく。

馬の脚が地面を叩く音と仲の良い親友達の掛け合いを余韻として残して――

エリス村のその後

滅多に起きない大事件にエリス村の人々は驚愕していた。
一夜の内に二人もの人間が消えたのだ。
しかも、消えた二人の仲がとても良かったというのは周知の事実。共謀したのは明らかであった。
出ていった二人のうち、一人の青年については行き先を知れば納得するものがある。そして村人全てが青年のくだらない理由を察した。
だが、もう一人の少年についてはなぜだと村人達は首を傾げた。少年がシスコンと呼ばれる人間であり、妹に言い寄る男達には手痛い粛清を行っていたのは村人の誰もが知っているため、その妹を置き去りにして村から出ていくなんて考えられなかった。
そしてそう考えた時に至る結論は青年が仲の良かった少年を無理矢理誘ったのではないかということ。

そしてドラード家にはそう考えた男が一人、家の前で土下座していた。

「ほんっっっっっっとぉ〜〜〜〜〜に申し訳ないっ！！」
「あ、いえ、頭を上げてください」
「そうはいきません。家の馬鹿息子のせいでそちらさんには多大なご迷惑をおかけしてしまいました」

ドラード家の前で土下座し、ガルダを悩ませるのはグリード＝ウッドスフィア。変態として名高いレオナルドの父親である。
朝起きた時に息子が残していた書き置きを目にし、憤慨していた

ところで、息子と仲の良かった少年も消えたという話を聞いて事態を推測し、血相を変えて少年の家へと謝罪しにきた次第である。

「家の息子はレオ君とは関係なく自分の意志で出て行きましたから」

「そんなはずはありません。アークの坊主は親は平気で捨てるでしょうが、アディエルの嬢ちゃんだけは置いていったりはしません。倅が無理矢理連れてったに決まってます」

「……僕たちのことは簡単に捨てられるんですか？」

「いけね、口が滑りました」

グリードの言葉を聞いてガルダは若干ショックを受けていた。いや、ガルダ自身も息子であるアークは親と会えなくなろうとも何とも思わないとは思っている。

だが、他人から改めて言われるとなると物悲しい。

「いや、その、あれだ。男ってのはガキはいつまで経ってもガキですが、駆け足で大人になる奴もいます。家の倅は前者ですが坊主は後者ですよ」

「アディに声をかけただけの男の家に不法侵入して寝静まるまで潜んでおいて、縄で縛って動けなくしてから脅すような子が大人ですか？」

「ガキなら逆にそこまではしませんよ」

「確かに……」

その事件をガルダはかなり柔らかく言いはしたが、本当はもっと血の臭い漂う出来事だったりする。そしてこの事件はアーク的にはパフォーマンスの一つだったと後でガルダは聞いていた。ここまでやれば自分抜きにアディエルに声をかける勇気を持つ奴はいないはずだ――と。

実際それからはアディエルに気軽に声をかけようとする男は減っ

た。そしてアークに媚びようとする男は増えた。
その結果を見てガルダ達は普段やる気というものが感じられない息子の腹の黒さを思い知ったのだ。
「とにかくアークはレオ君に無理矢理連れてかれたわけではなく自分の意志で出て行きましたから問題ありません」

場所は変わってドラード家の家の中では母ディーネが娘であるアディエルと気まずい空間を過ごしていた。

「ア、アディ？」

恐る恐る娘へと声をかけてみるがそれに対する返答はなく、娘はブツブツ何かを呟きながらカーペットの毛を毟っている。

「あの……アディちゃん、カーペットが禿げちゃうから毟るのはやめて」
「どうして兄さんは私を置いて……そもそもあの人は……」

自分の声が全く耳に入っていないアディエルにディーネはどうしたものかと思案する。
アークがいなくなったことに少なからずショックを受けるだろうと予想してはいたが、アディエルの反応は予想以上のものだった。
アークの姿を探して村中を駆け巡り、居るはずもない花瓶の中を覗いたりもしていた。
アークは紛れもなくシスコンだ。そしてそんなアークと好意的に

接してるとはいえ、仕方なしに世話してる感のあったアディエルもまた重度のブラコンだったということだ。
アークが何処へと行ったのかはレオナルドの残した置き手紙により、一緒に行ったであろうことから目星はつけられているが、自分達がアークが出発する前に実は話をしているなんて知られたら娘に怒られるのではないかという恐怖が真実を話すことを躊躇わせた。
アディエルは普段は優しいが怒ると怖い。アークがアディエルに声をかけた男の家に不法侵入して縛り付けて脅した事件ではいち早くアークを見つけて半日に及ぶ説教をしていた。
それに関してはアディエルをからかって説教時間を延ばしていたアークにも原因があるのだが、その時の修羅のごときアディエルの剣幕は叶うことなら出逢いたくはない。

「そうだ、アディちゃん冷蔵庫にケーキがあるの。お父さんに内緒で食べちゃいましょ」

アークがバベルに行くと知ってアディエルのご機嫌取りのために徹夜で作った代物だ。
アディエルは甘いものに目がない。これで少しは気分を向上してくれるといいのだが……

「そもそもあんな巨乳巨乳言ってる人と仲良くすること事態が……よし、まずはあの変態を殺そう……」
「こらこらこら」

思考が危ない方へと向かう娘と頭をはたく。ディーネはアークが自分の意志で出ていったことを知っている。
アークと一緒にレオナルドもいなくなったことは予想外だったが、二人が一緒にいるのならばアーク一人でいることよりも安心である。
アークは大体の人物に対して態度が悪い。村の中ならばそういう

性格も分かりきっているから問題はあまりないが、外の世界ではそうはいかない。息子一人では確実に周囲と軋轢を生む。だが、レオナルドと一緒ならば女性、特に胸の大きい人相手とは仲良くするかもしれない。暴走しがちな親友のフォロー役に徹すればアークはわりかしおとなしいのだ。

「お母さんは兄さんが心配じゃないんですか？　あの人はあの変態と一緒なんですよ？　きっと今頃洗脳されて兄さん自身も変態にクラスチェンジしてるに違いありません」

「それは過保護よ。とゆーかアークは洗脳されそうにないわ。逆にレオ君が妹萌えに洗脳されそう」

それよりもまずシスコンの時点で変態ではないかしらとディーネは密かに思う。

ただ、そのシスコンも自ら妹と離れる決意をした。親としては息子の急な心変わりにビックリではあるが、いつまでもアディエルにかまけているのもどうかと思っていたので息子の成長は歓迎するものである。

その時、玄関の方から謝罪に来ていたレオナルドの父親の相手をしていた夫の声が聞こえてきた。

「とにかくアークはレオ君に無理矢理連れてかれたわけではなく自分の意志で出て行きましたから問題ありません」

その夫の言葉に反応して顔を上げた娘の姿を見てディーネはうわぁとこれから来るであろう娘の癇癪に対して覚悟を決めていくのだった。

最初に兄の部屋を見た時は隠れて自分の様子でも伺っているのだろうと思っていた。
声をかけなければ起きて来ない兄を起こすのは毎日の自分の仕事であり、時々軽いいたずらとして兄は気配なく自分の後ろに立って脅かすことがある。
だけどその日は何かが違った。
部屋には兄の姿がないだけではなく、開けっ放しのクローゼットの中には兄お気に入りの服も数点なく、また、兄が趣味で作ったり購入した拷問グッズもなかった。
そして後ろを振り返っても存在しない兄の姿にアディエルはいつもと違うという確信を更に深めていく。
新手の自分弄りならばまだ良い。だが、アディエルの中では徐々に不安が大きくなっていく。
いてもたってもいられず家の中をひっくり返す勢いで兄の姿を探したが、どこにも兄はいない。そのまま何事か話し掛けようとした両親を無視して外に出て兄の姿を探した。まだ朝は早いが農作業している人はたくさんおり、その全員にアディエルは兄を見なかったかと尋ねた。しかし返ってくる答えは見てないの一択だけで、仕舞いには兄と仲の良かったレオナルドという青年までもがいなくなったという情報が入ってきた。
この二人が同時に村からいなくなるなど無関係なはずがない。聞けばレオナルドは村を出るという置き手紙を残したという。となれば兄も村から出たに違いない。
アディエルは兄の行動から目を離した自分を呪いたくなった。

アディエルは自分が普通ではないと思っていた。それは容姿がどうのこうのというわけではなく、自分の頭の中の話だ。
アディエルは前世という名の記憶を持ってこの世に生まれ落ちた。
前世では自分は聖天族という翼を持つ種族であり、とある女神に

忠誠を誓っていた存在だった。
そして前世の自分の記憶はとある男が現れたことで急速に終焉へと向かっていく。
それは自分の兄によく似た男。男は圧倒的な実力でもって自分を下し、ついには敬愛する主までをも追い詰めていった。
その主の危機に駆け付けるべく自分は痛みと眠気に苛まれる体に鞭を打ち、男の背後から剣を突き刺した。
完全に男の意表をついた攻撃はあっさりと通り、男を殺したかに思えたが、男は最後の力でもって自分の腕を掴んで身に纏う炎で焼き殺した。
ただの炎なら自分が死ぬことはなかったであろう。だがしかし、その炎は敬愛する主すらを追い詰める実力を持った者の発したものであり、燃え尽きる前の蝋燭の如きもの。炎は一瞬で身を焦がし、堪える暇もないままに自分の命を奪った。

そうした前世を持つアディエルであるが、自らの双子の兄として生まれた男は前世で自分を殺した男とよく似ていた。
自分がそうであるように兄もまた彼の人の生まれ変わりかもしれない。
そう思ったアディエルは兄を監視することにした。だが、兄は多少おかしくはあったが、記憶に残る男のように無茶苦茶強いというわけではなく、あくまでも一般の範疇に収まるような人物だった。
故に大した危険はないとただの兄として接するようになり、親にすらまともに心を開かない兄が自分には悪戯っ子のように接してくれることが嬉しくもあった。ただ、兄が自分以外の村で変態扱いされる男にも心を開くようになってからは若干面白くはなかったが――
そんな兄がその男と共に自分の前から姿を消した。そのことはアディエルにとって大変なショックだった。兄は自分よりもあの変態と一緒にいることを選んだ。だが、兄が自分の意志で村を離れるはずがない。ならば悪いのはあの変態に違いない。アディエルの考え

は村人の大多数と同じ所へと帰結した。
そんな時に外から父の声が聞こえて来る。
「とにかくアークはレオ君に無理矢理連れてかれたわけではなく自分の意志で出て行きましたから問題ありません」
なぜ、父はこうも言い切ってしまうのか。
そう考えた時に出た答えはすなわち、
父はもしかしたら兄が出ていく所を見たのか――
そう思った瞬間アディエルは立ち上がり玄関へと駆けていく。そうして見えた父の背中にタックルをかました。
「げふっ」
弾け飛んだ父の背中に乗っかるような格好になったアディエルは構わずに父へと疑問をぶつける。
「兄さんが出ていく所を見たのですか？」
思っていたよりも大分低い声がアディエルの喉から出てくる。
「アディ……まずは落ち着いて父さんの背中から降りようか」
「そんなことはどうでもいいです。で、解答は？」
「見ました。とゆーか話もしました」
父の言葉にアディエルの胸の内に怒りが沸き上がる。
「止めなかったんですか？」
「男の旅路を邪魔するのはよくないかと思いまして……」
「うちの倅も一緒だったのか！？」

「黙りなさい。今は私が父に質問してるんです」
「は、はい……」

グリードはアディエルの放つ得も言われぬ重圧にすごすごと引き下がった。

「レオ君の姿は見てない。多分どこかで落ち合ったんだろうね。父さん達も村の人達の話を聞いて知ったんだよ」

ガルダの言葉にグリードは落胆する。ならば自分が気づく以外に息子を止めようがなかった。

「父さん、達？」

そしてアディエルは父の言葉から気になる部分を拾い上げる。
そして振り返ってそこにいた母を睨みつける。

「お母さんもいたと言うことですか？」
「ごめんなさい」

娘の剣幕にディーネは早々に白旗を上げた。

「なぜ止めなかったんですか？」
「お父さんが行かせようって」
「母さんっ！？」

妻の裏切りにガルダは絶望に満ちた声を上げる。
この体勢はまずい。下手なことを言えば娘に殺られるかもしれない。そんな恐怖がガルダにとってアディエルの体重を重く感じさせる。

「兄さんは……本当に自分の意志で出ていったんですか？」

しかし、アディエルの発した問いは何やら泣きそうな声音であり、口から出任せなど言える雰囲気ではない。

「ああ」

だからガルダは誠実に、そしてただ一言に多くの意味を込めて答えた。

「そうですか……」

父の解答を聞いてアディエルの頭は色んなことを考えていた。

そして、その思考はとあるものへと辿りつく。

それは前世で女神に仕えていたアディエルにとって最悪の予想。兄はやはりあの男の生まれ変わりで、隠していたのかそうでないのか、とにかく自分と同じく前世の記憶を持っていたのではないか。

あれだけの実力を持っていたのだ。自分が前世の記憶を持っていたのにあの男が持っていないはずがない。

だとすれば兄が外の世界に行って目指すのは天上の国だ。そして今度こそ女神ランカトゥーリス様との決着をつけにいったに違いない。ランカトゥーリス様が今の兄に負けるとは思えないが万が一がある。それにランカトゥーリス様が勝とうとも兄が死ぬ。出来ればそれは避けたい。

――となれば

「私も村を出ます」

「へ……」

「あら」

娘の言葉に父は間抜けに母はこう来たかという声を発する。
そうして行われた両親の説得にも応じなかったアディエルはアーク達から遅れること十日、エリス村から父をお供に出発した。
アディエルの出立を聞いた村の男達のほとんどが彼女を止めようとしたり、ついて行くと立候補したがそれぞれの家族に止められて泣く泣く見送ったと言う。

バベルのある町（夕食編）

「でけえな」
「無駄にな」

アークとレオナルドは天高く雲を突き抜けて存在する巨大な円柱を見上げながら呟いた。
あれこそが『バベル』
天上の国へと至るための道である。
二人は四十二日に渡る長き旅路においてやっと見えたその塔に向かって感慨深げにその胸中を語る。

「あれを登りきれば全世界の女性巨乳化計画が完遂するんだな……」
「あの塔のてっぺんから下を見たら下界に住むゴミ屑共が本当のゴミになっちまうな」
「こらアーク。まだ見ぬ胸の大きな女性をゴミと一緒にするな。巨乳は正義なんだぞ？」

何はともあれ、やっと目的地が見えたことで二人は多少饒舌になっている。

「そんなことよりさっさと街に行こうぜ。久しぶりにベッドが恋しい」
「そんなことって……まあいい。ベッドが恋しいのはオレも同じだ」

レオナルドは馬車を気持ち急いで走らせる。バベルはその巨大さ故にかなり遠くからその姿を見ることが出来る。そのため本日中に着くかは怪しいが、出来れば今日の内に街まで辿り着いておきたかった。

◇◇◇

グロリアには日が沈んだ頃に辿り着くことが出来た。結構な無理をさせたため馬の疲労は激しい。
そのため、もう不要だとばかりに適当な店で売り払い、生活費の足しにした。
その勢いのままこれまた適当に目についた宿に二人分の宿泊費を払って荷物を置いてアーク達は街へと繰り出した。

グロリアの街は二人の故郷であるエリス村よりも大分栄えている。エリス村は固い土の地面であるが、グロリアは石畳で舗装され、更には二階がある建物すら珍しいと感じる二人には四階、五階がある建物は目に新しく映った。

「なんか都会って感じだな」
「田舎者丸出しの発言だな」
「おめえも田舎もんだろうが」

辺りをキョロキョロと物珍しげに見回す二人の姿はどこからどう見ても田舎から出てきたばかりの人間の仕草だ。
だがグロリアという街はそんな人物が日々訪れる街であるから、そういうことを気にしているような者はいない。

「おっ、あれが噂の獣人族か。ホントに獣耳と尻尾がある」
「なんか渾身の力で鷲掴みにしたいな」

「うおっ、角っ！　魔霊族だぜ」
「ああゆうのってとりあえず折ってみたいよな」
「ああっ、なんて優美かつ美麗かつ耽美な胸なんだ……お、お姉さん一回揉ませてください。……えっダメ？　じゃあせめて撫でさせてください。本当は吸いたいけどそれで我慢しますから……こ、これもダメっすか」
「おいおい、男が土下座してまで頼み込んでんだろうが。どうせ、そんなん男に触られるしか使い道ないだろ。このアバズレ」

二人の街歩きはほぼ人間観察に使われていた。
人間しかいない村で育った二人にとっては違う種族というただそれだけでも珍しいのだ。
ただ、二人が一番見つめる時間が長かったのは最後の胸の大きな人間の女性だったりする。

「んじゃ、とりあえず飯を食ってから今後の計画を立てよう」
「ああ。ところで痛くないのか？」

レオナルドの頬には先ほど声をかけた女性から貰った平手により紅葉型の跡がついている。ちなみに同様に平手をされそうになったアークはきっちりとかわしている。

「巨乳から賜るもの。それ全てがご褒美なりってな」
「そういやビンタ喰らった瞬間お礼言ってたっけ」

晴れやかな顔で断言する親友がそれでいいならとアークは平手をかました女性に対する六パターンの仕返しを封印することにする。

「んで、飯はどこで食う？」

見渡せば至るところに食事を取れそうな店がある。こういう時は情報収集が出来そうな酒場辺りが適当かとアークは思うが

「ふっ、決まってるだろ」
「そうか。んじゃ女が好きそうな店を探すか」
「ただの女じゃねえ。乳の大きな……」
「わかってる」

と言いつつも巨乳が行く店ってどんなんだ？　とアークの頭を悩ませながら二人は店を探す。
そして目をつけたのは路地の中に入口のある小洒落たレストラン。
巨乳が好きそうかどうかは別にして女性が好きそうな店の造りに二人は即決して店内へと足を踏み入れる。

「いらっしゃいませー」

出迎えたのは黒を基調としたミニスカートの制服を着た店員。頭には猫耳がついており、尻尾はフサフサ。薄いブラウンの髪を肩まで伸ばした人懐っこそうな少女である。

「お客様は二名でのご来店ですか？」
「見りゃわかんだろ」
「……当店のご利用は初めてでしょうか？」
「初めてに決まってる。客商売なら客の顔くらい覚えとけ」
「……おタバコは」
「俺らがヤニ臭いとでも？　失礼な奴だな」
「……こちらへどうぞ」

頬を若干引き攣らせながら店員の少女は二人を席へと案内する。レオナルドが店の中の女の子の胸の大きさを物色中なのが少女にとっての災難だったのかもしれない。ちなみに少女の胸はアディエルよりも若干小さい位なのでレオナルドは早々に目を離している。

「では、当店のシステムをご説明させていただきます。当店はビュッフェスタイルであちらにある料理を自分で好きな分とってきてご賞味下さい。料金はお一人様一律ですが、お飲み物は別途頂いております。こちらがお飲み物のメニューになりますが、ご注文はございますか」

「あの、席はあっちのご婦人方と相席がいいんだけど」

レオナルドが女性二人連れの客を指差して言う。当然ではあるが胸が大きい。

「申し訳ありませんが、席が込み合っているわけではございませんので相席のご相談はご当人同士でお願いします」

「んじゃとりあえずあの人達の近くの席にしてくれ」

「……かしこまりました。こちらへどうぞ」

二人は来て早々に席を移動することになる。

「最初から気を使えよ」

「くっ……大変申し訳ございません」

席についたレオナルドは早速近くの女性へと声をかけている。アークはじっと飲み物のメニューを眺めていた。

「酒がねえぞ」

「申し訳ありませんが、当店ではお酒はお出ししておりません」

「謝ってばかりだな。謝るより先に改善しろ。まあいい、俺はアイスコーヒー。こいつはトロピカルクリームソーダで」
「ってなんでだよっ！　オレもアイスコーヒーね」
「ご注文を繰り返させていただきます」
「そんなんいらないからさっさと持ってこいよ」
「かしこまりました」

二人の注文を聞き終え店員は足早に場を離れた。

（何なのよ、何なのよ、何なのよっ！）
獣人族の少女アイラ＝クジョウは憤っていた。
それは今さっき入ってきた二人の男の客達に対して。
この店『セミヤー』はアイラの両親が営むレストランで雰囲気と洒落た料理がビュッフェスタイルで安価に食せるとあって女性に人気の店だ。
雰囲気に気圧されてか男の客はあまり来ないのだが全く来ないわけではない。だから男相手に接客することにも普段は何とも思わないのだが、今入ってきた客の態度はアイラの接客人生の中でも確実に上位に入るほど嫌な客だった。
店の性なのかクレーマーが来ないことはないが、入ってきていきなりクレームをつけられたことは今までない。それどころか雰囲気いいですねと褒められることが多い。
だと言うのにあの男共、特に銀髪の美少年は口を開けば偉そうにこちらをけなす。入店時に思ったお近づきになりたいという淡い思いは早々に吹き飛んだ。茶髪の男は茶髪の男で女性客や他の店員の物色をしている軽薄男だ。
とにかくアイラにとってアーク達二人は嫌いのカテゴリーに区別された。

「ねえねえ、あの二人、特に銀髪の子かっこよくない？」
「あ～、でも茶髪の人も銀髪の子と並ぶと見劣りするけど十分イケてるよ」
「でも着てる服は田舎臭がする。こっちきたばっかなのかな？」
他の店員が騒いでいる。それを聞いてアイラはそんないいもんじゃないわよと小さく呟く。
「アイラはどっちがタイプ？」
「……どっちも嫌！」

店員に注文したアイスコーヒーを持ってくるのを待ってアークは料理を取りに行く。
レオナルドはただいまナンパに忙しいためにレオナルドの分も適当に持っていくことにする。基本肉は多めだ。
「ほれ」
「お、サンキュー」
戻るとレオナルドが一人アイスコーヒーを飲みながら座っている。近くにいた女性達の姿はなく、代わりにレオナルドの頬には新たに紅葉が増えていた。
「がっつき過ぎるからそうなる」
「おっかしいなー……あの人の胸がどんなに素晴らしいか褒めてただけなのに……」

下心が透けて見え過ぎたのが敗因だろうなと予想しながらアークは持ってきた料理を口に運ぶ。瞬間、アークの目が見開いた。

「なに、辛いの？」

「……いや、うまい」

「マジで？　んじゃオレもいただくとすっか」

レオナルドも料理を口に運びアークとほとんど変わらない反応をした。

アークが普段何かを褒めることはほとんどない。そしてアークが褒めるという行為は基本的に相手に対する皮肉だったりするが、素直にアークが褒めたとなればその信用度は高い。そう思っていたレオナルドの予想以上に口にした料理は美味しかった。

「ヤバ、うまっ」

「そこの、シェフを呼んでくれ」

「はあ？」

料理にがっつくレオナルド。そして何を思ったかアイラに対して未だ経験したことのない注文を突き付けるアーク。

だが、嫌いだとはいえ客の注文を無視するわけにもいかずアイラは指示を仰ごうと店の厨房へと向かった。

「パパ」

「どうしたアイラ？　なにか問題でもあったか？」

娘のアイラと似た耳と尻尾を持ちながらアイラとは似ても似つかない巨漢の禿頭の男がアイラの困ったような声音になにかあったの

かと心配しながら声を返す。
「いや、問題とゆーか何とゆーか……お客さんがシェフを呼んでくれって」
「何！？　わかったすぐ行くっ！」
慌てた様子で自分の様子をチェックしだした父の姿を訝しみながら、アイラは厨房から出た父の後についていく。
何か無茶を言うようなら店から追い出してやる。そんなことを考えながら――

「お待たせしました。当店のシェフを勤めておりますタンゾウ＝クジョウと申します」
「なるほど。これらの料理は全てあんたが？」
「全てというわけではなく、ワタクシの妻共々調理させていただいております。お口に召しましたでしょうか？」
「大変美味かった。これからも精進してくれ」
「ホントマジうまいっす。こんなん村から出てきて初めて食べました」
「ありがとうございます。こちらには最近きたので？」
「ああ、クロック地方のエリスという村から来た」
「エリス村ですか。あそこの農産物は大変いい。うちでもエリス村産の米を使用してますよ」
話が弾んでいる。しかも和やかに。そんな父と問題児っぽい男の客達の話に入ることも出来ずにアイラは立ち尽くすことしか出来ない。
そして何も出来ないままに客と父の会話は終わり、また厨房へと戻っていく父の後にアイラはついていく。

「ママ、ついにやったぞ」
「おめでとう」
そして厨房に入るなり父は母に喜びの報告をする。
「パパってばどうしちゃったわけ？」
その父の言動に疑問符しか浮かばないアイラは理由を母に問う。
「パパったら昔からシェフを呼んでくれって言われるのが夢だったのよ」
我が父親ながら変な夢を持ってるなと呆れるアイラであったが、それを叶えたのがあのムカつく客というのも何だか納得がいかなかった。

「さて、今後についてだが」
腹八分目どころかほぼ十割詰め込んだレオナルドは持ってきたデザートのケーキにフォークを差しながらアークを見据える。
「まずは住居の確保だな」
「宿でいいんじゃね？」
「それも悪くないが、腰を落ち着けるならどっかで部屋を借りた方が安くつく」
基本的に宿というものには長期滞在であろうとあまり割引がある

わけではない。しかもバベルの攻略に何日も部屋を空けることになると事前に調べているレオナルドにしてみると宿泊費が無駄に思えて仕方がなかった。

「んじゃ、明日は部屋を探すのか？」
「あとは装備を調えなきゃならねえ」

バベルにおいての困難とは則ち中に棲息する魔獣との戦いのことである。
どこから生まれ、どこにいるのかわからないが、バベルに入って魔獣に出会わないということはまずない。装備を調えることはバベルに挑むことにおいて必須である。

「そんで一番大事なのがスキルカードの作成だな。オレはコネを使って入手済みだが、お前はないだろ？」
「ああ」
「それがなきゃ、バベルの攻略は無理だ」

スキルカード。
この世界においてスキルとは戦うために最も重要なものだ。スキルがなければ強敵とは戦うことはできない。
スキルは鍛練や思い付きなど様々なことで入手するが、入手したことは本人にもわからないし、今自分がどんなスキルを持っているのか知ることは出来ない。
しかし、それを可能とするアイテムがスキルカードと呼ばれる金属で出来た成人男性の手の平より少し大きいくらいのカードである。使用した金属によって書き込まれるスキルの数が違うが、取得したスキルの名称や解説が乗り、スキルを扱う際の助けとなる。
これを持たない者のバベル攻略はまず無理と言って良い。

「そんじゃ、それも作るか」
「もちろんだ」
「そろそろ出るか？」
「あー……もいっかいケーキ取ってくるわ」
「ついでに俺にゼリーでも持ってきてくれ」
「あいよ」

たらふく腹を満たしたアークとレオナルドは支払いを済ませようと席を立つ。
それに気付いたアイラはレジへと向かった。

「ご苦労」

どこまでも偉そうなアークに内心ムッとしながら代金を受け取りお釣りを渡そうとする。

「駄賃だ。取っておけ」
「い・り・ま・せ・ん」
「ふっ、態度が悪い店員だな」
「貴方の方がよっぽど態度が悪いですけどねー」

にこやかな顔をしながらアークに対して毒づく。店員としてはいただけないその所作にアークは特に気にした様子もなく嘲笑という言葉がピッタリな笑いを顔に貼付けながらアイラを見ている。

「女、いい度胸だ。夜に出歩く時は背後に気をつけろよ」

そして冗談とも本気ともとれる声音でアイラに脅しをかけるのだった。
もちろんアークなりの冗談である。彼は今、うまい食事をとれて

非常に気分がいい。
だが、アイラはそれが分からずにもしかしたら犯られるんじゃないかとしばらく夜は家に引きこもることになった。
それなのにも関わらずほぼ毎日のように店に来る二人の男の相手は何故かアイラがすることになるとはこの時アイラ自身は思いもよらなかったのである。

バベルのある町（装備購入編）

次の日、宿を出た二人はまず不動産屋へと向かった。

「広さはどうでもいいんですけど、なるべくバベルに近くて、なおかつ安い部屋探してるんですけど」

「そーですねー……ここなんかどうですか？　値段はまあまあですが、家具がついて商店街も近いですから日々の買物も便利ですよ」

「おっと、大事な条件を忘れてた。隣に巨乳の女性は必須です。例え、人妻だろうとおばあちゃんでもいいです。あ、だからと言って未婚の女性やロリで巨乳な少女を蔑ろにしてるわけじゃありませんよ？　とにかく隣人は巨乳の女性でお願いします」

「……そういうのはうちでは取り扱ってないです」

「じゃあアーク、違う不動産屋に行こうか」

「これのことは無視していい。そこは二人で住めるのか？」

「はい。２ＬＤＫのお部屋ですので問題ないかと思います。お部屋を見に行きますか？」

「めんどいからいい。そこに決める」

すごく適当に部屋を決める。とゆーかアークにしてみればレオナルドの言う条件に当てはまるような部屋を探していてはそれだけで日が暮れそうだと思ったのだ。もちろん面倒だというのも大きな理由の一つである。

とんとんと話は進み、大家とも話をつけて二人はグロリアでの住み処を手に入れた。

二人が一緒に住むことにしたのは一重にお金の節約に過ぎない。元々二人はお互い相手が勝手に自分のベッドで眠っていようともそれを少しどけて横で眠れるくらいの仲なので一緒に住むことに異議

などない。
　ただ、レオナルドの談では稼げるようになったら別々に住もうということだ。理由としてはさすがに野郎二人暮らしのところに女性を連れ込んで色々出来ないことが第一に挙げられ、第二にもし目覚めたら困るということらしい。何が目覚めるのかは口を固く閉ざして語らないが、それはアークも嫌だった。

「アーク！　勝手に決めんなよ」
「お前、隣に巨乳が住んでたらぜってー覗き穴空けるだろうが。修理費払うの嫌だし」
「修理費はオレが払うに決まってんだろ」
「えっとウッドスフィア君、まずは覗き穴を空けないようにね」
「大丈夫です。生活音でもそこそこイケますから」

　大家の言葉はエリス村の変態の名を欲しいままにしたレオナルドには届かない。レオナルドは村一番の巨乳を持つラフラ（五十二歳。夫と二人の子持ち。次男はレオナルドの一つ上）の家の壁に三日間不眠不休で張り付いて正確にラフラの放つ生活の音のみを聞き分けてずっと聞いていた経験を持つのだ。途中何度もアークがどぎつい手段で制止しようと聞き入れることはなかった。そう考えるならば気弱そうな外見の中年男性である大家にはこいつを止めることなど出来まいと内心アークは冷静に分析している。

　大家と共に部屋に行き、鍵を預かったあと荷物を置いて二人は町へと繰り出す。
　まずはアークのスキルカードを作りにいくために町の武器屋へと向かうことにする。ついでに二人の武器も購入する心算だ。

「んで、アークはどんな武器を使うつもりなんだ」
「槍」
「なんだ決めてんのかよ」
「なんとなくな」

あの夢の続きを見てからというもの、アークは自身が使用する武器は槍にすると心に決めていた。
ただ夢で使っていたからというだけでそうと決めたわけではない。色々考えた結果、自分に最も適しているだろうと思い、判断したのだ。

「そーゆうレオはどうすんだ？」
「オレ？　オレはフィーリング？」

対してレオナルドは全然決めていなかった。物語の英雄は槍使いであり、お伽話の騎士と言えば歴戦の剣士だ。だが、レオナルドには合わないような気がしていた。

「武器なんて今じゃあんまり見る機会すらないからな。自分に合った物がなんなのか知る機会はなかったしな。まあ、英雄様のおかげであり、英雄様のせいでもある」

数百年前、大陸は三つの国に分かれて日々戦争をしていた。
一つは人間の国、もう一つは獣人族の国、そして最後の一つは魔霊族の国。
だが、現代にまで語り継がれる物語では魔霊族の英雄がその戦争を収める。
英雄は第四の勢力として人間、獣人族、魔霊族、そして聖天族の四種族を率い彼の国の尽くを打ち破る。
そして、英雄は勢いそのままに天上の国へと至った。

英雄なくした大陸の国々は戦争でそれぞれのトップを亡くし、休戦のために和平へと動き始める。
後にその動きは時間をかけて国の統合へと変わっていき、大陸は平和になった。

人々は知らないだろう。
英雄と呼ばれる男が戦を始めた理由が、たまたま昼寝をしていた場所の近くで大規模な戦いがあり、その音で気分を害したからといって行われたことを。
そしてお気に入りの配下の一人に「貴方なら神すらも越えられるのでしょうね」と言われて天上の国を目指したことを――

◇◇◇

武器屋についてとりあえず色々見て回ると言ったレオナルドと店内で別れる。
武器屋はグロリア最大の規模を持つと言われる『ブルームーン』という店を選んだ。初心者から中級者向けの多種多様な武器を店内に陳列している。店の広さは最大規模というだけあって、中々に広い。三階建ての建物は階層別に初心者、中級者、上級者と分かれている。一つの階層がアークが昨日行ったレストランの倍くらいの面積あった。ただ、上級者用はお得意様だけにＶＩＰとして三階にて普通は手が出ないような値段の武器を物色することができるようになっている。
そんな中、一階にいる店員の一人を捕まえてアークがスキルカードを作りたいと言うと、店員は笑顔でアークを一階にある別室へと

連れていった。

「こちらが当店で扱っているスキルカードの素材となっております」

そう言って店員が出してきたのは金、銀、銅、鉄を始めとした十七種類の金属。

そのひとつひとつに対しての説明を丁寧にしようとする店員の言葉をアークは遮る。

「金貨一枚で出来るものをよこせ」

これから武器や防具など諸々必要になるであろう物をおおよそで計算し、アークは出せる上限をまず言う。

「それでしたらこのロジウムなんかがよろしいかと思います」

そうして示されたのは銀白色の金属。自身の髪の色とよく似たそれは正に自分に相応しいのではないかと思ったアークは即決でそれに決める。

「では、金属を精製してスキルカードを作成しますのでこちらの注射器で少しばかり血を抜かせていただきます」

「ああ」

アークは袖を捲って腕を突き出す。

スキルカードは持ち主との繋がりがなければその機能を発揮できない。繋がりとはこの場合、同じ血が流れるということになる。

スキルカードは金属でありながら血が通っているのだ。そしてその繋がりでもって持ち主の持つスキルをその身に映すのだ。

スキルカードの製法は古来から脈々と受け継がれている。ただ習

得は難しく、スキルカードを作れる者は大陸に百人ほどしかいない。その多くがグロリアに集まっており、また、その多くが弟子をとってスキルカードの製法を後世に伝えようとしている。

「はい、もうよろしいですよ」

注射器一杯に血を抜かれたところで針を抜かれ、消毒液に浸した綿を渡される。それで先程まで注射器の針が刺さっていた箇所を押さえながらアークは立ち上がる。

「どれくらいでできる？」

「出来上がりには半日ほどかかります」

「なら金を先に払っておく。ついでに店の中も物色するが、それに飽きた時にまだ出来てないようなら違う店で時間を潰して来る」

「店内をご案内させましょうか？」

「いや、いい。切れの悪い糞みたいに尻について廻られるのは不快だ」

「わかりました。何かあれば近くの店員にお申しつけ下さい」

アークは部屋から出てそのまま二階へと上がる。自身の武器を探すためだ。

一階の物は初心者用だけあってどれも安いが、それだけに頼りない。

二階でアークが目的の武器を探していているとある区画に槍が並べられていた。一階の乱雑に纏めて置かれている物とは違い、一本一本がケースに入れられて並べられている光景にこうまで違うかと初級と中級という差を感じる。値段自体も一階の物とは桁が一つ違う。

その中の一本にアークは目をつける。

木目のような模様のある金属を穂先に持つ槍。値段はスキルカー

ドに支払った三倍はある。アークは一目でそれが気に入った。

「おい」

店員を呼び付ける。すぐさま声に反応して店員が駆け付けた。ブルームーンはそれを必要としない客にはついて歩いたり、説明等はしない。だが、求められればすぐさま応じる。それを信条としていた。

「いかがなさいましたか？」

「こいつを貰う」

アークは先程目をつけた槍を指差す。

「お目が高いです。こちらはダマスカスの槍と言いまして、折れず、曲がらずを信条として作り上げられた一品でございます」

「御託はいいからさっさとよこせ」

「はい、ただいま……ではお会計はこちらでお願いします」

そして会計を済ませてアークは穂先を布で包んだ槍を肩に掛けるようにして持ちながら一階に降りてレオナルドの姿を探す。

すると斧の並ぶ棚の前で頭を悩ませているレオナルドを見つけた。

「斧にするのか？」

「ん？　おっ、アークはもう武器を買ったのか！　お前はいっつも即断即決だねぇ～。スキルカードは？」

「出来上がりまで半日かかるらしい」

「ま、当然だわな」

「それより」

「ん。これなら使い慣れてるし、何より一撃必殺って感じがしない

か？」

雪は降らないが、エリス村にも冬はある。その時の暖は暖炉で薪を燃やしてとる。日々の料理においては近年は魔晶板による加熱装置に取って代わってしまったが、暖炉に関しては未だに健在で、レオナルドは十二の時から毎年のように薪割りをしていた。

ちなみに魔晶板とは、現代において利便化された炊事用機器や電灯等多数の機械というものを動かすためのエネルギーの基である。また、粉にして田畑に蒔けば作物の成長をリスクなしに早める作用もある。これを手に入れることが出来るのはバベルの中だけだ。魔獣を倒した後に残るものが魔晶板である。その名の通り魔導の力の篭った水晶の板であり、純度によって色が変わる。また、これこそがバベルにおける恵みの一つでもある。

「オレは今な、値段の安いのを買うか、出せる値段ギリギリの物を買うか、気に入ったのを買うかで迷ってんだよ」

「気に入ったの買えよ」

「あ、やっぱお前もそう思う？　んじゃそうしよっと」

アークが背中を押したことで簡単にレオナルドは結論を出す。もしかしたら既に心の中では決まってたのかもとアークは思う。

レオナルドが購入した斧はソルジャーアックスというちょっと重量のある鉄製の斧。初心者用が立ち並ぶ一階の商品の中でも割りと中級者寄りの代物で、一階にある斧の中では二番目に高い代物だ。

あいついい買物したなぁとアークは親友が会計を済ませてくるのを待った。

まだ、スキルカードが出来上がるまでは時間がかかるということで二人は昼食と防具を見るためにブルームーンから出た。
そこらにある屋台から目についたものを買って食しながら防具屋に向けて歩いていると嫌でも目に入る巨大な建物が目に入った。
そこは周りの建物よりも頭一つほど高く、荘厳な佇まいをしている。

「あれは何の店だ？」
「知らん。でも何か高そうだな？」
「まあ、どうでもいいか。とりあえず防具が先だ」
「行ってみないのかアーク？」
「縁があればな。今日はない」
「まあな」

二人は店の前を素通りする。完全に興味を失った二人は店の看板すら目にしなかったがそこにはこう書かれていた。
『スキルのお店　ノア』

◇◇◇

「ふぃ～、いい買物したぜ～。な、アーク」
「なんか……なんかだな」

防具屋での買物を終えた二人が店から出てくる。
レオナルドの顔は被った鉄兜のせいで目と口しか見ることができ

ない。アークはそれを見ながら言葉にし難い複雑な胸中を吐き出す。
アークとレオナルドの姿はレオナルドの被る鉄兜をのぞけば全く一緒だった。鉄の鎧一式。重量型の戦士においては登竜門ともいえる装備だ。これは二人同じのを買うなら値引きしてやると言う店主の言葉に飛びついたレオナルドが齎した結果である。
別に鉄の鎧が悪いわけではなく、この都市において最も近しい存在とお揃いの格好なのがなんとなくアークは嫌だった。故に最後の抵抗とばかりに兜だけは拒否し、変わりに額部分にチタンの合金が仕込まれた鉢巻きをしていた。

「ぷっ、鎧に鉢巻きってダサ……」
「んな変な兜つけて悦に浸ってる方がダセえよ」
「……」
「……」

しばし睨み合う二人。

「……どっちもダセえってことにしようぜ」
「だな。そろそろスキルカードも出来る頃だろ」
「んじゃ行きますか」

帰りがけにブルームーンへ寄ってアークは自身のスキルカードを受け取る。
銀白色のそのカードと言うよりは薄い金属のプレートというべきものを手に取った瞬間、ドクンと心臓が大きく脈動するのをアークは感じた。
そして次の瞬間、アークのスキルカードに文字が浮かび上がった。

《新たなスキルを得た》
【スキル名】吸血（ケガ・体力の微回復、吸血相手のスキルを一人につき一度だけランダムで得ることができる）

バベルのある町（装備購入編）（後書き）

今回はウィキ〇ディアさんに頼らせていただきました。
それとダマスカスってのは都市の名前由来だよってツッコミはなしでどうかお願いします（響きがいいですよね……ダマスカス）

（補足）
作者の中では
銀＞ロジウム＞銅と思っております。

バベルのある町（道具購入編）

「どうした？」

スキルカードを手にした瞬間動きを停止してじっとスキルカードを見ているアークを訝しんで声をかけるレオナルド。

スキルカードは個人の物なので、他人が扱うことや勝手に見ることはできない。何か不具合でもあったのかと思うのは当然である。アークにスキルカードを手渡した店員も同様に心配そうにアークを見ていた。

「いや、新しくスキルが手に入った」

「おお、そうかおめっとう」

「おめでとうございます」

その場にいた二人が祝福の言葉を述べる。

スキルカードには通常作成後に習得したスキルしか記載されることはない。それまで習得したスキルはあることを成さないと習得したことすら知ることができないのだ。

それはスキルの使用。スキルカード作成以前に習得したスキルは使用することで新たに得たスキルとして記載される。

そのことはアーク自身も知っていた。だが、アークにしてみれば今回手に入ったスキルを使用した覚えなどない。だからこそ戸惑いを隠せなかった。

それを言うとレオナルドもなんでだろうとアークと同じく頭を捻るが、

「多分常時発動型のスキルだからではないでしょうか？」

店員の言葉にレオナルドはなるほどと納得する。
スキルとは基本的には自らの意志で持って発動させるものであるが例外も存在する。それが常時発動型スキルである。代表的なものとして耐性系が挙げられる。それは物理攻撃耐性だったり、火炎耐性だったりと攻撃に対する耐性が増加するものであり戦いにおいては結構重宝するものだ。
だが、アークは納得できなかった。どう考えてもそうゆう物ではない気がする。常に吸血してる状態ってどんなだよと内心思いはしたが、店員は頭は悪そうではないがパッとしない印象の男であまりスキルに詳しそうというわけではない。無駄なことはしない主義のアークにしてみればこれ以上の追求は出来なかった。

「さてと、次は……ナンパかな？」
「なんでだよ」

店を出て開口一番に面倒そうなことを言うレオナルドにツッコミを入れるアーク。
まだ日は沈みきっておらず、空を茜色に染め上げている。

「黄昏れ時ってのは女性をディナーに誘いやすいことこの上ないだろ」
「欲求不満なら今日は娼婦のような金さえ払えば股を開く雌豚にしてもらえよ」
「こら、よくも全ての女性の味方であるオレの前でそんな暴言吐いたな。想像してみろよ親の借金で仕方なしに体を売るしか選択肢がなかった巨乳の少女の苦悩をよ！」
「結局巨乳なんだよな」

レオナルドは胸の大きな女性以外がどうなろうとも基本気にもとめない。全ての女性の味方改め全ての巨乳の女性の味方がこの場合正しいだろとアークは思う。
そしてアークは基本的に認めた者の味方しかしない男である。

「いや、ちょっとふざけすぎたな。仲間を探そうかと思ったんだよ」
「仲間か……」

レオナルドは事前に調べあげてバベルの過酷さはよく理解していた。なにせ出来てから今までバベルを登りきった者がいないのだ。
バベル攻略においてケガは付き物。だからこそ戦力の増大は必須であった。
レオナルド達は田舎出身で喧嘩もろくにしてこなかった人間だ。仲間にするなら戦いに長けた者かケガを回復させるスキルを持つ者を引き入れたかった。無論胸が大きい女性限定ではあるが……

「つーか、んな都合よくいねえだろ」
「だな」

まだ、一度もバベルに入ったことのない初心者中の初心者であるアーク達の仲間になろうなどという奇特な者を探すのは骨が折れる作業だ。しかもレオナルドの希望はすごく限定的であり、条件に該当する人間を見つけること自体が難しい。

「ここは惰弱で頭の悪い奴を探して壁や囮として使おうぜ」
「え～、男～？」

レオナルドの惰弱で頭が悪い奴はイコールで男らしい。まあ、自分も考えはあんまり変わらないけどなとアークは苦笑いする。

「ま、とにかく明日一度バベルに入ってみよう」
「う～ん……最初に出来るだけ準備をしときたいんだけどな」
胸の大きい女性のこととなると考えなしの割りにレオナルドは自分の命が掛かる場面では慎重だ。いや、彼一人であったならもう少し大胆に行動していただろう。年下の親友の存在が兄貴分であるレオナルドの思考を慎重にしているのは自明の理だった。
「大丈夫。俺がいるんだぞ？」
どこから来たのかわからないアークの自信。だが、レオナルドにとってそれは無条件に信じられるものだった。
「よし、んじゃ明日は二人でバベルに入るとするか」
「おう」
「そうと決まれば雑貨屋で諸々の備えを買いに行こう」
そして二人は雑貨屋へと移動し、バックパックとバベル探索に必要になるであろう代物をそれぞれ購入した。一番重要であるバベル内の地図は一階層のみを購入し、あとはそれぞれ好きに見て回った。レオナルドは客の女の子達の胸の品定めを主にし、アークはレオナルドと一緒にいた時に目をつけていたコーナーへと向かう。
「ここ……いいな」
アークが目を付けたのは毒のコーナーだ。そこに並ぶ多様な毒に目移りしている。
「まさかこうも無造作に毒が置かれてるとは……」

「普段はこの棚を閉めてちゃんと鍵をかけておりますよ」

アークの呟きに誰かが答える。白髪混じりの黒髪の男だ。

「店員か？」

「はい。この店の店主を勤めております」

「そうか。なあ、即死性の毒はないのか？」

「それくらいの危険な物は信用に足る方にしか販売しておりません」

アークの問いに店主は即答する。言外にお前は信用できないから売らないぞという言葉が込められており、当然だなと思ったアークはそれ以上の追求はしなかった。

「では、今俺が買える一番たちが悪い毒はどれだ？」

「そういうことを言うお客様には売れる毒などございません」

「それでも商売人かよ」

「申し訳ございません。ですが、毒というものはそれだけ取り扱いを間違えれば大変なことになる代物ですからどうかご容赦を」

「定価の倍出す」

「申し訳ございません」

店主の意志は固く、アークは自分の物言いが間違ってたなと若干の後悔をしていた。

「ちっ、じゃあ他に毒を買える店はどこだ？」

「私にそれを聞きますかね？」

店主にはアークがどんなことをしても毒を手に入れようとしてることがひしひしと伝わってきた。

「……仕方ありませんね。こちらの毒ならお客様の武器に塗り付けて相手を切り付ければ効くまでは多少時間がかかりますが、数分間動きを鈍くできます」
「ほぅ、どういう心変わりだ？」
「他所で買われるよりもうちで買わせた方が良さそうですからな。ただ、むやみに人に使用しないという念書は書いてもらいます」
「いいだろう」

アークは毒の液の入った瓶をいくつか持ち、先を歩く店主の後についていく。
そして念書にサインをしてほくほく顔で毒の瓶をバックパックの中に入れ、レオナルドの元へと向かった。

「あれで良かったのかねぇ……」

後に残った店主は一人己の判断の是非を問うのだった。

◇◇◇

買い物をあらかた済ませた二人は一度部屋へと戻って来ていた。
部屋は２ＬＤＫの間取りで、二つの部屋は若干広めの方をアークが使用することになった。普通なら年功序列でレオナルドが広い方の部屋を使用するのだろうが、最初に課せられた三ヶ月分の家賃を支払ったのはアークであるため、レオナルドが譲ったのだ。
この部屋は基本家賃を一月ごとに大家に手渡しするシステムであるが、その家賃は一月後の物を支払うことになっている。そして期

日までに家賃が払えなかった場合、次の月の期日までに二月分の家賃を払わないと強制的に退去させられてしまう。
二人は交互に家賃を払うことにしたため、次は再来月にレオナルドが支払うことになった。

「とりあえず着替えてから晩飯に食いに行こうぜ」

部屋に入って早々にレオナルドは鉄兜を脱ぐ。兜の中は蒸れていたらしく脱いだ瞬間湯気がレオナルドの頭から立ち上った。

「やっぱ昨日の店か？」
「だな」

昨日入った店『セミヤー』は二人とも大変気に入っていた。味の良さだけではなく、好きな物を好きなだけ食べていいというのも育ち盛り（レオナルドは過ぎ去ったが）には丁度良い。

「ところで、アークはどんなスキルを得たんだ？」

着替えがてらにレオナルドはずっと思ってた疑問をアークにぶつける。自分はスキルカードを得て幾分か経つというのにまだ真っさらであるために、親友が得たというスキルが実は気になって仕方なかった。すぐに聞かなかったのはそれがどんなショボいものでもアークが恥をかかないようにという配慮からだ。
レオナルドの疑問にアークは自身が得たスキルについてわかる全てを教える。

「そりゃまたなんとゆうか……特殊だな」
「まあな。少なくとも店員の言う常時発動型ではないと思う」
「ってことはスキルカードを作成した後にお前がどっかで人の血を

吸ったってことか？」
「それはない」
「ってことは理由は一つだな。本当にあの場で新たにスキルを得たんだよ」

スキルを得るためにはいくつもの方法がある。
鍛練の積み重ねや思い付き、過去の経験などだ。他にもっと楽にスキルを得る方法があるのだが、二人はまだそれを知らない。

「そうか」
「そうだよ。つーかなんだそのスキル……超レアじゃねえのか？」
「知らん。でも、使い勝手は良さそうじゃないな」
「なんでだよ？」
「お前の立場で考えてみろ。スキルを得るためとはいえ有象無象の血を吸えるのか？」

アークに言われてレオナルドはその場面を想像してみる。想像の相手はまだ見ぬ巨乳の美女だ。

「巨乳ならイケる」
「それ以外は？」

アークの言葉にまたもレオナルドは想像を働かせる。相手は貧乳の女だ。

「無理だ。オレには出来ねえ……」
「だろ？」
「あ、でもお前のなら我慢すれば血を吸える気がする」
「気持ち悪い」
「ひでぇっ！　友情が壊されたよっ！」

そう言いながらも二人は笑っていた。もちろんアークもまたレオナルドのなら我慢すれば血を吸えるだろうなと思っている。ただそのことを口に出すことはない。

「んじゃ飯に行くか」
「ああ」
「キッチンが泣いてるぜ」
「俺らが料理すれば泣くことも出来なくなる体になる」
「違いねえや」

二人は冗談を飛ばし合いながら『セミヤー』へと向かっていった。せっかくついている立派なキッチン。これが本来の役目を果たすまではもう少しの時を必要としている。

そうして訪れたレストラン『セミヤー』にて。

「おいおい、スマイルは店の基本だぞ」
「なんでまた来るのよ……」
「聞こえてるぞ女。まあいいさっさと席に案内しろ。こちとら歩き続きで疲れてんだ」
「あと、席はこの店で一番胸が大きい子の近くでよろしく。二番目に大きい子がかぶりつきで眺められる席ならなおいいんだけど」

連日の二人の来店に機嫌を悪くしている少女の姿がそこにあった。

バベルのある町（道具購入編）（後書き）

書いてて二人の友情が気持ち悪い……
私ならいくら親友とはいえ血は舐めれないっす
まあ、それだけ仲がよいということで……
次回にやっとダンジョン突入です。

（補足）
家賃について
要は今月分ではなく、来月分を支払うということです。
それが何らかの理由で払えなかったら次の月に今月分と来月分を支払わなければ、出ていくというシステムです。

バベルへ突入

翌日、アークとレオナルドの両名は完全装備でバベルの前へと来ていた。二人はバベルに入るのは起きてすぐというわけではなく、昼ごろの体がきちんと目覚めた時間を選んでいた。

「遠くから見てもでけえけど、下から見上げるとすげえな……」
「これをある日突然女神が建てたんだよな？　力の無駄遣いじゃねえかよ」
「いや、それまで見つけることすら難しいと言われた天上の国へと続く道をわかりやすく作ってくれたんだから感謝すべきだ。ま、辿り着いた奴なんかいねえけど」

ランカトゥーリスがバベルを創ったのは、たった二人のためである。自身と同レベルの力を持つ男とそれに及ばないまでも優秀だった女が自らの元へと楽に辿り着けるようにするためにわかりやすい形としてバベルを創った。

もちろん、他の者達が辿りつこうとも大歓迎ではあるが、有象無象が辿り着いても仕方がない。そのため、二人を基準に考えて創られたバベル攻略には要求する強さが高かった。

バベルは全十階層から成ることは創った当人であるランカトゥーリスしか知らないことだが、未だ八階層の地を踏んだ者すらいない。しかし最近、バベルへ挑む者達の強さは平均すると増加傾向にあり、近いうちに攻略者が出るのではないかとランカトゥーリスが考えていることを天上に住む神達ですら知らない。

「とにかく入ってみよう」

アーク達がバベルに入ってまず辿りついたのは広大な空間だった。五階建ての建物がいくつも入りそうなその場所はバベルの庭と呼ばれる広場だ。広場の中央には女神ランカトゥーリスから賜った言葉が刻まれた巨大な石碑がおいてあり、それを中心として小さな池がある。ここはバベルへと挑む者達が仲間との待ち合わせによく使っていることで有名だ。

「あれが噂の託宣の石碑か……こりゃまたでけえ」

石碑は縦五メトル、横四メトル、厚さ一メトルの大きさであり、よく目立つ。

「あれを見ると女神ってお伽話に出てくる巨人って奴かと思えるな」
「そうか？　人と変わらない大きさで一生懸命石を運んで彫ってる姿を想像した方が笑える」

レオナルドの言葉に本当に愉快そうにアークが答える。アーク自身には夢とも記憶とも判断しているランカトゥーリスの姿がどうしても先入観としてあるため、巨人の女神を想像すること自体が難しいのだった。

「石碑はどうでもいいが、あれがバベル内部への入口か？」
「おう、白い方が入口で黒い方が出口らしい」

アークが指差す先には巨大な門がある。それぞれの門の先は光と闇によって中を窺い知ることは出来ない。だが、レオナルドの言う通りそれは入口と出口に分かれており、引っ切り無しに人がそこから出入りしている。

「黒い方から入ろうとしても壁みたいなのがあって入れないらしい

んだよ。んでバベルの中に入って外に出ようとすると必ず黒い方から出てくるみたいだ」
「まあ、この人数だから出入口も一緒だとうぜえことになりそうだしな」
「だな。んじゃ、確認するぞ？　今日は様子見で二、三時間進んだら引き返す。いいか？」
「ああ」
「よし、それじゃあいざ、冒険の旅へ」
「日帰りだけどな」
「水を差すなよ」

二人は人の流れにそって光溢れる門をくぐった。

「おお……これがバベルか」

レオナルドが感嘆の声を上げる。
門をくぐった先には森が広がっており、そこに申し訳程度の道が走っていた。塔の内部なのかと疑いたくなるほどの天井は高い。

「で、他の奴らはどこに行った？」

アークは周りを見回しながら言う。
アーク達が門をくぐった時には多くの人がいたというのに周りには数えるほどの者しかいない。

「バベルは中の至る所に出口へと通じる門があるんだが、そこから

出たら次に入る時はその門からになるんだよ」

その説明を聞いてアークは周りにいるのは自分達と同じ初心者か先へと進めない雑魚だと判断して一人一人の顔を見ていく。

基本的に若い者が多いが、中には歴戦の勇士みたいな風体の男もいる。

どんな者だろうと始まりは等しく同じという言葉がアークの胸のうちに浮かんだ。

「んで、上の階層に行っちまうと下へは戻れない。これこそがバベルで死者を量産するシステムなんだな」

上の階層に行くほど現れる魔獣は強くなる。己の力を過信した者がその餌食となるのは日常茶飯事だ。

「一階層は比較的易しいが、それでも十分の三くらいは死んじまうらしい」

「弱い者は死んだ方が世の中の為。俺のモットーが体現されてるわけだ」

「とりあえず最初でいきなり死んじまうのはカッコ悪すぎるから慎重に……」

「すいませ～ん、ちょっといいですか？」

アークとレオナルドが話し合っているところに声がかかる。

声をかけたのは頭に角を一つ持つ黒髪でショートの少女。赤い軽鎧に身を包み、ショートソードを腰に装備している。取り分け美人というわけではないが、可愛らしい外見をしている。

「邪魔だ。消えろ」

「まあまあいいじゃないの。んでお嬢ちゃん何か用？」

「あ、えっと、うちらバベルに挑むのは初めてなんですけど、良かったら一緒に行きませんか？」

そう言って少女は後ろを見る。少女の後ろには同じく頭に一つ角を持つふくよかな体形の少女がいる。手に杖を持ち、白いローブを着ているだが、出張ったそのお腹でローブが押し上げられているのがよくわかる。また、少女は赤茶色の髪を背中にかかるくらいまで伸ばしており少し野暮ったい印象があった。

「うん、断ります」

すごくいい笑顔でレオナルドは宣言した。

「お前の大好きなデブじゃねえか」

そして断ったレオナルドに対してアークは問い掛ける。軽鎧の少女は見るからに平坦な胸をしているが、ふくよかな少女はレオナルドにとっては大好物な生き物だろうとアークは思っている。

完全に相手に聞こえるような声で言うものだからふくよかな少女は気分を害したように顔をしかめさせた。

「ばっか！　世のふくよか女性が皆胸が大きいと思ったら大間違いだぞ。胸の小さい肉厚女性も存在するんだ。ああゆうのはただのデブなんだよっ！」

レオナルドの言葉にアークはふくよかな少女の姿をじっと見る。確かに腹とは違い胸の出っ張りは控え目である。レオナルドは巨乳ならばどんな容姿だろと気にはしないがそれだけにこだわりもすごく、また、見ただけで偽乳などを見破り、大体の大きさを判断する眼力を持っていた。

「確かに、調教もされてねえのに早くも雌豚になってやがる」
「だろ？」
アーク達は本人を目の前にして凄く失礼なことを平気で話し合っていた。

それを聞いて少女達は憤慨した。いや、正確にはふくよかな少女のみが憤慨していた。
「あいつら最悪なんですけど？」

言葉に明らかな怒気が篭っている。

「でもでも～、あんなカッコイイ人とはお近づきになりたいじゃん」
「そんなん無理に決まってるんですけど？」
「何事も一歩を踏み出さなくちゃ可能性はゼロよ。でも一歩を踏み出したら可能性はゼロじゃないっ！」
「つーかあいつらあたしを見てまた失礼なこと言ってるんですけど？」
「それはフレイがそんな体形してるのが悪いわよ。で、フレイはどっち派？　うちは銀髪の子！！」
「あたしはどっちもダメだわ……でも強いて言うならあたしも銀髪の子なんですけど？」
「じゃあどっちがあの子のハートを掴むか競争ね！！」
「まずは一緒に行けるかどうかなんですけど？」

二人の少女達はアーク達に聞こえないように小声で話し合った。

「俺はあいつらと一緒に行ってもいいと思う」

アークの言葉にレオナルドは驚く。しかし長年の付き合いから親友があまりよくない考えを頭に浮かべているのを察し、それを承諾した。

「んじゃ、お嬢ちゃん方、一緒に行こうか」

「え、いいんですか？」

「相棒がいいって言ってるからね」

「ありがとーございまーす。うちはリヴェイラ、こっちはフレイって言います。見た通り魔霊族でピチピチの十七歳です」

「オレはレオナルド、こいつはアーク。どっちも人間だ。よろしくね」

「呼び方は無個性とデブで決まりだな」

「……よろしくされてる気がしないんですけど？」

新たに少女を二人加えた一行は連れ立って道を進む。レオナルドが今日は様子見である程度進んだら引き返すと告げるとリヴェイラ達もまた、そのつもりでしたと返した。

ただ単にアーク達に話を合わせているだけなのは見え見えだったが、特に追求することはせずにアーク達は道を歩いていた。

「止まれ。何かいる」

少し進んだところに生物の気配を感じ、アークは指示を出す。

「ありゃ、殺人猿（キラーエイプ）だな。単独みたいだが……」

一行の前方にいたのは、大型の猿だった。ただ、その筋肉は見た目にも盛大に隆起しており、顔は凶悪で鋭い牙や爪を持っていることが離れた場所からも窺い知ることが出来た。

「ちょー強そうなんですけど？」

「いや、殺人猿（キラーエイプ）は通常群れで行動しているらしいから単独だったらそう脅威ではない……はず」

仕入れた情報を思い出しながら、レオナルドは魔獣の情報を全員に伝える。

「とゆーことは殺り時ってこてですよね」

「ま、初めての戦いにはお誂え向きだな。アーク、作戦を練ろう……ってあれ？　どこ行った？」

そばを見回してアークの姿を探すが、思っていた場所にいない親友の姿にレオナルドは若干焦った声を出す。

「アーク君なら猿のとこに行ったみたいなんですけど？」

「マジ？」

レオナルドが目を向けるとそこには自分達には制止をかけておいて悠々と殺人猿（キラーエイプ）に向かって歩いていく親友の姿があった。

その姿はすでに殺人猿（キラーエイプ）に補足されたらしく、殺人猿（キラーエイプ）が凄まじい勢いで迫って来ていた。

「アークっ！」

レオナルドは少女二人を置き去りに親友の元へと駆けていった。

対してアークは自分に迫り来る殺人猿（キラーエイプ）の姿を無表情で見つめていた。近づく殺人猿（キラーエイプ）の姿は二メトルと五十センチメトルくらいあり、アークの予想以上に大きかった。

しかし、アークの胸のうちには根拠のない自信に満ちていた。こんな雑魚に自分がやられるはずはない――と。

アークは槍を構える。バベルに入った時点で穂先を包んでいた布は取り去っている。準備はすでに万端。

「こい」

ただ一言殺人猿（キラーエイプ）へと向けて言葉を放つ。理解しているのかいないのか、殺人猿（キラーエイプ）はアークに肉薄し、その腕を振り上げていた。

アークは振り下ろされる腕をバックステップしてかわし、槍を振るう。その攻撃は殺人猿（キラーエイプ）に当たり、腕に小さな切り傷を作ったが、ただそれだけ。致命傷どころか大した傷にも至らない。

「アークっ！」

そうこうしているうちにレオナルドがアークのすぐ後ろまで駆け寄ってきていた。

その手にはすでにソルジャーアックスが握られているが、武者震いなのか少々小刻みに震えている。

「レオ、下がってろ」

「いや、オレもやるぜ」

アークの言葉に年上なのに心配されてしまったと感じたレオナルドはカッコ悪いところを見せられないとばかりにアークの前に出ようとする。

「いや、もう終わってる。だけど効くまではもう少しかかるようなんだ。それまで下がってくれ」
「はあ？」

アークの言葉にレオナルドは疑問符を浮かべるが言う通りに下がる。
そして始まったのはアークが殺人猿（キラーエイプ）の攻撃をただかわすだけという光景。
殺人猿（キラーエイプ）は小さいながらも自身の体に傷をつけたアークという存在しか目に入っていないのか少し離れたところにいるレオナルドやそれに近づいてきた少女には目もくれず執拗にアークを攻撃している。
それにアークは反撃ひとつせずに逃げるだけ。

「加勢した方がいいと思うんですけど？」
「そうですよ。やられちゃいますって」

その光景を見た少女達はレオナルドに言いながら各々の武器を構えるが、レオナルドはそれを手で制す。レオナルドには親友の顔に意地の悪い薄ら笑いが浮かんでいるのを見逃さなかった。
程なくして不意に殺人猿（キラーエイプ）の動きが鈍り出した。

「……なるほど。大体これぐらいで効き目が出るのか」

アークが待っていたのは槍の穂先に塗った毒。多少効くのに時間がかかるというそれがどれくらいで効くのかを試していたのだ。
そしてアークは槍を払い、殺人猿（キラーエイプ）の顔面にそれを当てた。
そして槍を引き、それを突く、突く、突く。
三度突いたところで殺人猿（キラーエイプ）が地に倒れるがまだ絶命はしていない。

「レオ」
「どうした？　殺さないのか？」
「その斧でドタマをかち割れ」

アークの言葉にレオナルドは若干の躊躇を見せたが、すぐに覚悟を決めて倒れ伏す殺人猿（キラーエイプ）へと近づく。

「いいんだな？」
「生き物に傷を与える感触ってのを知っとけ」
「わかっ……たっ！！」

レオナルドはそのままソルジャーアックスを頭上高く振り上げて殺人猿（キラーエイプ）の頭へと振り下ろした。固い物の次に何やら柔い物を断ち切った感触がレオナルドの手に伝わる。
ソルジャーアックスを上げると殺人猿（キラーエイプ）の脳らしきピンク色のものが見え、それがレオナルドにはとてつもなくグロテスクに思えた。
そして不意に殺人猿（キラーエイプ）の死体が消え、後には白い水晶のような板が残る。

「おっ、魔晶板だ……うおっ」

いきなり心臓が大きく脈動する感覚にレオナルドが驚きの声を上げる。そして同時にアークもまた同じ感覚を覚えていた。

「なんだ今の？」
「スキルカードを見てみろ」

その感覚に覚えのあったアークは親友へと声をかけ、自身もまたスキルカードを取り出す。

《新たなスキルを得た》
【スキル名】槍術基礎（槍装備時の攻撃力微増）
《新たなスキルを得た》
【スキル名】兜割り（武器を振り下ろした時一・五倍の破壊力）
「や、やった……スキルゲットー！」
「微妙……」
初めて得たスキルに大喜びするレオナルドと対照的に本当に微妙そうな顔をするアーク。
置いてかれた二人の少女達はどう声をかければいいのかと思いながら立ち尽くしてその二人の男達の姿を見つめているのだった。

アークの特技

それから一行が進むにつれて、殺人猿（キラーエイプ）を始めとして色々な魔獣が目の前に現れた。

固く長い一本の角を持つ一角兎（ホーンラビット）、赤い体毛の狼である赤狼（レッドウルフ）、巨大な蟻の姿の蟻戦士（アントウォーリア）等色々な魔獣と出会い、戦った。

そのいずれもまずは、間合いの広いアークが槍で攻撃し、相手に毒を与える。そして効果が表れたところでレオナルドやリヴェイラなどが武器で仕留め、魔導系スキルをいくつか習得しているフレイは後方からの支援や威力の高いスキルで敵を仕留めていった。

「やば、うちらちょー相性良くないですか？」

「ピッタリはまるって感じなんですけど？」

少女二人がうまく行き過ぎる戦闘に喜びの声をあげる。

「まあ、悪くないかもね。巨乳じゃないからイマイチやる気をどうのこうのしてくれる役割はしてくれないけど」

「勘違いしてんじゃねえよ×××が。あんま調子乗ってると魔獣の餌にすんぞ」

対して男達、特にアークの反応は冷たい。いや、冷たいのではない。その言葉には無数の棘があるのだ。

「言葉が辛辣過ぎるんですけど？」

「これが噂のツンデレって奴？」

「アークはデレると凄いよ……絶対に逃げられない状況を作ってその人の嫌いな食い物を目の前に置いて、嫌々それを食べる姿を恍惚

の表情で見つめてくれるんだぜ？」

かつて自分が遭遇したアークが妹を可愛がってる姿を思い出しながら話して聞かせる。

「性格悪すぎなんですけど？」

「とゆーかデレてそれですか！？」

「最もデレてる相手にはこうなるんだよ。それからオレレベルに対するデレだと起こしに来たと称してバケツに張った水の中にオレの頭を突っ込むくらいで済む。目を覚まして暴れようともギリギリまで解放されないんだ……しかもアークが笑ってるのが水の中でもわかるんだよな」

次にレオナルドが語るのは今朝の出来事である。実際こんなことされても友人関係を解消しようとは全くレオナルドは思っていない。ある意味それが当たり前になってしまっているのだ。

「が、頑張って下さい」

「あんたを応援するんですけど？」

「いや、今日のは軽いから単なる笑い話だって」

哀れに思って励ましたのに軽い調子で返すレオナルドに内心賛辞を送り、少女二人は彼の評価を上げた。そしてアークに対しては仲良くなるのは無理ではないかという思いから少しずつ評価を落としていくのだった。

だが、アークは戦闘になると一行の中で最も頼りとされていた。

アークが一番年が下なのだが、命令されると逆らえない。そんな空気になってしまうのだ。

「あれも魔獣か？」

アークが前方を指差す。そこには大きな花が二輪ちょこちょこと歩き回っている。

「あれは……森林の捕食者（グリーンイーター）だな」

「色が毒々しすぎるんですけど？」

森林の捕食者（グリーンイーター）の花びらは紫に赤の斑模様をしており、自然界に同じ色合いの物が自生していても絶対摘み取るなんて考えはおきそうになかった。

「部屋に飾りてぇ……」

アークの言葉に少女二人は一斉にアークの顔を見る。こいつ、やっぱり頭がおかしいといわんばかりの表情だ。

「ダメ。アーク、お兄さんは許しませんよ？」

「わかってるよ。さて……」

突然アークはバックパックを漁りだす。

そしてバックパックから手を取り出した時には、赤い球のような物を握っていた。

「それは？」

「レオ」

説明するのが面倒だったのかアークは説明役をレオナルドに丸投げする。レオナルドはそれに仕方ない奴だと思いながら少女達にアークが持つ球の説明をする。

「あれは爆裂玉って言って、中に火薬が詰まっていて起動させてから何かしらの衝撃が伝わると小規模な爆発をおこすんだ」
「ば、爆発ですか？」
「うん。でも爆発範囲はせいぜい半径ニ、三メトルだし、一番安い奴だから威力も低い。ただ、一階層の魔獣くらいだったら爆発に巻き込めば死んじゃうだろうけど」

それならば爆裂玉をたくさん持ってバベルに入ればいいと誰もが思うだろうが、かつてそれを実行しようとして誤爆し、周囲の者数十名を巻き添えにした者がいたために、一人三つまでと所有制限がかけられている。
また、購入出来る店もグロリアではアーク達が道具を揃えた雑貨屋のみである。

「んで、アーク。それを使うのか？」
「どんなもんか試したい。あいつら鈍そうだしな」
「そっか、んじゃ見つからんうちに隠れるか」

すでに物陰に身を潜めていた一行は生い茂る木々の中へと更に身を隠す。
そして森林の捕食者（グリーンイーター）達に見つからないように静かに近づいていった。

「ここらでいいだろ」

十分に近づいたと判断したアーク達は立ち止まる。
そしてアークは手に持っていた爆裂玉を一度強く握りしめる。すると、爆裂玉が赤い光を点滅しだす。
それをアークは森林の捕食者（グリーンイーター）に向かって投擲した。二匹を巻き込むために定めた狙いは丁度真ん中当たりの地面。

爆裂玉が地面に触れた瞬間、点滅していた光が一瞬強く輝き、次に轟音とともに訪れた熱を持った風が一行の肌を撫でた。
爆発があったと思える場所にはすでに何もない。いや、爆発跡には二枚の白い魔晶板が残っている。

「すご……」
「ちょー便利なアイテムなんですけど？」
「ここまでとは思わんかった」

感嘆の声を上げる三人とは違い、アークはイマイチ不満気な顔をしていたが、やがてその表情を崩すと

「まあ、安物だからこんなもんか」

と呟いた。
爆裂玉は一番安い品でさえ、一つでアーク達の部屋の家賃半月分するのだが、そんなことは意に返していなかった。

そして魔晶板を回収してさらに先へと進む。魔晶板は基本的に全てアークかレオナルドが持っていた。それは全部纏めて回収してから後で換金した時に分配するというアークの提案から決めたことだ。ただ、そこにどんな思惑があるのかアーク以外の者はまだ知る由もなかった。

「うん？　ねえ、あれって……」

しばらく行ったところでリヴェイラがとある物を発見した。
それは一メトル四方の大きさの木箱。

「宝箱だ」

レオナルドはそう言うと宝箱へと向けて走っていく。それにアーク以外の二人も続いて行った。

「まさか最初の探索で見つけられるとは運がいいなオレ達」

「早く開けましょう」

「中が気になってしょうがないんですけど？」

宝箱とはバベルの内部に不定期に現れる文字通りに宝の入った箱だ。どこにいつ現れるかは完全にランダムで、中に入っている品も全く使えない物から実用的な物まで様々な物が入っている。

これもまたバベルが齎す恵みのひとつであると言われている。

「ちょっと待てよ……うん？　開かない……鍵がかかってやがる」

「嘘っ！？」

「ぐっ……ダメ。持ち上げることすら出来ないんですけど？」

宝箱はその場から動かすことは出来ない。故に箱のまま持って帰って、バベルの外て解錠することも不可能だ。解錠の技術など持たない少女二人はせっかく出会えた幸運を見逃すしかないのかとすでに諦めムードだ。だが、レオナルドは違った。

「ついにきたか……マエストロっ！　鍵開け会のマエストロ、出番です」

レオナルドは後ろからゆっくり近づいてきていた少年に呼びかけた。

「マエストロ？」

「どういう意味か気になるんですけど？」
「ふっふっふ……アークはな、故郷の村で妹に声をかけた男の家へと不法侵入すること二十七回の鍵開けの大ベテランなんだ。鍵変えても平気で家に入っていくアークをオレは密かにマエストロと呼んでいるんだ」

完全に犯罪じゃないかと思いながら、少女達の中のアークの評価がまた一つ下がる。

「マエストロ、お願いします」
「壊しゃいいじゃん」

めんどくさそうにアークが投げやりに言う。

「つーかバベルの宝箱は壊せないって教えただろ？」
「そうだったか？」
「そうなんだよ」
「んじゃまあ、やりますか」

そう言ってアークは鎧の中に手を入れて何やらゴソゴソと懐をまさぐると特殊な器具を取り出した。
そしてそれらを鍵穴に入れてカチャカチャと動かす。
不意にパキンッと音が鳴ったところでアークはその手を止めた。

「開いたぞ」
「はやっ！　十秒かかってないじゃん」
「こんな単純な構造で時間なんかかかるわけねえだろ。むしろもっと早く出来た」
「有り得ないんですけど？」
「さっすがマエストロ。とゆーことでご開帳～」

宝箱の中に入っていたのは鞘に入ったダガーが一丁だけだ。それが何か特殊な力を持っていそうなら問題はないのだが、特に何の力も感じないダガーだ。

「うち、これを武器屋で見た記憶がある。短剣コーナーで一番か二番目にやっすい奴」

「期待ハズレもいいとこなんですけど？」

「う～ん……期待してしまっただけに流石にこれはへこむな」

三人の落胆の色は結構大きい。

「じゃあ俺に寄越せ。つーか鍵を開けたのは俺なんだからまず俺に所有権があるだろ」

「ほらよ」

レオナルドからダガーを渡されアークはそれをしげしげと見てみる。しかし、アークの目にもそれは何の変哲もないものに映る。

アークは毒の入った瓶をバックパックから取り出し、その毒を刃に塗り込み、また鞘にしまって腰に下げる。

「レオ、今日はもう戻ろう」

「だな。ほら二人共、落ち込まないで立ちな。早くしないと置いてっちゃうよ」

レオナルドの言葉に少女達も立ち上がり先を歩くアーク達の後ろについて歩いた。

行きと違って帰りは出会う魔獣の数は少なかった。それでも全くというわけではなく、大体行きの半分くらいのエンカウント率といったところだ。
しかし、それもあと少しで出口というところで不意にアークが立ち止まる。

「敵か？」

レオナルドがその背に声をかける。アークはそれに答えずに上を、正確には樹木の上を見ている。そしてその視線は次第に後ろの方へと向かい、停止する。

「ここまでやるのか」

アークが呟く。そしてアークの視線を追っていたレオナルドもまたそれに気付く。
見上げた木にはどこを見ても殺人猿（キラーエイプ）がいる。そして道の先には十を超える殺人猿（キラーエイプ）が道を通行止めにし、背後もまた同様に無数の殺人猿（キラーエイプ）によって道が遮られていた。

「ヤバいな……ボス猿のお気に入りの部下でも殺しちまったのかもしれない」
「これじゃ逃げられませんよっ！？」
「死にたくないんですけど？」
「ひの、ふの、みい……目測およそ四十ってとこか」

アークは恐慌する三人を尻目に冷静にこれからの戦いに対して頭を働かせていくのだった――

残酷な男

「こりゃやべーよ。アーク、ここはとりあえず出口がある方の道を塞いでる奴ら目指して一点突破するしかねえ」

レオナルドの言葉にアークは意味深な笑みを浮かべる。

「レオ、このぐらいの相手に対する手なら他にあるぞ」

「マジか！？」

レオナルドはアークの顔を見てみる。この絶対絶命とも言える状況に自分の考えた方法以外のものがあるのか。だとすればどんな方法なんだとアークを見つめるレオナルドの顔は期待に満ちている。

「それにはまず、俺達を二つに分けよう。道の前後からくる猿共と戦って相手の背中を守る。横にいる猿は臨機応変に対処だ」

「オーケイ」

レオナルドがくるりとアークの背後に回り、背中を合わせる。

『背中を守る』アークのその言葉に沿うように自然とレオナルドの体が動いた。

「あ、あの……うちらは？」

「あたしらも指示が欲しいんですけど？」

戸惑うような表情で少女二人は右往左往している。

「二人はオレらのどっちかと一緒に動いてくれ」

「はいっ」

それくらい自分で考えろよと思いながら二人へと指示を出すレオナルド。アークはその様子を無表情で見つめる。

そしてアークの隣にはリヴェイラが、レオナルドの隣にはフレイがそれぞれ立つ。

「そんでアーク、お前が考えてる手って奴を具体的に教えろ」

「爆裂玉を使う」

「ああ、あれ？」

アークの言葉にリヴェイラは希望が見えたとばかりに明るい声を出す。

「確かにあれならイケそうな気がするんですけど？」

フレイもまた同じ気持ちだった。一度見たあの爆裂玉の威力ならこの窮地を脱することは容易くできるはずだという思いが沸き上がる。

「まあ、猿共を密集させるための餌はいるがな。そいつは用意してるから、あとは時間稼ぎだ。レオは俺が背後から襲われないように後ろから来る猿を近寄らせるな」

「わかった」

アークの言葉に若干ひっかかるものを感じながらもレオナルドは頷き、自身の目の前に展開する殺人猿（キラーエイプ）の群れを見据え、一番先頭の奴にソルジャーアックスで斬りかかっていった。そしてその後ろには杖を手にしたフレイが続く。

「おい、無個性。お前は俺が爆裂玉を準備するまで目の前の猿を抑えろ」
「う、うん」

正直、自分一人でこの数を抑えるのは無理だとは思ったが、爆裂玉を準備するくらいの時間ならば稼ぐことが出来るだろうとリヴェイラはアークの前に出る。

「あっ……」

だが、脇腹を突然痛みが襲う。
そこには槍が刺さっていた。
自分の血に濡れた槍の穂先。
そしてその持ち主は――

「アーク……君？」

自身を襲う痛みがリヴェイラは信じられなかった。
そして何故味方であるはずの自分が槍で刺されたのか。
何故、なぜ、ナゼ
疑問符が頭を占める。
槍はすぐに抜かれ、次いで振り返る前に背中に衝撃を受ける。
アークがリヴェイラの背にむけて全力の蹴りを見舞ったのだ。

「ぐっ……」

思いっきり蹴られたリヴェイラは踏鞴を踏むように前方へと進んでしまう。そして、脇腹の痛み故か脚に力が入らず、前のめりに倒れ込んでしまった。
顔を上げるとそこには自分へと迫ってくる殺人猿（キラーエイプ）達の姿が映った。

自分へと群がる殺人猿（キラーエイプ）。その一匹が腕を振り上げたのが見えた。そしてそれが振り下ろされた時、リヴェイラの全てが消え、暗い闇となった。

「ふっ」

アークは嗤う。

前方ではリヴェイラが早速殺人猿（キラーエイプ）達に襲われ、その内の一匹に頭を潰されていた。

あれでは最早生きていないだろう。いや、そもそもアークにとってはリヴェイラの生死などどうでもいいことだ。

リヴェイラに求めた物はただ一つ、『餌』としての役割だ。

その役割は十分に果たしている。アークの方へと数匹向かってくる個体もいるが、大半はリヴェイラに群がっている。

アークは手に持った爆裂玉を握る。これで後は某かの衝撃を受ければ爆裂玉は爆発する。

それを山なりに放り投げる。

落ちた先はリヴェイラがいた辺り。

そしてアークの目の前にいた殺人猿（キラーエイプ）の大半が魔晶板となって消え、バラバラになったリヴェイラだった残骸が残っていた。

爆発の音を聞いてレオナルドはちらりと背後を振り返る。そして大半の姿が消えている安堵感と微妙な違和感を覚えた。

アークは居るがリヴェイラの姿が見えない。一体どうしたと言うのか。

「レオ、下がって俺と場所変われ。今度はそっちを殺る」
「え？　あ、ああ」

レオナルドはアークに言われた通りに下がる。入れ代わりにアークが自分の前に出たのを確認するとレオナルドはまだ数匹残っている後ろ側の殺人猿（キラーエイプ）と相対する。
その時、レオナルドの目さ不思議なものを目にする。それは人の腕の形をしているもので、少し先には人の脚の形をしたものが転がっている。

「時にアーク……リヴェイラちゃんは？」
「誰だそれ？」
「誰だって……黒髪の子だよ」
「あれか。あれならさっき殺した」
「殺した？　……ああ、殺したのか」

一瞬信じられないような言葉が聞こえたが、レオナルドは妙に納得してしまう。
アークなら殺してしまっても不思議ではない。なぜならレオナルドやアディエルがいなければ当の昔に村中の男達が苅り尽くされてもおかしくはなかったから。

「ちょ、ちょっと……どういうことよ」

だが、レオナルドとは違い納得できない者がいた。それはアークが殺した少女の友人であるフレイに他ならない。

「なんだ、動揺してんのか？　口癖はどうした。なになにんですけど？　って」
「うるさいっ！　どういうことか言えっ！」

「どうもこうもねえよ。無個性女なら死んだ。さっきの爆発に巻き込まれてな。いや、その前に俺が槍を刺して猿共に差し出してやった時に頭潰されてたっけ？　ま、死んだことに変わりねえよ。ほれ、後ろ見てみろ、お友達だったもんが見れるぜ？」

アークの言葉にフレイは後ろを振り返る。そして地面に転がるかつて友人の体に付いていた一部を見た。

「う、うそっ……」

「嘘じゃねえよ。ほれ、猿が来たぞ」

アークの忠告を聞いて間一髪に殺人猿（キラーエイプ）の攻撃をかわす。状況が悲しむ暇を与えてくれない。その代わりにフレイの心の内に憎悪の感情がコンコンと沸き上がる。

「クソ野郎っ……殺してやるっ！」

「ははっ！　何言ってんの？　死ぬのはおめーだよ」

アークがフレイに向かって腰に下げていたダガーを抜いて投げる。本来投擲用のものではないが、それでも殺人猿（キラーエイプ）の動きの方に集中していたフレイはかわしきることが出来ずにダガーが腕を掠める。

ついた傷は割りと深かったらしく血が流れる量は多かった。

「下手くそ……こんなんじゃあたしは殺せない。＜火球（ファイヤーボール）＞」

フレイは目の前の殺人猿（キラーエイプ）に対して自身のスキルを発動させる。

するとフレイの目の前に炎が現れ、それが徐々に球の形になっていく。完全な球状になったそれは殺人猿（キラーエイプ）へとぶつかり、殺人猿（キラーエイプ）の体を後ろへ下がらせた。

「次はあんたに当てるっ！」
「……一分だ」
「は？」
「そこにいる猿に毒が回るまで一分かかる」
「何が言いたいわけ？」
「同じ毒を同じだけ猿よりも小さい生き物に与えたら大体どれくらいかかると思う？」

フレイの頭に疑問符が浮かぶ。アークは何を言っているのか。
しかし、アークが槍に毒を塗っていることはフレイも知っているし、塗り直しているところも見ていた。

「まさか……」
「宝箱の中身のしょぼさに気落ちして観察を怠るからだ。そのしょぼい品がお前を殺すんだよ」

アークが言い終わるか終わらないかのうちにフレイの体に異変が訪れる。体が鉛のように重く、思うように動かせなくなる。

「効いてきたか。人には大体これくらいの時間がかかるのか。レオ、そいつら蹴散らしてデブから離れよう」
「ん？　わかった」

アークがレオナルドの相手していた方の殺人猿（キラーエイプ）達へと槍で突っ込んでいく。
振り向き様にフレイを確認すると、一番近い目標として多くの殺人猿（キラーエイプ）達に群がられようとしていた。
それを見るとアークは前を向き、そのまま購入したうちの最後の一つとなった爆裂玉を殺人猿（キラーエイプ）の群がる地点に放った。

爆発音が轟き、衝撃に地が揺れる。
それに再度アークは振り返る。そこには一度目と同じように大半が魔晶板へと姿を変えた殺人猿(キラーエイプ)や爆発の余波でダメージを受けた殺人猿(キラーエイプ)、そして今だ人の形を保つ肉の塊がいた。

「レオ、喜べ。猿共の数が両手で数え切れるくらいにまで減ったぞ」
「そりゃめでたいが、ちょっと酷すぎないか？」
「最初からいざという時の捨て駒にするつもりだったから何とも思ってない」
「どうりであっさり同行を認めるわけだ」
「予想できたろ？」
「さすがに躊躇がなさすぎて予想外だった」
「あいつらには調子のったら餌にするとか正直に言ってただろ？つーかあいつら、ぜってー俺らのこと仲間とか思ってたぜ？　ありえねえよ」

会話を交わしながらも二人が手を止めることはない。背中合わせになりながら向かってくる殺人猿(キラーエイプ)達へと攻撃を加えていく。

「俺の仲間はレオ、今のところお前だけだ」
「……なに、後々増える予定なの？」
「なんで拗ねたような声出すんだよ。未来にお前が仲間にするであろう乳牛を受け入れてやろうと覚悟決めてんのに」
「お前こそ真の友だっ！」
「いいから、まずはこいつらを片付けんぞ」
「おうよ」

程なくして二人は全ての殺人猿(キラーエイプ)を倒す。そして殺人猿(キラーエイプ)の残した魔晶板を回収しているときにレオナルドがまだフレイが生きていることに気付いた。

フレイの姿は原形を留めているが、全身酷い火傷を負い、右腕と右脚が無かった。

「浅くだけど呼吸してるぜ。どうすんだ？」

「フム……試してみるか」

そう言うとアークはフレイの左腕を持ち上げ、噛み付いた。

＜吸血＞

スキルを発動させるとドロリとした鉄味の液体がアークの口腔内に侵入してきた。

「ぺっ……まず」

少しは飲んだが、アークにとってフレイの血はとても飲めたものじゃなかった。

「ドロドロしすぎ。不健康の塊みたいな血だな。糖尿の気もあるし……つーかこんな体形しといて男と経験済みなことにビックリだ」

「経験とかなんでわかんだ？」

「あん？　いや、なんとなく……なんでだ？」

「こっちが知りてーよ。当てずっぽうか？」

「いや、わかる。それは確かだ」

血の脈動を感じ、アークはスキルカードを見ると新たにスキルを得ていた。これこそがフレイのスキルの一つなのだろう。

《新たなスキルを得た》

【スキル名】地隆針（アースニードル）（術者から半径三メトルの任意の場所に大地か

ら突き出す針を顕現させる）

「見た目が焼豚だから芳醇な肉汁みたいな感じの味かと思ったらとんでもねえもん飲んじまった。ま、スキルは中々のもんを得たけどな」

「初吸血がこの子か……おめでとう？」

「生物学上女だから男よりマシだと思った自分を殴りたくなるな」

「じゃあ好みの女以外はやめとけ」

「なるほど……じゃあいい声で鳴く健康で菜食主義者で十代から二十代の未開通女を探すしかないのか……」

「すっげー限定的」

「味と吸う時の俺の気分を優先したらこれが一番だな」

「初めて血吸ったばっかなのにもう味の好みがあることが不思議だぜ」

「う……」

アークとレオナルドが会話をかわしているとフレイが意識を取り戻した。だが、その目は虚で焦点があってはいない。

「た、す、けて……」

呟くような声音で助けを求められる。

しかし、それに対する答えは冷ややかなものだった。

「うちの親友が酷いことしてごめんね。君が巨乳だったら身を犠牲にしても助けたげるんだけどな～」

「さっさと先に逝った友達の元へ行け」

「なん、でも、するから……」

「しなくていい。お前らは十分『餌』として働いてくれた」

アークは意識を集中する。

＜地隆針（アースニードル）＞

スキルを発動させるとアークの視界に赤い点のようなものが生まれる。アークはその点をフレイの心臓の位置に固定した。

「しに、たく、ない……」

「それは無念だな。まあ、あの世でいくらでも呪え。じゃあな」

アークはそのまま倒れるフレイの心臓へ向かってスキルを発動させた。

地から生み出された直径十五センチメトル、長さ三十センチメトルほどの円錐状のトゲにフレイは胸を貫かれ十七年の生涯を閉じた。

「お前、手に入れたばっかのスキルで殺しやがったな……悪党め」

「俺が悪かどうかは受取手の立場で変わる。ただ、これだけは言える。生き残った俺達の勝ち、死んだこいつらはただの負け犬だ」

それぞれの夜

バベルを出たアークとレオナルドはそのまま手に入れた魔晶板を換金すべく換金所へと向かった。
換金所はグロリアの街の中にいくつも存在し、魔晶板だけでなくバベルで得た宝や不必要になった武器や防具なども買い取ってくれる。宝や武器、防具などは店ごとに査定してくれるので多少の差異はあるが魔晶板については買い取り額は一律である。

「安すぎないか？」
「魔晶板の買い取り額は決まってるから交渉は一切受付ないよ」

アークの言葉に換金所の主人はピシャリと言い放つ。
買い取り額を勝手に上げるのは法律で禁じられており、その法を侵せば自らの職を失ってしまう。確かにばれないように買い取り額を上げればバベル挑戦者はこぞって自分の店へと魔晶板を売りにきて、その分だけ儲かるだろうが、リターンに対するリスクが大きすぎるため誰も行っていない。

「まあ、一番純度の低い白ならこんなもんだろ。アーク、無駄なことはしないで出ようぜ」
「いや、あと三十分あればイケる気がする」
「ダメダメ。殺伐とした所に居すぎて巨乳成分が不足してんだよ。いい加減癒されたい」

アークの後ろ首を掴んでレオナルドは後ろには並んでいる者達に待たせてすまんと詫びながら換金所を後にする。

「あいつは脅せば屈するタイプだ。もう少し待ってくれれば……」
「アーク、ババルなら何が起こっても不思議じゃないから目をつぶったが、街じゃ人目につく場所での拷問とかは控えろ。罵倒とかサド丸出しのイジメ程度なら問題ないが拷問は捕まっちまうぜ？」

諭すようにレオナルドがアークに言う。

「あくまで脅しだけだ」
「とりあえず、針をしまってから言ってくれ」

いつのまにか取り出していたアークの拷問道具初級編を見てレオナルドはため息混じりに呟く。
自分が止めなければ確実にアークは三十分で換金所の主人の爪の間に針を刺すくらいのところまで話を進めていただろう。

「しかし魔晶板がこんなに安いとは思わなかった」
「純度が低いんだから仕方ない。つーかオレは予想より高かったと思うぞ？」

アーク達の持ち込んだ魔晶板の色は白。魔晶板の中では最も純度が低い。それでも四人家族の家で消費するエネルギー一日分を賄うことが出来、田畑に粉にして撒くと作物の成長を一日促進する効果を持つ。
一枚では『セミヤー』での食事代の半分にも満たないが、それが五十枚以上ならばそこそこの金額にはなる。一日の稼ぎとしては上等な部類だとレオナルドは思っていた。

「金は取れるところから取るもんだ」
「無理してまですることじゃねえ」
「無理じゃない」

「今は目立つなって。ただでさえ何の罪もない少女二人殺してんだから」
「レオ……お前、いつから貧乳党にくら替えした」
驚愕の表情でレオナルドを見るアーク。
「別に貧乳がこの世から消えようと喜びこそすれ憐れまねえよ。騎士団に捕まるんじゃないかってお前とオレの身の心配してんだって」
法を侵す者を捕らえるのは王国の騎士団の仕事だ。犯罪者を捕らえることにおいて独自の権限を与えられる騎士団は逃亡する犯罪者を殺す許可さえ与えられている。
バベルは法が及ばない聖地である面を持っているため中での出来事は大抵が自己責任であるが、さすがに人を囮にした挙げ句に爆裂玉でもろともに爆破は明らかな黒だ。
これなら願い出があれば騎士団が動き出すほどに――
「捕まったら素知らぬ顔でシラを切ればいい。証拠になるようなものは処分した」
アーク達はバベルから出る前に少女二人の死体を始めとして証拠になるような物はきっちりと処理してきた。
とは言っても死体を偶然見つけた魔獣に放り投げ、食しているのを見届けて所持品などを粉砕したり燃やしたりして地面に埋めてきただけだ。
「それだってもしもがある。それに目撃者がいるかもしれねぇ……」
アークが少女達を殺したのは、出口である門に程近い場所。そこまでたどり着いた時はすでに遅い時間だったためバベルに入ってく

る者は少なくなっているが、アーク達と同様に帰ってくる者がいないとも限らない。目撃者がいる可能性はゼロではない。

「目撃者がいたらいたで面白い。目撃証言だけで騎士団が動くとも思えんが証拠なしに来てみろ、後悔させてやる……くくっ」

「尋問されたらどうすんだ？」

「大丈夫大丈夫、レオは都合悪いことは黙秘しとけ。俺がうまくやる」

「巨乳の女騎士が来たらゲロっちまいそうなんだけど？」

「もっと大丈夫だ」

一見すれば、胸の大きい女性に聞かれたことにはなんでも答えそうなレオナルドだが、その可能性はゼロに等しいとアークは考える。

レオナルドならばとりあえず目の前の胸に釘付けになり、話も聞かずに胸を褒めたたえ、自分が何とかするまでずっといかにしてその胸に触れるかに時間を費やすに違いない。

交換条件として触らせるから本当のことを話せと言われようとも本当に触るどころかベッドに持ち込むまで本当のことは喋らない。なぜならそれこそが胸を好きにするための切り札だと本能が理解し、出来るだけおいしい状況を引き出そうと画策するだろうからだ。

そんな変な信頼がレオナルドにはあった。

「とりあえず腹減った」

「飯か」

「動いたから肉が食いてぇ」

「……さすがにそれはきつい。お前のおかげで人が血を流してる姿は見慣れてるが死体は初めてだったし、何より最初に殺した殺人猿（キラーエイプ）の脳みそのグロテスクインパクツが目に焼き付いて当分は無理だ」

「……ほぅ」

レオナルドの言葉を聞いてアークの目が輝き、口許に笑みが浮かぶ。

「やば……」

「レオは当分肉が無理なのか。それはいいことを聞いた」

レオナルドはアークの顔を見て自らの失言に気付く。アークの顔はろくでもないことを考えているときのそれだった。

「さて」

「こら、なんで腕を縛るんだ」

「暴れるな。せっかく縄の跡がつかないように縛ってやってるのに」

「そもそも縛るな！　つーかどっから取り出したんだよ」

「縄は俺の必需品だ。常に取り出せるところにある」

「くそっ……ふごっ！」

走って逃げようとしたレオナルドは足をもつれさせて転倒してしまう。その足はいつのまにか縄で両足が結ばれている。

「獲物を仕留める時はまず足の動きを制限する。これ基本」

「早技すぎるっ」

「さあ、羊の脳とか出す店に行こうぜ。あとは豚足もいってみようか」

「くっ……脳だけではなく、オレがあの子らの脚を運んだことまでをもイジメの道具に……」

その後、強制連行中に本気で嫌がって泣き出したレオナルドを解放してやり、二人は『セミヤー』に向かった。

「……また来た」
「ここは客に飯を提供する店なんだから腹が減ったら来るのは当たり前だろ？」
「ここ以外は羊の脳と豚足の選択肢しかないんだ。頼む、今日は巨乳ちゃんが見えるだけの席で我慢するからっ！」

露骨に嫌な顔をするアイラに土下座しそうな勢いでレオナルドが言う。ただ、言ってることがどこをどう我慢しているのかアイラには伝わらない。

「こちらのお席へどうぞ」

しかし、客として来ている以上帰すわけにもいかない。二人がもっと大きな問題を起こしていれば別だが、アークは口と態度が悪いだけ、レオナルドは胸の大きな女性には軽々しくセクハラするが客が離れるには至っていない。

それどころか今日はアーク達目当ての客まで現れていた。更に言えばアイラの父であるタンゾウに二人は家族の食卓で普通に話題として出てくるほどに好かれていた。自分の夢を叶えてくれただけでなく、贔屓にしている農産物の産地出身ということがタンゾウにとって大きかった。

「よし、飲み物の注文は終わったし料理は全てオレが持ってくる」
「自分の分は自分で持ってくる」
「これみよがしに肉ばっか持ってくるだろうが！　大丈夫、ちゃんとお前好みの品を持ってくる」

「肉な。見た目えぐい奴」
「この店にはそんなんねえよ」

そうしてレオナルドが持ってきた料理は自分には肉の入らないものでアークには山盛りの鳥の唐揚げだった。衣で肉部分が見えないから選ばれた一品だ。アークはそれを文句一つ言わずに咀嚼していく。

「なんか、アディちゃんの苦労がわかった……」
「そういえばアディは鳥肉が嫌いだったっけ」
「お前のせいで泣きながら食ってたけどな」
「負けん気は強いんだよ。あと、出されたものは完食するという精神を持ってるからな」
「アディちゃん今頃なにしてると思う？」

レオナルドの言葉にアークはエリス村にいるであろう妹に思いを馳せる。

「あいつならきっと俺のことを気にも止めずに飯食って寝てるか、逆に気にして俺の部屋に呪詛でも書いてるだろうさ。だけど最悪……」
「最悪？」

アークの言葉にレオナルドは思わず聞き返す。
アークはそれに若干躊躇いながらも、可能性としては高そうだと思いながら言葉にする。

「こっちに来てる」

◇◇◇

一方その頃、グロリアに程近い村唯一の宿泊施設の食堂に同じ金色の髪を持つ父娘がいた。
黙々とスプーンで食事を口にする娘をチラチラ見ながら父であるガルダは重苦しくなった空気を払うかのように娘に声をかける。

「アディ、あと少しでバベルが見えてくるはずだよ」
「見るくらいならここからでも微かに見えます。私が聞きたいのはあとどのくらいで着くかです」
「あと三日くらいかなぁ……」
「お父さんがもう少し早く折れてくれれば着いていたということですね」
「うぐっ……」

アディエルの出立に一番難色を示したのはガルダであった。それは娘のことが心配であるからこそである。そのために畑を妻に任せて娘と共にグロリアまで行くことに決めた。
しかし、娘であるアディエルは出立を邪魔されたことを根に持っており、道中の会話は必要最低限のものしかしてくれなかった。

「もうすぐ着くんだからいい加減機嫌直してよ」
「お父さんが邪魔しなければ道中で兄さん達に追いつけたはずなんですから当然の態度だと思いませんか？」
「いや、それはアディが心配なんだからしょうがないだろ？」
「兄さんは心配ではないと？」
「アークは男の子だからね」

「双子なのに……」
「男親は娘が可愛いものさ」
「……もう」

アディエルの表情が柔らかくなったのを見てガルダは三十四日目の旅路にしてやっと娘が自分を許してくれたことを感じ取った。

「アディ、今日は父さんと一緒に寝ようか？」

だからつい調子に乗ってしまった。

「絶対に嫌です」
「いや、でも仲直り記念として十一年ぶりに親子の愛情を確認……」
「絶対に嫌です」
「……」

声を張ってないのにも関わらず娘の絶対的な意思が伝わってくる。

アディエルの父親離れは実に早かった。二歳で一緒にお風呂に入ることを拒絶し、四歳には添い寝すら許されなかった。息子は息子で一緒に寝た翌日の起こし方は雑というか過激で、一緒に風呂に入ればたわしで背中を洗う。お陰でガルダの背中の皮は大層厚くなった。子育てにおいて聞いてた話と違うとガルダが何度嘆いたことかはわからない。

「アディは父さんのこと嫌いかい？」
「お茄子の次に好きです」
「そっか好きなのか」

嫌いかと聞いた時の回答が好きと返ってきただけでガルダの心は晴れやかになった。

「じゃあアークは？」
「……嫌いではありません」
恥ずかしそうに言うアディエルの姿に父として息子に負けた気分になるガルダであった。

「もうすぐ兄さんに会えるんですね……」
ベッドに横になりながらアディエルが呟く。毎日顔を合わせていた兄がいないというだけでこんなに不安になるとはアディエル自身も思っていなかったが、そんな日々ももう終わりだ。
ただ心配なのは、アークが変態レオナルドと一緒にいることで他人に迷惑をかけていないかどうかだ。
アディエルの中では迷惑なのはアークよりもレオナルドという図式があるために若干曇っているが、実際はアークの方がレオナルドよりも迷惑というか厄介な存在であることは明白であったりする。
「とりあえずあの変態は会ったら殴ります。兄さんは……お説教ですね」
私を置いていくということがどんなに愚考であるか思い知らせ、そして兄の真意を問いただしてやると思いながらアディエルは眠りについた。

再会

それから三日後の昼。
アディエルとガルダの二人はついにグロリアの街へと辿り着いた。
アディエルにとっては初めての都会であり、ガルダにとっては実に十五年ぶりであった。

「いやー、変わってないなぁ」
「お父さんの感想はどうでもいいです。兄さんを探しましょう」
「探すってグロリアの街をかい？」
「いえ、バベルの入口を張り込みます。確実に通るでしょうし」

そう言ってアディエルはバベルへと向かって歩き出す。

「待ちなさいアディ。確かにバベルで待ってればいつかは来るだろうが、バベルに挑戦する者なら中で数日過ごすこともざらだ。最悪何日も見張らなければならなくなる」
「ならどうするんですか？」
「聞き込みだよ。一人一人声をかけて大まかな行動範囲を絞り込むんだ」

なんでもないことのように断言するガルダの姿に、アディエルは不審な目を向ける。
グロリアの人口はエリス村の何百倍単位で存在する。その中のたった二人を見つけるためにアディエルとガルダの二人だけで聞き込みをするのは無謀とも言える話だ。

「心配はいらないよ」

ガルダはそう言ってアディエルに微笑みかける。しかし、次に心持ち沈んだ表情になってしまう。

「あの二人がタッグを組んで目立ってないわけない。特にある特定の人物達にはね」

ガルダの言わんとしている意図。それがアディエルにも伝わる。ああ、と納得したようにアディエルは周りを見渡す。

「胸の大きい女の人に聞き込みすればすぐにわかりそうですね」

◇

「はぁ……予想以上にはっちゃけてますね、あの変態は……」

「父さんとしてはわりと予想通りというか、むしろ少ない的な？」

聞き込みの結果、約半数の女性がレオナルドに声をかけられていた。傍には銀髪の口の悪い美少年がいたという証言もあり、ほぼ本人だと断定できた。

また、声をかけられた場所もあまり広い範囲には散らばっていないので、行動範囲も推察出来ている。

その中でアディエルとガルダは目撃証言などが多数挙がった店へと向かっている。

店の名前は『セミヤー』。アークとレオナルドがグロリアに辿り着いた日から通う店である。

「いらっしゃいませー」

店に入ると黒を基調としたミニスカートの制服の店員が出迎える。その制服にアディエルは目を奪われてしまう。

（可愛い……）

アディがそう思っていると、獣人族の少女アイラが駆け寄ってきた。

「お待たせして申し訳ございません。お客様は二名でのご来店ですか？」

「は、はいっ」

多少どもりながら答える。

「当店のご利用は初めてでしょうか？」

「あ、はい。あ、あのっ！　聞きたいことがあるんですけど……」

アディエルはいきなり本題を切り出す。

「どうされました？」

「こちらのお店に銀髪の男の子と茶髪の変態がよく来るって聞いたんですけど？」

そうアディエルが言うと、それまで笑顔だったアイラの表情の一切が消える。

「……あの二人ですか」

「はい、実は銀髪の男の子はおそらく私の兄なんです。黙って村か

ら出ていったので探してまして……」
「兄？」
「聞き込みした結果、こちらのお店での目撃者が何名かいましたもので」
「ふぅ～ん……まあ、その二人なら毎日来るわよ」
「本当ですか」
「ええ。だから待ってれば今日も来ると思うわ。ただし、店の中で待つならお客として待ってて下さいね」
「それはもちろん」

アイラがアディエルとガルダの二人を席へと案内して店のシステムの説明をする。アディエルはアイラの説明を頷きながら真剣に聞いている。

「なんか、あいつの妹って気がしないわね。あいつは口を開けば悪態ばっかなのに」
「息子がご迷惑おかけして申し訳ありません」
「あ、いえ。息子さんは一応他のお客様には迷惑はあまりかけてませんから。問題は一緒にいる茶髪ですね。あいつのいやらしい目線に店員とお客様が不快に感じてます」
「あの変態はとりあえず包丁でサクッと刺せばいいと思います」
「えっ……」

笑顔でサラっと怖いことを言うアディエルにアイラは先の言葉が詰まってしまう。冗談だとは思うが、目が本気すぎた。

「アディ、何度も言うけどアークは自分の意思で出ていったんだからね？」
「すいません。つい本音が……」

ガルダの言葉にアディエルは微笑みながら言い繕う。

「あ、えっと……ご注文のお飲み物お持ちしますんでお料理はお好きな物をどうぞご自分でお取り下さい」

場から逃れるようにアイラが去っていく。

「さて、父さんは料理を取りにいこうかな。アディは？」

「私は座ってます」

「なら、アディの分も父さんが持ってくることにしよう」

そう言ってガルダが席から立って料理の並ぶコーナーへと歩いていく。その背中を眺めながらアディエルは一つため息をつく。

「……女の子多いな」

店内を見渡せば店員、お客共々ほとんどが女の子だ。レオナルドの趣向だろうが、そこにアークが入り浸っているのも何だか許せなかった。

「お待たせしました。アイスコーヒーとアイスティーです」

そこへ飲み物を持ったアイラがやってきた。

「あの、兄さんは特定の女性とか出来ました？」

「え……いえ、プライベート知ってるまで親しくないんで……」

「そうですか」

アイスティーを口へと運ぶ。知らず知らずに喉が渇いていたのか、アイスティーが染み入るようにアディエルの喉を潤していく。

「気になるの？」
「え？」
「いや、あいつの女性関係」
「兄妹ですし、そりゃ気になります」
「あたしは一人っ子だから分かんないけど、兄弟ってそういうものなの？」
「他はどうか知りません。でも、私達は双子ですから」
「双子？　うっそ、似てないっ！　確かに貴女は美少女だし、あいつも顔はいいけど……」

そう言いながらアイラはアディエルを上から下までジロジロと眺める。

「やっぱ似てない」
「よく言われます」

似てないと言われること自体は村にいるときでさえ散々言われてきた。真面目なアディエルと不真面目なアーク。髪の色から顔の作りまで二人は全く似ていない。唯一と言っていい共通点はお互いがお互いを大事にしていることだろう。

「ねえ、あいつってさ、昔からあんな感じなの？」
「あんな感じ、ですか？」
「人を小ばかにした感じ」

言われて納得してしまう。アークは年上だろうと誰だろうとへりくだったりしない。何故かいつも一段高いところから見下ろす感じで人に応対する。

「そうですね。兄さんは認めた者にしか優しくしないんですよ」

もちろんその中にアディエル自身も入っている。むしろ筆頭がアディエルだという自信があった。

「あの茶髪は？」

「……あの変態にもなぜか優しいんですよね」

アディエルはアークがレオナルドと仲良くしている理由がアディエルのことを女として見ていないからということを知らない。アディエルが気付いた時、アークはすでにアディエルに匹敵するくらいにレオナルドに優しかった。

「まあ、あの二人って結構不思議よね。茶髪があれじゃなかったらホモ疑惑がかかるくらいには仲良いわよね」

「……兄さんが男同士で肌と肌のぶつかり合いを毎晩繰り広げている……そんな馬鹿なっ！」

勢いよくアディエルが立ち上がる。急に立ち上がったアディエルにビックリしたのかアイラの尻尾がピンと逆立つ。

「別にそうだと言ってるわけじゃなくて、そう見えるくらいに仲良いよねって……」

「そんな非生産的な道に兄さんを堕とすなんて……あの変態マジで殺す……」

「やばい。このままじゃ店内で殺人事件が起こりそう……」

「うちの娘はどうしたのかな？」

アイラがどうやってアディエルを宥めようと考えていると皿に山ほど料理を載せてガルダが戻ってくる。

「あ、いえ、えっと……」

アディエルの様子は自分に責任があることだと思い、アイラは口ごもる。

「まあ、いいや。アディ、これ美味しそうだよ。あとね、ケーキとか甘い物もいっぱいあったよ。とりあえず、これを食べてみなさい」

次々と皿をテーブルに並べる。アディエルはそれに目もくれず何かをブツブツと呟いているが、ガルダがフォークで料理を口元に運ぶと条件反射なのかそれを口に入れて租借する。

すると、若干暗い色を見せていた瞳に光が戻り、目が驚きに見開かれる。

「……美味しい」

感慨が詰まったようにアディエルが呟く。

「だよね。父さんもつい摘んで食べちゃったよ」

「す、すいません。これ作ったシェフに直接この喜びを伝えたいのですが、呼んでいただけますか？　いえ、やっぱり私が自分で行きます。厨房へ案内して下さい」

キラキラとした表情になったアディエルの姿にアイラは自分の両親が作った料理が人をここまで喜ばせたことが嬉しくもあったが、同時に苦笑いを浮かべる。

そしてアディエルに向けて言う。

「さっき言ったこと訂正するわ。あなた、あいつと似てる」

顔や性格は似てなかろうと深いところで二人はよく似ていた。

◇◇

アディエルとガルダが入店して大分時間が経った。エリス村なら人々が家に入って寝る準備をする時間だというのに、窓の外の景色は夜の闇が街灯の光によって取り払われ、未だに多くの人が行き交っている。

「来ませんね……」

何個目になるか分からないケーキをフォークで差しながらアディエルが呟く。

「まあ、毎日来るからと言って今日も来るとは限らなかったね」

ガルダは娘の呟きに答えるながら追加で注文したホットコーヒーを啜る。すでにガルダはお腹いっぱいなのだが、同じだけ食べて更にケーキを食す娘の姿に甘い物は別腹って本当なんだなと感心している。

「とりあえず、今日は閉店時間まで粘りましょう。ケーキ取ってきます」

「まだ食べるの？」

「お父さんもいりますか？」

「アディが食べてるのを見てるだけで十分だよ」
「では、私の分だけ……」
そう言ってアディエルが立ち上がった時、その声は聞こえてきた。
「巨乳席を大至急用意してくれ。奴が来る前に早くっ！」
その声にアディエルが店の入口を見ると見覚えのある茶髪の男がアイラに話しかけている。
その姿を見た瞬間アディエルはその男の周囲を見回すが、男はただ一人だ。アディエルは男に向かって駆け出した。
「早くしないと奴が……アークがふと見つけた激辛の店で超絶鬼辛ディナーコースをオレだけ食わされるんだ。早く巨乳の席へごあんなぶほっ！」
頬への強烈な衝撃に茶髪の男、レオナルドは壁へと吹き飛ばされる。
「痛って～、なんなん……だ……」
衝撃の原因を見ようとしたレオナルドはその人物を見て、驚きに身を固める。
「お久しぶりです。変態」
アディエルはレオナルドを殴った手をまるで病原菌に触れたかのように丹念に着ている服で擦りながら再会の挨拶をする。

「再会の挨拶にしちゃ過激じゃね？」
「はあ？」
「あ、いえ……つーかマジかよ。アークの予想は当たりか」
「その兄さんは何処ですか？」
「ああ、もうすぐ来ると思う。ところで、アディちゃんのお胸は成長した？」

他の人間から見たら凄まじい威圧感を放つアディエルの姿にレオナルドは飄々としている。

「もう一発いきますか？」
「目測では……一ミリメトルは成長してんね」
「よし、殴る」
「……アディ？」

殴ると言いつつ、脚に力を込めて蹴りの体勢になったアディエルに待ち望んでいた者の声がかかる。
アディが声の主を見るとそこには無表情ながら若干驚いた様子のアークがいた。

「兄さんっ！」

その姿を見た瞬間に全てを忘れ、アディエルはアークに抱き着く。

「久しぶりだな」
「……うん」
「泣いてんのか？」
「誰のせいだと思ってるのよ……ばか……兄さんのばか……」

アディエルはアークの言葉に涙混じりに呟き、抱き着く手により

一層の力を込めた。

兄妹の話し合い

再会を果たした一同は席を同じにし、向かい合う形で座った。アークの前にアディエル、レオナルドの前にガルダという図だ。

「アークの親父さんも来てたんすね」

「娘一人で行かせるわけにもいかなかったしね。二人とも元気そうで何よりだよ」

アークとレオナルドの顔を見てガルダは安堵したように言う。バベルに挑み、二度と帰って来ないというのは珍しくない。ガルダ自身もバベルに挑戦していた頃、知り合いが帰って来なかったことは幾度もあった。聞き込みや『セミヤー』での話を聞く限りは大丈夫そうだったが、実際に二人の姿を見て本当に安心していた。

「少し見ない間になんだか雰囲気もちょっと変わったかな？」

「そっすか？」

「ああ。アークなんかたった一月半の間に纏った風格が一変してる」

「そんなもん自分じゃ分からない」

「父さんは客観的に見てそう思うんだから間違いないよ」

ガルダから見た二人は生き物の死に触れたからだろうか、男の顔になっている。特にアークはちょっと前までは全身に漂っていたやる気のないオーラが成りを潜めていた。

「確かに、兄さんは少し変わったかもしれません……」

「アディちゃんも言うってことはそうなのかもな。ま、環境が変化したんだから人も自然と変わるもんさ」

「そういうのとは少し違うようにも思えますが……」

変わったというよりも近付いたようにアディエルには思えた。自分が殺し、自分が殺された最強の吸血鬼と兄の姿が重なりつつある。

「兄さん……兄さんはなぜバベルに挑むのですか？」

核心には触れずに、なぜアークが自分な元を離れてバベルに向かったのかを問う。

「……レオが誘ったからだ」

「責任丸投げかよっ！？　まあ、間違いではねーけどよ」

それだけじゃないだろうにとレオナルドは思う。確かに何度も誘いはしたが、その度に素気なく断られている。アークがいきなり心変わりしたとするならばそれなりの理由があるだろうと思うが、流石に聞くことは躊躇われた。言えないならそれで構わないし、話してくれるならば真剣に聞いてやる心構えはある。レオナルドにとってはそれだけのことだ。

だが、アディエルはそうはいかない。アークの思惑を知りたいと思っている。もちろん、アークの言うことも多少信じてはいるが、それだけでは理由として少し弱い。やはりアークは自分の知る吸血鬼の生まれ変わりで、自分と同じように前世の記憶を持っているのではという疑問は消えない。

「兄さん、私に嘘や誤魔化しなんて吐かないでください。本当の理由を教えてください」

「……お前の無病息災」

「説得力あるわー」

「あるね」

「……あくまでシラを切りますか」

アディエルに睨まれるがそれしきのことで動じるアークではない。アークにしてみれば女神ランカトゥーリスと戦うためにバベルに挑むなんて頭がイカレ過ぎの理由を話す気はない。別に他人にどう思われようとも構わないが、大切に思う者にイカレ野郎扱いされるのは出来れば避けたい。

とは言っても普段の行動が十分にイカレ野郎の範囲に収まっているのだが、アークにしてみれば普通のことすぎて考慮にすら入っていない。

「妹のことを考えているよき兄だろう？」

「……若干納得しそうですが、絶対他に何かあります。例えば……昔に何かあったとか？」

「昔、ねぇ……七歳くらいだったか。お前が熱出して寝込んだ時に、寝付くまで手を握っててろと言われて朝まで起きてたことがあったな。うん、それがきっかけだ」

「あれはやたら話しかけてくる兄さんが悪いんです。ってそうじゃなくてっ！」

そこで兄妹による言い合いが始まる。実際にはアディエルの問い詰めをアークがのらりくらりとかわしているだけである。それを微笑ましいという表情で見ながらレオナルドは食事に勤しみ、ガルダはゆっくりと冷めたコーヒーを口に運ぶ。

「アディ、気はすんだか？」

「はぁはぁ……ええ、このままでは話は平行線でしかないってことが分かりました」

肩で息をしながらアディエルが座る。白熱し過ぎてアディエルはいつの間にか席を立っていた。

「それで決めました。兄さんの本当の目的を聞くまで私もここにいます」
「村に帰れ」
「バッサリいったなー」
「切れ味は変わってないんすよ」
「二人は黙っててくださいっ！」

余計な茶々をいれてくるレオナルドとガルダの二人をギッと睨みつける。それにレオナルドは圧力に押され食事を再会し、ガルダは苦笑いを浮かべた。

「コホン、いいですか？　私がどうするかは私が決めます。兄さんにあれこれ指図される筋合いはありません」
「知らん。帰れ」
「帰りません」
「はあ、いいかアディ？　ここはな村と違って人が大量発生している。それだけに不愉快な目にもあうだろうし、殺したい蛆虫も沸いて出てくる。俺は心配してるんだ」
「出たよシスコン」
「どうしてアディにかける優しさの半分も父さん達にはくれないのかなぁ？」
「発言するな、殺すぞ」

今度はアークがレオナルドとガルダを睨む。それにレオナルドはやれやれと苦笑し、ガルダは目線を露骨に逸らした。

「兄さんの心配は余計なお世話です。これでも腕に自信はあります」
「喧嘩一つしたことない奴が偉そうに……」
「兄さんと喧嘩したことはあるじゃないですか」

「それとはまた別の話だ」

アディエルは確かに他者との喧嘩という意味では今世ではしたことはない。したとしても、兄妹喧嘩という名のじゃれつき合いだ。だが、アディエルには明確な前世の記憶がある。戦いのために日々研鑽し、ランカトゥーリスの傍に仕えたという記憶が。そのため、アディエルは幼い頃から隠れた所で修練を重ねていた。隠れて行っていたために大したことは出来なかったが、前世の記憶と共に身体能力も多少受け継いでいたのか、前世ほどではないにせよ人間という種においてはアディエルは中々の技量を持っている。

「どうしても帰れと言うのなら、なぜ兄さんがバベルに挑むのか真実を話してください」

「……アディ、お前ウザいぞ」

アディエルの言葉にアークの目が細められる。

そこでアディエルは悟る。これ以上突っ込んだ所へと足を踏み出せば、例えシスコンと呼ばれるアークであろうと明確にアディエルを拒絶する、と。

「う……だけど、私は兄さんと一緒にいたいんです。兄さんの考えを知りたいんです。それはいけない事ですか？」

「なんか告白みてー……」

「兄妹の恋愛はそれだけで禁断だから、厳密にはいけない事ではなかろうか？」

今度はレオナルドとガルダの茶々を諌める者はいない。というより存在そのものが無視された。

アディエルの目には目の前にいるアークしか映っていないし、アークの目もまた涙を滲ませるアディエルの顔しか捉えていない。

「ゴキブリ並に湧き出る害虫共の駆除が大変だな」
ふと、アークがため息混じりに呟く。そうして視線をテーブルに並ぶ料理へと移し、それらを口に運ぶ。
「兄さん……ということは……」
「お兄様から許可が下りたってことだね」
「やっぱりこうなったか……昔からアディには甘いんだよねアークは」
「てめーはさっさと村に帰れ。今母さんだけで農作業してんだろ」
「いや、グリードさんも手伝ってくれるらしいから。でも、ほとんど一人で抱え込んでるだろうな。父さんは明日帰ることにするよ」
「親父が手伝ってんすか？」
「おお、そうだっ！」
レオナルドの言葉にガルダが思い出したとでも言うように手をポンと叩く。
「グリードさんから言伝を貰ってるんだよ、レオ君にね」
ガルダの言葉にレオナルドが顔をしかめる。手紙だけ残して黙って出ていったためにばつが悪いらしい。
「え～、ゴホン、マ～マ～マ～～『この馬鹿息子がっ！　てめぇなんか勘当だっ！　どこででも野垂れ死にやがれっ！　だけど本当に野垂れ死にする前には帰ってこい。勘違いすんじゃねえぞ？　オラァてめぇなんぞどうでもいいが、母ちゃんが心配してるから仕方なくだかんな』」

それは本人かと思えるほどに忠実に再現されたガルダの声帯模写であり、レオナルドは本当に父親に言われているかのような錯覚さえ覚えた。

「つーか最後にデレるなよっ！　気持ちわりい……」
「そう言ってたと伝えておくよ」
「いや、待ってください。その……悪かった。絶対バベル制覇して帰るから待っててくれって伝えてくれますか？」
「わかったよ」

レオナルドの言葉にガルダは根はいい子なんだよなと思いながらその姿を見つめる。次いで我関せずとばかりにマイペースに食事を続けている息子を見た。

（こうゆうのうちの息子は言ってくれないんだよな……とゆーか父親との久しぶりの再会を喜ぶそぶりどころかさっさと村に帰れだし……）

アークの対応に物寂しさを覚える。冷たくされようとも親ばかの気があるガルダとしては何らかの優しい言葉が欲しい。

「アーク……母さんへの言伝とかあるかい？」
「特にない」
「なくても捻り出してくれ」
「……浮気はほどほどにしろって言っとけ」
「浮気だとっ！？　しかもほどほどにしろだと……ど、どーゆうことだっ！」
「冗談だ……半分」
「半分？」
「田舎なんて何もないとこでやることったら限られてくる。しかも

女に飢えた男がいっぱいの地で旦那は長期不在……何があっても不思議じゃない。大丈夫、血縁関係が半分の弟妹が出来ても受け入れっから」

受け入れはするが、多分可愛がりはしないがな、とアークは最後につけて冷笑を浮かべる。

一方アークの言葉に色んなことがガルダの頭の中を駆け巡る。最後の方はすでに耳に届いておらず、仲の良い男友達にお前の嫁さん可愛いなと言われた記憶等を思い出していた。

「帰るっ！　父さん今すぐエリスに帰るっ！」
「こんな時間に？」
「明日なら乗り合いの馬車とかも出てますけど……」
「やだっ！　今すぐ帰るんだっ！」

なぜか駄々っ子のようになってしまったガルダをアークは楽しげに見つめる。

「アーク、からかうにしちゃ若干リアリティがありすぎる」
「というかお母さんがそんなことするはずありません」

ガルダとディーネはいまだに同じベッドで眠り、一緒に風呂に浸かるほどに仲が良い。また、子供達やその他の者達の前でも平然と愛してるというやり取りを繰り広げている。

「いや、アディちゃん……可能性はゼロじゃないぞ。ディーネさん、まだ三十四歳の女盛りだし。ま、巨乳じゃないからオレの下半身は微動だにせんが……」
「反応してたら今頃折ってる」

アークとアディエルの母であるディーネは胸はそれほど大きくないが、女性にしては背が高くスタイルはいい。しかし、レオナルドにしてみれば胸の部分だけが重要であり、親友の母親が巨乳ではないことに今この時だけ感謝した。

「とにかく、父さんは大至急帰る。とりあえず今住んでる場所の住所を教えなさい。あ、あとアディ、手紙も定期的によこすこと。アークとレオ君がどうしてるのか知りたいからね」

「はい」

住所はアークがめんどくさがったのでレオナルドがガルダに伝えた。

それを書き取りガルダは席を立つ。そして伝票を持っていそいそと店を出ていった。レオナルドとアディエルは見送りのために一緒に外までついていったが、アークはその場に残って食事に集中した。

「兄さん、薄情すぎますよ……」

「そうだそうだ」

ガルダの見送りを終えた二人がまた店内へと戻ってくる。

「いいんだよ。見送りするとか俺のキャラじゃねえし」

そう言ってアークは席を立ち、次の料理を取りに行く。

「もう」

「アークは照れ屋なんだよ」

「本気で言ってますか」

「まさか。単にかったるかったに決まってる」

「でしょうね……」

やはり根本的なとこでのやる気のなさは変わってなかったとアディエルは最初に受け取った印象を心の中で変更した。

「ほれ」

「……なんですかこれ？」

アークが持ってきた料理の皿が目の前に置かれアディエルの身体が硬直する。

「鳥唐」

「見ればわかります。なんで私の前に置くんですか？」

「アディの到着を祝っての兄からの心付け」

「あ、いえ、私もうお腹いっぱいで……」

「アディの好きな甘い物でコーティングすれば食えるだろ？　甘い物は別腹って言ってたし」

「……うわぁ」

アークが鳥唐揚げの皿にプリンを落とし、グチャグチャに掻き混ぜるのを見てレオナルドがうめき声のようなものをあげる。アディエルは声さえもあげずアークの行いをなんとも言えない表情で見ている。

「さあ、食え」

「兄さん、私……」

「俺は内心アディが来てくれて喜んでるんだ。これは言わば祝杯。さあ、食え」

絶対違うと思いながらもレオナルドは兄妹を見つめる。いやらしい笑いを顔に浮かべるアークは置いておいて、アディエルの方は好意を全面に押し出された結果、断りづらくされており、泣きそうだ。

結果としてアディエルは泣きながら完食した。店を出るときのアークの顔はとても晴れやかだったのは言うまでもない。

後日、ガルダからアークとアディエル宛てに手紙が届く。
その内容はディーネに浮気をしてないか問い詰めた結果、やってないと言われたのに関わらずしつこく迫ったことでブチ切れられて、全治十日の怪我をしたというものであった。

エリス村は平和であった。

兄妹の話し合い（後書き）

やっと三人揃った……

次回から第二章です

アディエルと街へ

アディエルと再会した翌日は三人でアディエルの装備やら日用品、足りなくなった道具等の補充をした。

最初、アークはバベルに一緒に入ると言うアディエルの意見を反対していたが、熱意に押され受諾した。

アディエルの身につける装備に関してはアークらと同じ場所で購入した。アディエルの分の代金は貸すだけだと言いながらアークが全額支払ってあげた。多分、後でアーク自身から徴収することはないだろう。

アディエルはそんな理由で多少の遠慮もあったのか、武器は鉄の剣と剣のランクとしては下から数えた方が早い物を購入したのだが、防具に関してはアークがあれこれと口出しし、動きやすい物がいいと言うアディエル自身の意見も相まって銀の軽鎧を購入した。アーク達の鎧とは違い、肩から先は覆う物がなく、また下半身はショートパンツを着用し、脚甲部に覆われていない太股はさらけ出した状態なので一見すると衣服のように見えなくもない。しかし、銀の軽鎧は炎系統のスキルの耐性も付き、防御力も中々に高いために中級の者に広く愛用されている品である。それだけに値も少々張るのだが、アークがほぼ無理矢理にこれに決めた。

そして無事買い物を済ませた三人はアーク達が知る範囲でグロリアの街をアディエルに案内がてらぶらつく。

「それにしても今の時代はスキルカードの素材が豊富ですね」

アディエルが最後に購入したスチール製のスキルカードを見なが

ら言う。スチールはアークのスキルカードの素材であるロジウムよりも能力は劣るがそれでもバベル初心者が持つには破格の代物である。

「昔は十種類もなかったのに……」
「昔？」
「あ、いえ何でもありません」

つい前世を思い出して漏れ出た言葉にレオナルドが反応する。アディエルは慌ててそれを誤魔化す。

「ふーん……まあ、聞いた話じゃここ二百年の間に新しく金属の精製方法が確立されたことや最近のバベル攻略中に宝箱の中から発見される物の中に未知の金属があるってことがスキルカードの種類が増えた要因らしい」
「そうなんですか」
「ああ、そのおかげで昔ならスキルカードのランクアップに結構かかった金額が大分抑えられるってもんよ」

スキルカードにはその素材ごとに書き込まれるスキル数に上限がある。上限に至るとそれ以上スキルは書き込まれないため、スキルを得たとしても分からないし使うことが出来ない。そのため上限に近付いたスキルカードは更に多くの上限を持つ素材のカードへとランクアップする必要がある。スキルカードのランクアップは元々のスキルカードに書き込まれていたスキルをそのまま写すことが出来、尚且つかかる費用も普通に買う半額ほどで済む。アディエルがアディーナであった時代には十の上限を持つスキルカードをランクアップさせるには上限が百のスキルカードにするしかなかったが、今の時代では十の上限の次は二十、三十と選ぶことが出来る。前者は種類がなかったために選択肢がなく、かなりの価値の物へとランクア

ップさせねばならなかったためにどうしても費用がかかったが、後者は自分の財布に見合った物を選んで購入出来た。

「なるほど……時代というものは移ろいゆくものですね」
「婆くせえ……時と共に代わるからこそ時代って言うんだろ」
「ばっ、婆くさいって何ですか！？　私の何処が婆くさいって言うのか是非教えてもらいたいものです！」
「考え方だよ。何かにつけて昔がどうたらこうたら言うじゃねえか」
「そ、それは……」

アークの突っ込みにアディエルが口ごもる。そして前世の頃と今世をつい比べてしまう自分を省みる。アディエルは前世をほぼ明確に覚えているからこそ人の技術の革新に驚かずにはいられない。
しかし、そもそもの話、アディエルが前世で死した年齢を今の年齢に加えるとおばさんと言っても過言ではなくなるため発言が多少婆くさくなっても仕方ないことだ。知らないとは言え、そこに土足で踏み込むアークの方が悪いのかもしれない。

「むぅ～」

何も言い返せずアディエルが唸り声を発する。

「ふむ、いい顔だ」

アークはそんなアディエルの姿を見てご満悦だ。つい昨日再会したばかりであまりにいつも通りな光景にレオナルドがこっそりため息をつく。得てしてそんな時の仲裁役はレオナルドがすることになるのだ。

「はいはいそこまで。ほら、アディちゃんはレオお兄さんがアイス

買ってあげるから機嫌直して」
「アイス……」
子供のご機嫌の取り方だとは思いつつも、その単語だけでアディエルの心が弾む。
「そうそう。三段重ねの奴買ってあげるからさ」
「ご、五段っ！」
「ダメダメ。あと少しで晩飯なんだから我慢しなさい」
「どうしてもダメですか？」
おねだり口調全開で更に上目使いでアディエルが言うが、レオナルドは首を横に振る。
「アディちゃんがいくら可愛くねだってもオレには効かない。なぜならいくら可愛かろうとアディちゃんは巨乳じゃないから……くっ、オレだって、巨乳以外に貢ぐなんて嫌だよ。断腸の思いですよ……でもっ、お前らが仲良くないと居心地悪いし、時々胃が痛くなるから仕方なく奢るんですからねっ！」
「おお～、レオ立派立派。ついでに俺にも奢ってくれ」
レオナルドの男気にまばらな拍手を贈りながらアークが言う。
「……アークはシングルだからな」
まったくもって図々しいとは感じながらも親友の言葉を受け入れる。
「なら兄さんが購入するはずだった三段のうちの切り捨てられた二段を私に上乗せという形に……」

「いや、ならないから。兄妹揃って図々しい……」

そう言いながらレオナルドは懐を漁り、財布を取り出すと中身を確認する。

「うん、大丈夫だな。んじゃ買ってくるけど何がいい？」

「あ、待ってください」

二人の希望を聞いて買いに行こうとしたレオナルドだが、アディエルに止められる。

「兄さん？　買いに行くのは兄さんが行ってください」

「なんでだよ」

「そういう気分なんです」

実際は意趣返しの要素が強い。アークにパシリに行かせることで、おいしくアイスが食べられると言うものだ。

「気分って……そんなんでパシるのは嫌だ。何より今、お前と別行動なんぞ……」

「いいから行ってください」

「嫌だっつってんだろ」

「だから言い合いすんなって！　アーク、大丈夫だ。アディちゃんにはオレがついてるから。ほい、金。オレは絶対に完食できるものを頼む」

レオナルドがアークに銀貨を一枚渡し、自身の希望を告げる。便乗するようにアディエルも自分の希望を伝えた。

「……レオ、アディから目を離すなよ」

「へいへい」

そしてアークはすぐ戻ると言いながら近くのアイスクリームショップへと向かっていった。

「それにしてもアディちゃんは挑戦者（チャレンジャー）だね」

「はい？」

レオナルドの言葉にアディエルは小首を傾げる。

「だってアークをパシリに任命だぜ？　絶対希望通りの味なんて買って来ないって」

「はっ！？」

今気付いたとばかりにアディエルは口をあんぐりと開け、次いで終わったとばかりに絶望した表情へと変わる。

「なに、考えてなかったの？」

「ええ……失念してました」

「ご愁傷様」

うなだれるアディエルにかける言葉が見つからないレオナルドはただ一言そう言った。

「今ならまだ追いつけますよね？」

「は？　ま、待って！」

アークを追いかけようとしたアディエルの手を咄嗟にレオナルドが掴む。しかし、その瞬間レオナルドの視界の天地が逆転した。

「がふっ」

どうやらアディエルに投げ飛ばされたということを悟り受け身をとったが、下は石畳のため衝撃がレオナルドの体を襲う。

「さ、触らないで下さい変態っ！」

掴まれた手をどこからか取り出した布で懸命に拭きながらアディエルはレオナルドを怒鳴りつける。

「ちょっとじゃん……」

「ちょっとでもです」

話すこと自体は問題ないのだが、アディエルはレオナルドに自分に触れられたくないと思っている。別に男性恐怖症だからというわけではなく、単にレオナルドに直接触れられるのが嫌なだけだ。アディエル自身から触れる分には幾分かマシだし、間接的ならば何の問題もない。だが、とにかく直接の接触だけはレオナルドがアークの最も親しい友となったと知った日からひたすらに拒絶していた。

「アディちゃんには無害なのに……」

アディエルが巨乳ではない故にそれだけは断言できる。

「なら、胸の成長具合を逐一聞かないでください」

「挨拶みたいなもんじゃん」

むしろレオナルドにとっては挨拶そのものであった。

「聞かれる度に不快感をもたらす物は挨拶とは言えません」

「なら、アディちゃんも男への挨拶はあなたの股間の針は槍へと進化しましたか？　とでも聞けばいいじゃん」

実際にアディエルにそんなこと言われたら「なら進化したかどうか君の目で確かめてよ」と言いだす野郎が出てくるだろうななどと思いながらレオナルドが冗談を飛ばす。

「針……槍？　なんのことですか？」

「おっと、純粋すぎて比喩表現が伝わらないとは……アークとか親父さんに付いてるの見たことない？」

「……っ！？」

理解したのかアディエルの顔が赤くなる。その姿にこれで巨乳なら完璧なのになぁと考えながらレオナルドは立ち上がる。

「あの子かーいーなぁー……」

「オッサンが色々教えてやりたい……はぁはぁ」

周りで様子を見ていたギャラリーからそんな声が聞こえてくる。美少女たるアディエルの姿はただそれだけで周囲の視線を集めるには十分だった。下ネタに反応して顔を赤くしたアディは最早殺人級の可憐さを周りにばらまいている。男だけでなく、女性もまた微笑ましげにその様子を見ていた。

その様子にレオナルドは目立ちすぎたと内心舌打ちする。そして危惧したことが起こってしまう。

「ねえねえ、そんな野郎ほっといておれらと遊ばない？」

「そうそう。すっげー楽しいことしてやるからさ」

「楽しいっつーか気持ちいい？」

レオナルドがいるにも関わらず、アディエルに声をかけてくる男達。見るからに軽薄そうな彼等のうち、長髪でそこそこ顔が整った男を勇者A、スキンヘッドでサングラスをかけた男を勇者B、ニキビ面の背の低い男を勇者Cとレオナルドは勝手に呼称することにする。

こうゆう輩がアディエルに近付かないように目立たず、さも頼りありげな彼氏風にアークが帰ってくるまでレオナルドはアディエルを守ろうとしていた。

アークはそういう男達が近付かないように、体中に殺気を漲らせ周囲の男共を威嚇していた。街を歩く者達はバベル挑戦者が多く、そういうものに敏感な為、殺気の鋭さを警戒して近づかないようにしていた。だからこそアークはパシリに行くのを若干渋っていたのだが、レオナルドを信頼してアイスを買いに行った。

「結構ですから……」

「いいじゃん、行こうよ」

やんわりと断ろうとするアディエルの言葉を流して勇者Aが言う。

ここでレオナルドが恐怖しているのはアークがもし今にも帰ってきてこの光景を見ることだ。

「つーか何見てんの？　もしかして文句でもあんの？」

「ちょっとこの子借りていーよね？」

勇者BとCがレオナルドとアディエルの間に立ち、レオナルドに対して凄みを効かせる。

「ちょっ、止めとけって……」

たまらずレオナルドが止めに入る。

「お兄さんはちょーっと黙っててくれる？　つーか、彼氏？」
「オレはそいつの兄貴の親友だ」
レオナルドは勇者達に近付いて言い放つ。
「あー、お兄ちゃんの親友なんだ……つーかそれじゃなんも関係なくね？」
「ダチの妹さん貸す許可頂戴。一晩だけ」
「何なら二晩でもいーけど？」
そう言って勇者達は笑う。
「お前ら……空気読んでくれよ」
アークが向かったアイス屋の方向をチラチラと見ながらなんとか穏便に解決しようする。なぜだかアイス屋の方角からどす黒い暗黒の気が立ち上った錯覚が見えた。
「空気読むのはおめーだし」
「この子もおれたちと一緒がいいって言ってるよ、ねー？」
「嫌ですけど？」
勇者達の言葉を今度はキッパリとした物言いで返すアディエル。最初からそうしてくれよと思いながらもレオナルドは更に畳み掛ける。
「ほら、本人嫌がってるし、交渉決裂ってことで終わりにしよう。ほれ、アディちゃんも行こう」
「変態は私に触れないでください」

「アディちゃんも空気読もうか？」

アディエルの腕を引っ張ろうとした瞬間振り払われてしまい、思わずレオナルドはツッコミを入れる。

こうゆう場面でも空気を読まないのは兄妹一緒だとげんなりした表情になる。

「アディちゃんって言うのかー」

「つーか変態だってよ」

「ストーカーか何か？」

「私のストーカーではありません」

「さも、誰かのストーカーしてるみたいな言い方は止めてくんない？　とゆーかいいか、三つ忠告するぞ。一つ、アディちゃんをアディちゃんって言うな。二つ、絶対にアディちゃんに触れるな。三つ、顔覚えられる前に今すぐここから立ち去れ」

レオナルドの姿は他者から見れば懸命に親友の妹を守ろうとする良い青年に見える。必死な形相なのも手伝って迫力もあった。

ただ、レオナルドの心情はちょっと違う。確かにアディエルを守ろうと必死ではあるが、それよりもシスコンな親友がこの場面を見ないようにするために早急に解決しないといけないと焦っていた。

「必死になってんよコイツ」

「アディちゃん触っちゃダメだって？」

「へへ、ターッチ」

「きゃっ」

勇者の一人が止める間もなくアディエルに触れる。それにビックリしたのかアディエルが短く声をあげた。

しかし、その瞬間その場にいる全員が振り返るような強烈な殺気

が人混みの奥から発せられた。

「な、なんだ？」

「なにが……」

驚く勇者達。

そしてレオナルドは見た。人混みの奥に銀髪と肩を揺らしながら毒々しい色のアイスを両手に持ち、こちらに向かってくる無表情な殺気の塊を――

「魔王が来ました……」

半笑いでレオナルドはそう呟いた。

くそ野郎

人々が無意識にアークを避けるため、道が出来たことによってすんなりとアークはアディエル達の元へと戻ってきた。

「ア、アーク……これは、その……」

未だに収まらない殺気にレオナルドはしどろもどろになりながら状況を弁解しようとする。しかし、アークは睨みつけることでそれを制す。

「なんだよコイツ」

「アディちゃんの知り合いか何か？」

「兄さんです」

「あー、噂のお兄ちゃんか。ねぇ、妹さんちょーっと貸してくんない？」

殺気の塊となっているアークに対してこんなことを言う辺り、本当に勇者だなとレオナルドは思う。ただ、空気の読めなさは半端ではない。

アークはそれに何も答えず男達をじーっと見ている。それはもう一人一人の顔をじっくりと――

「何見てんだよ？」

「なんか言えよ」

「コイツ気持ち悪いんだけど」

何を言われてもアークは何一つ言葉を返さない。表情も一貫して無表情なため、不気味である。

「兄さん、あの……」

アークの様子に長年の付き合いで不機嫌であることを感じたアディエルは何か言おうとするが、言葉が浮かんでこない。

「アイス」

「へ？」

「アイス買ってきた」

「あ、はい」

差し出された赤、黄、紫にピンクの斑色の三段アイスを差し出されて反射的に受け取る。

「おい、無視してんじゃねーよ！」

声を荒げて勇者Bがアークを威嚇する。アークはそれに一切答えず、また勇者達の顔を見つめるだけだ。

「お、おい。なんか言えって」

「ビビってんのか？」

やはりアークは何も答えずに顔を見つめてくるだけだ。しかし、殺気は相変わらず体中からほとばしっている。

さすがに不気味すぎて勇者達も関わらない方がいいんじゃないかと思いはじめた頃、ようやくアークが口を開いた。

「アイス……そこのデクの棒に買ってきた奴……やる」

そう言ってアークは持っていたアイスを勇者Aに差し出した。

「は……え……」

どうすればいい？　とばかりに勇者Ａは仲間を見るが彼らもまたその問いに対する答えは持っていない。

「連れが騒がせた詫びだ」

そう言うとアークの体に漲る殺気が収束していく。

「こんなんより妹貸しくれよ」

「そーそー」

「それに関してはこれから話し合おうじゃないか。まずはアイスを受け取れ。そして食え」

アークはチョコレート色のアイスを勇者Ａの手に無理矢理持たせる。

「いらねーっての」

「妹が？」

「いや、それはいるけどよ」

「じゃあまずはアイスから。食え」

「何なんだよコイツ……」

と言いつつ、勇者Ａはアイスを口に運ぶ。何気なく口に運んだものだからそれが何なのか気づかなかったのは失敗だった。

「ぐわっ！　ぺっぺっ！　ぶはぁっ！」

口に入れた瞬間に鼻をついた凄まじいまでの臭気。どこかで嗅い

だことのあるその臭いが何なのか悟った時、男は全てを忘れて悶絶するしかなかった。

「ふふっ、くくくっ」

勇者Ａが悶絶しながらどこからか取り出した水で口を濯ぐ音とアークの笑い声しか聞こえなくなる。

「てめぇっ！　これ……」

勇者Ａが憤慨しながらアークを怒鳴ろうとしたが、それ以上は何も言えなくなる。自分が何を口にしたのか言いたくなかった。

「ふふふっ」

アークはその光景を見てとても愉快そうに笑う。アディエル達を含めた周りのギャラリー達もアークが何を食べさせたのか気になってしょうがない。

「くそ野郎……」

「ははははっ！　くそ野郎はお前だろ。だって今さっき食ったんだから」

アークがそう言った瞬間、周りの者達の目が勇者Ａと勇者Ａが投げ捨てたアイスらしきものにいき、一斉にそれらから距離を置く。

「や、やっぱりあれは……」

「臭いでわかるだろ」

アークの言葉に勇者Ａの顔が青ざめる。予想していた事が現実で

あることを知り、絶望した。仲間の方を向けば露骨に目を逸らされてしまう。

「こ、こここ殺す」

当然怒りはアークへと向かった。しかし、アークの表情は喜悦に歪む。

「ここで？　やれば？」

人目につくところでの暴力沙汰となれば騎士団が動く。それを気にしてか勇者Ａの行動に躊躇が生まれる。

「てめぇ……覚えてろ。マジで殺してやる」

そう言い残し、勇者Ａは去っていく。仲間達も若干躊躇しながらもそれについていった。周りを囲んでいた人垣は勇者Ａから目を逸らしながら割れていく。

「あー、愉快愉快」

「鬼畜過ぎる……そして発想がガキだ……」

それも十歳にならないものでもそうはやらないことである。

「ん？　つーかあれ、オレに買ってきたとか言ってなかった？」

「正確には拾ってきた」

「そんなん分かってるよ！　じゃなくて本来ならオレに渡されたもの？」

「半分は冗談だぞ？」

「それって半分は本気ってことだろ」

レオナルドは自分が渡された未来を想像してみる。多分ではあるが、本当に食べられるものかどうか執拗に確認するだろうから気づくだろう。となれば冗談と言うのは頷ける。ただ、万が一食べてしまう可能性もなくはない。

「もし食ったとしても、まずい料理を食った時にくそみたいにまずいって表現を実感を持って使えるだろ」

「だからってな……」

「兄さんはアイスを侮辱しました」

アークとレオナルドの言い合いにアディエルが参加してくる。甘い物が三度の飯よりも好きなアディエルとしてはアークのしたことは到底許せるものではない。

「アイスに謝ってください」

ただ、怒るところが若干ズレてはいる。人に汚物を食させたことよりもアイスのコーンに汚物を乗せたことが許せないのだ。

エリス村にいた頃からアークが色々やらかしたのはアディエル自身も心得てはいるが、それがアディエルに声をかけたからと言う小さい理由だということをアディエルは知らない。ただ単にむしゃくしゃしてやったと思っている。それを鑑みれば、先ほどのアークの行動は自分を助けるためのものだと考え、内心嬉しかった。

ただ、アイスに対する侮辱は許せない。

「なんで無機物に謝んなきゃならねーんだよ」

「アイスは……いえ、甘いものは全て生きてます」

「どんな理屈だよ。レオ、こいつの相手は任せた」

「は？」

「買い忘れたもんがある。あと……ちょっと用事が出来た。今度はゴミに声かけられるんじゃねーぞ。もし声をかけられたら容赦なく殺せ。さもなきゃお前にもあれを食わせる」

あれと言った時にアークは落ちたアイスを指差す。

「それと迷惑になるから片付けておけよ。手袋やる」

そしてゴム製の手袋をレオナルドに渡してアークは去っていった。ちなみにゴム手袋はアークの必需品の一つであり、いつでも持っている。

「勝手な野郎だ」

「兄さんったら……あ、これおいしい」

しぶしぶながらも手袋を装着し、汚物を片付けるレオナルドと買ってきてもらったアイスを若干疑いながらも口に運ぶアディエル。アークがアディエルに買ってきたアイスは色は奇抜ではあるが味は良かった。

しかし二人、特にレオナルドは失念していた。今の状況下でアークがアディエルを置いていくはずがないことを。そしてアディエルに触れたのは勇者Ａではなく勇者Ｃであったこと。また、アークが向かった方角が勇者達が去った方向だと言うことを――

◇◇◇

深夜の裏路地。人通りのない通りを長髪でそこそこ顔が整った男とスキンヘッドでサングラスをかけた男、そしてニキビ面の背の低

い男三人の男が歩いていた。アディエルに声をかけた勇者三人組である。

「くっそ、まだ口ん中に違和感ある」
「ヒャハハハ、今考えてもあれは傑作だったな」
「気づかねーのもどうかと思うぜ」
「うっせ！　あの野郎、絶対に殺してやる」

怒りをあらわにする長髪の男。

「それはそうと、あのアディちゃんって子可愛かったなー」
「そーそー。一発やってみてぇよ」
「へんっ、あの野郎をぶっ殺す前に目の前で犯してやるのも面白そうだ」
「おいおい、まだ足りねえのかよ」
「あれから二人も引っかけて犯したじゃんよ」

アークに追い払われた男達はあの後、二人の女性をナンパし、五人でよろしくやっていた。食事に誘いつつ、強引に最後までいく手口は最早レイプであったが、繋がりのある裏の顔役に処理を任せたために問題になるようなことはまずない。むしろその女性らを商品として渡したために小遣いすら貰ったほどだ。

「つーか、今日のお前はキス魔だったな」
「数時間前にあれを食った口を女に吸わせてるのはマジ鬼畜。おかげでおれらキス出来なかったじゃん」
「黙れ。二度とそこに触れるな」

長髪の男を先頭に三人は歩く。向かう先はグロリアの花街。丁度小遣いも貰ったために今度は素人ではなくプロの技を堪能するため

に向かったのだ。しかし、グロリアの街では花街に行くためにはどう行くにしても人通りの少ない道を通らなければならない。

「ぐわっ！」

一番後ろを歩いていたスキンヘッドの男が突然声をあげて前のめりに倒れる。その音に残りの二人が背後を振り返ればそこには、音もなく気配もなく立つ影があった。

影は全身を黒ずくめにし、顔も定かではない。ただ、手にはスキンヘッドの男の血であろう液体の滴るナイフを持っている。

「な、なにもん……」

声を発しようとした長髪の男の口にナイフが投げ込まれる。次いで影は懐から新たなナイフを取り出して長髪の男に近づき、胸を刺した。

「ひ、ひぃ……」

瞬く間に仲間を殺されたニキビ面の男は腰を抜かしてその場にへたりこむ。影は長髪の男に刺したナイフを抜き取り、最後に残った男に近づいていく。

自分も殺される。そう思った男は恐怖で叫び声すら出せなかった。一体誰が？　と考えても心当たりがありすぎて目星すらつけることが出来ない。

「やっぱ殺しには不意打ちだよな」

影が声を発する。そして顔を覆う黒い布を僅かにほどく。

その顔に男は見覚えがあった。髪の色も見ることが出来れば断定

できたはずだが、あいにくと見えたのは整った顔立ちの少年だ。

「お、お前は……」

必死に記憶を手繰り寄せる。確かに最近見た記憶があったのだが、それ以上は思い出すことが出来ない。

「思い出せないのか？　さっきまでネタにしてたろうが」

その言葉で男は目の前の少年が仲間に汚物を食させた者であることを思い出す。

「なんでここに……」

「なんで？　尾行してたからに決まってんだろ」

「尾行、だと？」

「そ。あの後お前らを追っかけてずっと張り付いてた。そしてこうやって人気のないとこに来て殺す機会を窺ってた。十日くらいは我慢できると思ってたが、存外早かったな」

「ずっとだと？」

アークの言葉に男は驚く。男達もまだまだ未熟とは言え、バベル二階層に辿り着いている。そんな中、誰にも気づかれずに尾行することは自分達よりも相当実力が上でなければ無理だ。

しかし、答えは単純明快だ。アークが尾行に適したスキルをアディエルと再会するまでに身につけていたことが気づかれなかった理由である。アーク達は未だにバベルの一番初めの出入口から進んでいない。それは最初の探索で危機に陥ったことでレオナルドが慎重になってしまったことが原因だ。しかし、魔獣を殺す技術は格段に上がったと言って良い。中でも、常に気配を極限まで消して背後から不意打ちをするアークは＜隠密＞＜不意打ち＞＜バックアタック

＞のスキルを得ていた。隠密はスキルを発動すれば気配をほぼ絶つことができ、不意打ちとバックアタックはそれぞれ値する攻撃を仕掛ければ与えるダメージを増加させるものだ。

「ずーっとだ。お前達が新しく女を引っかけたのも、犯したのも、やるだけやって売り渡したのもずっと見てた」

「何だよ、正義の味方でも気取ってんのか？」

「正義？　まあ、そうだな。ただ、お前が思う正義とは違うかもしれない」

「何だってんだよ」

「アディに俺の許可なく声をかけた奴や触れた奴を痛め付けるのが俺の正義。まあ、殺すのは機嫌が悪かったからだけどな」

「それだけ……？」

たったそれだけのことで仲間は殺されたのだろうか？　そして、自分も殺されてしまうのか。

（いやだ……そんなんで死んでたまるか！）

アークと会話してるうちに足に力はだいぶ入るようになっている。男はアークの隙を見て逃げだそうと画策する。

だがアークはそれを予期したかのように男の視線が逃げ道を探すために僅かに逸れた隙にナイフを足に刺した。

「ぎゃっ！」

「ちっ、やっぱ悲鳴ってのは女のもんに限るな……お前らが犯った奴らなんか、なかなかいい声あげてた」

「はぁはぁ……許して下さい」

この足では逃げ切ることは出来ないと悟った男は命乞いを始める。

ただ、見た目には屈服したように見せかけておいて実は時間を稼いでいるだけであった。今の悲鳴で誰かが気付いてくれるに違いない。そうすれば助かるだろうと男は考えていた。

「悲鳴もつまらんかったからもうお前いいや」

「へっ……」

ただ、想定外だったのは命乞いがアークの耳に全く入っていなかったこと。いや、例え聞こえていたとしてもこの男の言葉は無視していたに違いない。なぜならこの男はアディエルに声をかけただけではなく、触れた存在だ。

アークは足に刺したナイフを引き抜き、そのまま喉を掻き切る。

空気が漏れる音と共に血が吹き出し、男はわずかばかり時間をかけて絶命した。

アークは死体となった男達を一纏めにしてから荷物を隠した場所から取り出した瓶に入っている液体をドバドバとかける。

その液体の正体は油だ。料理に使用される油を三人組がお楽しみ中の間に購入していたのだ。それをかけた後にマッチを擦って興した火を紙に燃え移らせ、纏めた死体に放った。

「んー、思ったより火力が弱いな……焼けるかな？」

立ち上った火を見ながらアークは呟く。そして荷物から新たに物を取り出す。それはアルミを紙の薄さにのばしたものと紫色の芋。そして芋をアルミで包み、火の中に投入した。

「どうせたき火するならこれがなきゃな」

どうやって三人を殺すか考えた時にとりあえず最後は燃やそうと考えたアークはたき火気分で焼き芋をしようと考えていた。ちょう

ど油を買った店にこの二つもあったことも要因かもしれない。

「火か……」

炎を見ながらアークの思考に何か引っ掛かるものがあった。その引っ掛かりが何なのかをしばらく考えていると、誰かが近づいてきた気配を感じた。

「まだ焼けてねえのに……」

芋を回収してアークは荷物を持って顔を隠し、＜隠密＞のスキルを発動し、その場を去った。

とりあえず、人目につかないところまでアークが移動した時、何かを踏んでしまいバランスを崩してしまう。

その何かをアークは確認する。すると、そこには夜においても月明かりで映えるアークよりも色の濃い銀色の髪を持った男が寝そべっていた。

くそ野郎（後書き）

ただ、単に死体燃やした火で焼き芋をさせたかっただけのために書いたお話です。ちなみにサブタイトルはアークのことです。念のため……

銀色の髪を持つ男との邂逅（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。

銀色の髪を持つ男との邂逅

「死体か？」

アークは踏み付けた男の頭を改めて踏む。それはグリグリと頭が地面にめり込むのではないかという勢いだ。

「も……」

「お、生きてた」

死体かと思っていた男がか細く呟くのを聞いたアークは踏み付ける足の強さを弱める。あくまで弱めるだけであって未だに頭を踏んでいるのはご愛嬌と言える。

「……もっと強く踏んで下さいっす」

しかし男から発せられたのは結構ドン引きな発言だった。その声は掠れ気味で、今にも息絶えそうであるのに揺るぎない意志を持っていた。

「こうか？」

アークはまったくそんなことは気にせずに男の頭を踏む。踏んでくれと言われたからというのは理由の三割ほどで七割はただ踏みたいだけだ。

「ナイスっす……」

しばらく男の頭を踏んでいたアークだが、飽きたのかその足を離す。

「もう少しお願いできますか？　あとちょっとでイケそうなんです」
「なんで俺が貴様の悦ぶことをしなければならないんだ？」
「あふん。はぁはぁ……これが寸止めプレイっすか……おねだり？　おねだりが欲しいんすね？　どうかこの卑しい豚を貴方様の御御足で踏ん付けて下さいっす」

なぜか興奮した様子で男がアークにおねだりする。

「いや、飽きた」

そしてそれをアークはキッパリと断った。

「なんて冷たい……そこが堪らんっす。もっと！　もっと僕を詰って下さいっす」
「……変な奴」
「はい、変な奴っす。さあ、もっと下さいっす」

ここに来てアークはこの男の性質を理解する。そう、この男はいわゆるマゾであり冷たくすればするほど喜ぶ変態だと。

「どうしてこんなところに倒れているんだ？」

ということでアークはこの男に優しく接することにした。冷たくされるのが嫌なら温かく接することこそがこの男にとっての苦痛だろうと考えての行動だ。

「あ、はい。ちょっと色々ありまして……」

「色々？」
「長くなりますがよろしいっすか？」
「ああ」
「実はっすね……自分で自分をいじめるためにご飯抜きの刑を課したんすけど、空腹で動けなくなってしまったっす。まったく興奮もしないし、ただただ腹がすくばかりで……でもこの先に何かあるんじゃないかと思えば思うほどに止めることが出来なかったっす」

長くもなんともないただ呆れるばかりの理由にアークはため息をつく。

「ほれ」

その姿を可哀相とでも思ったがアークは持っていたアルミに包まれた芋を差し出す。
それは先ほど焼いた芋だ。生焼けでアーク自身は食べる気がしないが、残飯処理としては男は都合がよい。

「こ、これは……」
「食い物だ。一個銀貨一枚で売ってやる」
「有り難く頂きますっす！　それはもう犬のように手を使わずに食させてもらうっす」

ただより高い物はないが、芋一個の値段としてはぼったくりもいいところの値段をアークは提示する。しかし男は一瞬の躊躇も見せずに食べ出す。公言通り手は使わずに後ろで組んでいる。

「うお、生焼け……お前ごときにはこれがお似合いだよってことっすねわかります」

嬉々として男は生焼けの芋を食べる。その芋がどのようにして焼かれたのか知らないのは彼にとっての幸運だと言えるだろう。
アークはそんな男の姿をかなり冷めた瞳で見つめる。
「ご馳走様でしたっす。いやぁ助かりましたっす。このご恩は……」
全ての芋を食べ終えた男が起き上がる。そしてアークの顔を見てその動作をピタリと止めた。
「何だよ？」
「……いい」
男が呟く。その視線はアークの顔から全体を舐めるように移動し下半身で固定された。
「……ちょっとお尻見せてもらえないっすか？　あ、別に生の尻を見せてってことではないっすよ？　もちろんそっちの方がたぎるんすけど……」
「嫌だ」
「あ、じゃあ僕の方が移動するで動かないでくださいっす」
そう言って男はアークの背後に回る。その顔は真剣そのもので、アークの尻をジーッと見つめつづける。そして不意に男の顔がにやける。
背筋にゾクッとしたものを感じ、アークは男に向き直る。
「とりあえず芋五個で銀貨五枚寄越せ」
アークは手の平を上にして男に突き出す。

「どうぞっす」

その手の平に男は何の躊躇もなく銀貨をのせる。まったく渋らないことに若干疑問を感じつつも貰った物を返すような性格ではないアークは銀貨をしまう。

「あの、つかぬ事を聞きますがお名前を教えてもらってもいいっすか？」

「やだ」

「いいじゃないっすか～。減るもんでもないし。あ、僕の名前はジャスティっす」

「ジャスティス……」

「いえ、ジャスティスではなくてジャスティっす！」

「ジャスティス」

「ジャスティ、っす」

「そうか。じゃあな」

ジャスティを置いてアークは立ち去ろうとしたが、その進路をジャスティが阻む。

「僕は名乗ったっす。んで、貴方のお名前と住所、生年月日、お腰に携えるミニチュアバベルの勃〇時の大きさなど教えてもらってもいいっすか？」

「なんでだよ」

「貴方に興味津々なんす！」

ジャスティが満面の笑みで断言する。対してアークは面倒なのに関わったという表情を隠そうともせずにジャスティを見つめる。

「さあ」

「邪魔だ、どけ」

だんだんいらついてきたアークはジャスティを睨みつけて威嚇する。最早優しく接することなどアークの頭にない。だが、そんなアークの反応にジャスティはたじろぐこともなく、ますます笑みを深くする。いや、その表情は笑顔ではなく、恍惚としている。

「や、ヤバいっす……超いいっす。かつてここまでの美少年に威圧されたことがあっただろうか、いやない」

「なんなんだコイツ……」

威嚇しようとも喜ぶだけの存在。世界にはこのような人物も存在することは知ってはいたが、目の当たりにするのは初めてのためアークもどうしていいのかわからない。

「あの……ご主人様って呼んでもいいっすか？」

「……とりあえず俺の前から消えろ」

「はぁはぁ」

アークの言葉にジャスティはただただ鼻息を荒くする。冷たいアークの言葉はジャスティにとってむしろご褒美であった。

「はあ……」

コイツに何を言っても無駄だと悟ったアークは自身の必需品の一つである縄を懐から取り出す。

「……縄？　縄！　その縄で僕をどうするんすか？　縛るんすか？　縛るんすね！　どうぞ」

アークの意図を察したにも関わらずジャスティは後ろ手に手を組み、アークが縛りやすいように体勢を整える。
やたら従順なジャスティの態度に面食らいながらもアークはジャスティに高手小手縛りを施して颯爽とその場を去った。

「なんて滑らかに人を縛るんだ……惚れたっす」

そしてその場に残されたジャスティはアークの背中にそう言うと、そのままその背中を追って走った。

◇◇◇

「今帰った」
「おぅ、お帰り～」
「お帰りなさい兄さん」

部屋へとアークが帰ってくるとかなり遅い時間だというのにレオナルドもアディエルも起きていた。

「兄さんどこ行ってたんですか？」
「ちょっとな……」

アディエルにちょっかいをかけた野郎共を殺してきました、なんて言おうものなら流石にうるさく言われるに違いないと思いアークは言葉を濁す。

「夜ご飯は食べましたか？」
「いや、なんだかんだあってまだだ」

「簡単な物なら用意出来ますから少し待ってて下さい」

そう言ってアディエルはキッチンへと向かう。レオナルドと二人で住んでた頃はその役割を果たせなかったキッチンが初めて使用された。朝食はアディエルが作ると材料を購入しているのでアーク一人分くらいなら問題はない。

アークはキッチンに立つアディエルを横目に椅子へと座る。

「明日は初めての三人でのバベル攻略だな」

自身の前の席についたアークにレオナルドが話しかける。

「そうだな」

「心配か？」

若干ニヤニヤしながらレオナルドが言う。昨日から何度も話し合いがあった末に了承したアークだったが、心の奥底では納得してないのは明らかなのでからかい半分で食事が出来るまでの雑談として話を振る。

「お前が盾になればいいだけの話だ」

「オレかよ。お前じゃなくて？」

「俺はあいつの剣だ。近づく不届きな輩を切り捨てる、な」

「オレもまた重大な役割与えられちったな」

「お前だからこそだ」

「その信頼が時に重いぜ……」

アークからの信頼の強さを嬉しいと思う反面、裏切った時のことを考えレオナルドは冷や汗をかく。それを考えれば日中にあったようなアディエルに対するナンパは最も防ぐべき物でそれに失敗した

レオナルドはなにかされるのかと内心ドキドキしている。
「夕方のあれだが、もう殺したから問題ない」
「はあ！？　おっと、何でもないよアディちゃん」
アークの言葉につい大きな声を出してしまい、訝しげに振り向いたアディエルに何でもないと言いながらレオナルドは居住まいを正す。
「マジで？」
「ああ」
アークの態度は何を当たり前のことをとでも言いたげでごく自然だ。その姿を見てレオナルドは嘘はついてないと判断し、さらなる事情を聞き出す。
「殺ってるところは見られたのか？」
「多分大丈夫だ」
「多分て……」
アークの言葉にレオナルドは頭を悩ませる。目立つなと言っても聞かないとは思ったが、夜中とは言え人殺しまでするとは予想外だった。
「死体は燃やしたし、証拠となるような物はまずない」
「う～ん……ま、殺しちまったもんは仕方ないけど今度から一声かけてくれ」
「善処する」
仕方ないで簡単にアークを受け入れるレオナルドの感性もどうか

て思うが、死体を燃やしたというアークの行動は後に正しかったと言えることになる。この世界では指紋などから死体の身元を判別するような技術はないためにどうしても時間がかかってしまう。加えて三人組に恨みを抱くような者達がかなりの数いるために容疑者を絞るのも容易ではなく、誰もアディエルのナンパから殺しにまで発展したなどと思わなかったのだ。

「今度は殺さずに生きていることを後悔させるようにするさ」
「そうじゃねーよ」

そこから二人の会話はいつものようにじゃれあいに変わっていき、その会話を聞きながらアディエルは調理を進める。手の込んだ物を作るには時間も遅すぎるためにメニューは野菜を煮たスープにオムレツ、パンと本当に簡単で時間のかからない物だ。
アディエルがスープの味を見ていると不意に玄関の扉が叩かれる。その音は手でノックしていると言うより何かがぶつかるような音だ。

「こんな時間に来客でしょうか？」
「なんて迷惑な奴だ。レオ、行ってこい」
「オレ？　まあ、アディちゃん出すわけにいかねーしな……」

渋々といった感じでレオナルドが立ち上がり玄関へと向かう。その間にも扉を叩く音は止むことはない。いや、むしろその音は強くなっていると言っても過言ではない。

「ったく。今何時だと思ってんだ！」

レオナルドが勢いよく扉を開くとゴツンと重い音が響く。

「やっべ……」

扉を開けた時に勢いそのままに来訪者を痛打してしまったことを悟りしまったと言う顔をするレオナルドが見たものは後ろ手に縄に縛られ額から血を流しているにも関わらず、凄く嬉しそうな顔をして気絶する銀髪の男の姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6948v/

天上を目指す者

2011年9月28日20時47分発行